

第Ⅱ部 2016-2017年度における各研究室等の活動

01 言語学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2017年度現在の教員数は、教授2名、准教授1名、専任講師1名、助教1名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室、中国語中国文学研究室の教員をはじめ、本学の日本語教育センター、および情報理工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では10名前後で、大学院修士課程へは、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。博士課程大学院生の間では博士論文を書く態勢が定着してきている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。また、2012年度からは、方法基礎にも出講している。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学学術機関リポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会等の委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年1人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。

当研究室では、1998年以来、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。そのURLは次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>

(4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、韓国、中国、ポーランド、ウズベキスタン、オーストラリアなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011年5月22日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012年に大学院生1名が1学期間香港中文大学に留学した。2013年にも、夏期講座に大学院生1名が参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

林 徹 (教授)	: チュルク語学	1997年4月～2018年3月
西村 義樹 (教授)	: 認知言語学	2004年4月～現在
小林 正人 (准教授)	: 歴史言語学	2010年4月～現在

(2) 講師の活動

梅谷 博之

在職期間 2016年度～

研究領域 モンゴル語

主要業績

(論文) 梅谷博之、「モンゴル語の副動詞語尾 *-tal* の後に現れる接尾辞 *-x* に関する覚え書き」、『北方言語研究』、7、69-81 頁、2017.2

梅谷博之、「モンゴル語の他動詞派生接辞 *-GA* が他動詞につく場合」、『ユーラシア諸言語の多様性と動態—20号記念号—』、463-471 頁、2018.3

梅谷博之、「モンゴル語の出動名詞派生接辞 *-lt* : 句への付加」、『東京大学言語学論集』、39、399-406 頁、2018.3

(学会発表)

国内、梅谷博之、「クリティック・付属語の認定基準に関する一考察」、2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2017.3.30

国内、梅谷博之、「モンゴル語ハルハ方言の文末助詞の音韻的特徴」、2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2018.3.29

(共同研究・受託研究) 共同研究、プラシャント・パルデシ、国立国語研究所、「名詞修飾表現（対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法）プロジェクトのサブプロジェクト」、2016～

共同研究、児倉徳和、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」、2015～2016

共同研究、山越康裕、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」、2015～2017

(3) 助教の活動

鍛冶 広真

在職期間 2016年度～

研究領域 エウエン語（ツングース諸語）

主要業績

(著書) 共著、鍛冶広真、『シベリア先住民の食卓 食べものから見たシベリア先住民の暮らし』（永山ゆかり、長崎郁編）第11章 トナカイを食べつくす』、東海大学出版部、2016.3

(論文) 鍛冶広真、「エウエン語における母音の挿入と脱落について」、『東京大学言語学論集』、39、391-398 頁、2018.3

(学会発表)

国内、KAJI Hiromi、Stem Alternation and Suffix Allomorphy in Ewen、Slavic-Eurasian Research Center 2016 Summer International Symposium: Young researchers' seminar、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2016.7.6

国内、鍛冶広真、「エウエン語の接尾辞付加と交替現象を引き起こす音韻的条件」、2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2017.3.30

国内、鍛冶広真、「エウエン語の派生接辞 *-LA*」、2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2018.3.29

(非常勤講師) 明海大学外国語学部、「音声学概論」、2013.4～、「日本語音声学」、2013.4～

聖心女子大学、「対照言語学Ⅱ」、2013.9～2018.3

(学会) 国内、日本言語学会、大会実行委員、2017.6～

(共同研究・受託研究) 共同研究、山越康裕、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」、2015～2017

(4) 外国人研究員・内地研究員

	2016年度	2017年度
内地研究員	1名	0名
外国人研究員	0名	1名
大学院人文社会系研究科研究員	4名	2名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「日本語における呼称としての役職語の用法」

「Revisiting the Tower of Babel バベルの塔再訪」

「日本語形容動詞の形式と意味—語幹に格助詞を伴う用法を中心に—」

「ケチュア語アヤクーチョ方言における関係節の用法—関係節内における主語・目的語の格標示を中心に—」

「家具のレビューの分析 家具を主食する形容詞・形容動詞」

「東京出身者の母音の変化について」

2017年度

「ハとガの距離との関係について」

「アイヌ語沙流方言における所属形普通名詞の形式と機能—所有用法の認知意味論的研究—」

「新語複合名詞の意味・用法の多様性—「～女子」の使用実態調査を通して—」

「茨城県東南部・千葉県北東部地域における方言語彙についての研究」

「選択要因から見る「痛みのオノマトペ」の性質」

「語頭の喉音によるリグ・ヴェーダの韻律復元」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

王一凡「大正新脩大藏經『一切経音義』出現異体字の傾向性」(指導教員) 西村義樹

高野啓太「メヒナク語の音声学・音韻論的研究」(指導教員) 林徹

田中太一「ウルドゥー語の[完了分詞 jaanaa]文の形式と意味」(指導教員) 西村義樹

梅田遼「The syntax and semantics of event nominalizations in Finnish」(指導教員) 林徹

浅岡健志朗「チェコ語の動詞 mit の所有用法と完了用法」(指導教員) 西村義樹

2017年度

氏家啓吾「名詞の意味と構文ネットワーク—「地図をたよりに」構文と非飽和名詞の分析から—」(指導教員) 西村義樹

内山祐里奈「ブルトン語の関係節について」(指導教員) 小林正人

大亦菜々恵「ヒッタイト語の-mu-動詞派生接辞」(指導教員) 小林正人

藤井俊吾「ドイツ語の完了助動詞選択とアスペクトの関係—「衝突・遭遇の動詞」の観察を通して—」(指導教員) 西村義樹

松延比呂伎「古典ギリシャ語の部分的読みを持つ形容詞について」(指導教員) 小林正人

ZHOU Lurong「現代中国語における「有+VP」構文について」(指導教員) 西村義樹

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

安達真弓「ベトナム語における指示詞と指示詞に由来する文末詞・感動詞」

〈主査〉林徹 〈副査〉西村義樹・小林正人・生越直樹・木村英樹

鄭若曦「空間表現に関する日中対照研究—認知意味論の立場から—」

〈主査〉西村義樹 〈副査〉林徹・小林正人・木村英樹・井上優

平沢慎也「前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか—多義論から多使用論へ—」

〈主査〉西村義樹 〈副査〉林徹・小林正人・友澤宏隆・鈴木亨

(乙)

なし

2017年度

(甲)

中澤光平「淡路方言の記述と系統」

〈主査〉小林正人 〈副査〉林徹・西村義樹・田中伸一・肥爪周二

高山林太郎「高知市方言の一拍挿入低起式化形」

〈主査〉西村義樹 〈副査〉林徹・福井玲・上野善道・中井幸比古

岩崎加奈絵「句の中核部を形成するハワイ語の機能語―‘ana」と方向詞を中心に―」

〈主査〉林徹 〈副査〉西村義樹・小林正人・梅谷博之・塩谷亨

(乙)

なし

02 考古学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

東大考古学研究室は、伝統的に東アジアの中の日本という視点を重視してきた。同時に、研究科内の常呂実習施設や韓国朝鮮文化研究室、あるいは学内の総合研究博物館、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、朝鮮半島、北アジア、西アジア等の考古学分野や年代測定学等の関連分野の教員と協力して、幅広く教育研究活動を展開している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

50年以上にも及ぶ北海道における調査では、常呂実習施設との共同調査として大島2遺跡の調査を09年よりおこなっている。

大貫を代表として07年度より開始した科研費課題である東京大学とロシア・ハバロフスク郷土博物館との国際共同調査では、15年度にハルピチャン遺跡の調査をした。また、同じ研究課題でのサハリン国立大学との国際共同調査では14年度にアド・ティモボ遺跡群、15年度にゴルノザボーツク2遺跡の調査をした。

佐藤を代表として15年度より開始した現生人類のアジア拡散南周ルートの研究(科学研究費基盤B)では、インドや東南アジア・台湾等での現地調査をおこなった。

設楽を代表として16年度からは前年度までの継承的な研究として東日本における食糧生産の開始と展開に対してレプリカ法を中心とする研究(科学研究費基盤研究A)をスタートさせ、16・17年度と研究をおこなった。また、11年度より開始した総合研究博物館所蔵の大洞貝塚出土遺物の整理作業を16年度におこなった。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

『東京大学考古学研究室紀要』は、16年度に31号、17年度は32号と順調に刊行された。すべて下記の研究室HP上にて公開している。

研究室のホームページのURLは<http://www.lu-tokyo.ac.jp/archaeology/>

(4) 国際交流の状況

本考古学研究室とロシア・ハバロフスク郷土博物館、同国立極東大学博物館、同サハリン総合大学博物館との間に結んでいる研究交流協定に基づき、科研費課題を遂行した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

大貫静夫 東北アジア考古学(18年3月末まで)

佐藤宏之 旧石器考古学・民族考古学(現在に至る)

設楽博己 縄文・弥生時代考古学(現在に至る)

(2) 助教の活動

石川 岳彦

在職期間 2016年度～現在

研究領域 東アジア考古学

主要業績

(著書) 共著、設楽博己・石川岳彦、『弥生時代人物造形品の研究』、同成社、2017.3

単著、石川岳彦、『春秋戦国時代 燕国の考古学』、雄山閣、2017.5

(論文) 石川岳彦、「東北アジア青銅器時代の年代」、『季刊考古学』、第135号、21-25頁、2016.5

石川岳彦・杉山章子・大山晋吾、「柴田常恵遺稿『雑録 人類学教室 考古学会のことども』—解題と翻刻—」、『國學院大學研究開発推進機構紀要』、第9号、113-144頁、2017.3

石川岳彦・杉山章子・大山晋吾、「柴田常恵遺稿『亡友追慕録』—解題と翻刻—」、『國學院大學博物館研究報告』、第34輯、2018.2

石川岳彦、「燕国釜の編年研究与东亚地区的瓮棺葬」、『瓮棺葬与古代东亚文化交流研究：瓮棺葬与古代东亚文化交流(中国・黄骅)国际学术研讨会论文集』、2018.3

(解説) 石川岳彦、「中国戦国時代の燕の土器の壺」、『知の回廊 -UMUT Hall of Inspiration 東京大学総合研究博物館常設展示図録』、234頁、2016.5

- (学会発表) 国内、石川岳彦、「春秋戦国時代の燕国貨幣からみた東北アジアへの鉄器拡散年代～最近の研究動向を受けて～」、東北亜細亜考古学研究会例会、2016.6.3
- 国内、石川岳彦、「春秋戦国時代から漢代の車傘・車蓋について ～傘柄銅箍を中心に～」、日本中国考古学会関東部会月例会、2016.10.29
- 国際、石川岳彦、「釜的編年与东亚地区瓷棺葬」、瓮棺葬与古代东亚文化交流国际学术研讨会、2017.5.13
- 国際、石川岳彦、「春秋戦国時代の燕国と中国東北地方」、中国東北地域 燕・秦・漢 長城研究の最新成果、大韓民国忠清北道中原文化財研究院、2017.9.27
- 国内、石川岳彦、「春秋戦国時代の燕国とその文化に関する考古学的検討」、日本中国考古学会 2017 年度大会、2017.12.3
- 国内、小林青樹・宮本一夫・野島永・古瀬清秀・新里貴之・石川岳彦、「燕国及び齊国の弥生文化への影響と近年の新知見」(ポスターセッション)、日本中国考古学会 2017 年度大会、2017.12.3
- (翻訳) 個人訳、李新全、「东大杖子墓地」、石川岳彦、『<コラム>東大杖子墓地』、『季刊考古学』、第 135 号、87-88 頁、雄山閣、2016.5
- (他機関での講義等) 共同研究員、國學院大學研究開発推進機構、2016 年 4 月～2018 年 3 月

(3) 外国人研究員・内地研究員

2017 年度

外国人研究員 エカテリーナ・コブザール (サンクトペテルブルク人文大学博士研究員)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

- 「福岡県・佐賀県における弥生時代の投弾形土製品に関する基礎的考察」
- 「東日本の小銅鐸の系統の研究」
- 「重圏文鏡の研究」
- 「東日本大震災における考古学発掘調査と文化財レスキューの在り方について」

2017 年度

- 「江戸・宿場町・農村での植木鉢出土様相の研究」
- 「札幌市旧琴似川流域における擦文集落」
- 「東大本郷構内遺跡出土の徳利の釘書きから見る酒の流通」
- 「三角縁神獣鏡の工人・時期差に関する考察—銘文字形分析から—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

舟木太郎「インド中央部中期・後期旧石器インダストリーと現生人類の拡散——ジュワラプーラム遺跡群資料の再検討——」(指導教員) 佐藤宏之

2017 年度

金崎由布子「アンデス文明形成期後期から末期の社会変化とその過程——ペルー北部中央山地ワヌコ盆地の事例を中心として——」(指導教員) 佐藤宏之

太田圭「北関東地域における縄文文化中期から後期の動態——栃木県域の分析を中心として——」(指導教員) 佐藤宏之

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲) (乙)

なし

2017 年度

(甲) (乙)

なし

03 美術史学

1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

現在の教員は、教授2名、准教授1名である（2008年3月までは助教1名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言ひ難い。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員3名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センターの協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も教授2名、准教授1名が美術史学会の常任委員を務め、学会活動を主導した。2017年3月、2018年3月には美術史学会東支部例会を担当した。このほか1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に34号（2018年）に至っている。教育活動として毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流も盛んである。2016年1月には、ユキオ・リピット氏（ハーバード大学教授）を迎え、文学部新日本学特別講義「日本中近世の画家と米国における日本美術展覧会」を開講した。2017年2月から4月にかけて、高岸輝准教授が、米国ニューヨークのコロンビア大学パーク日本美術研究センター客員教授として現地で日本美術史の講義を行った。2017年3月の時点で外国人留学生の博士課程在籍者3名がいた。1名が単位を取得し退学したので2018年3月の時点では2名である（退学した学生は2018年に第16回『美術史』論文賞を受賞し、博士学位請求論文を提出した）。2016年2月19日及び21日には、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のファビオ・ランベッリ教授をお招きし、九州大学大学院人文科学府藝術学研究室との共催で「宮廷・宝物・美術」及び「聖地と宝物」という研究集会を開催した。2017年2月17日にはハイデルベルク大学のダグマール・アイヒベルガー教授をお招きし、“*Gratia Sola Dei (1568): Image and Text in a musical Manuscript for the Wedding of Renata of Lorraine and William V of Bavaria*”という講演をしていただき、さらに懇親会において学生との交流を深めた。また2017年10月21日には、国際学士院連合総会が初めて日本学士院で開催されることを記念しての特別記念講演会のために来日されたマデリン・キャヴィネス、タフツ大学教授兼国際学士院連合会長の御講演『「ザクセンシュペーゲル」写本における女性とマイノリティ』の翻訳原稿作成とアテンドを研究室メンバーで行なった。また、宗教改革500周年を記念しての獨協大学における宗教改革と美術に関する研究集会に来日されたボン大学アンヌ＝マリー・ボネ教授とも密な研究交流を行なった。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 佐藤康宏教授（日本美術史）
- 秋山聡教授（西洋美術史）
- 高岸輝准教授（日本美術史）

(2) 助教の活動

当該期間は助教不在のため特記事項なし。

(3) 外国人研究員・内地研究員

- チェルシー・フォックスウェル（外国人研究員、シカゴ大学准教授）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 「扇面法華経冊子の世俗性と宗教性」
- 「院政期における普賢菩薩画像制作とその背景」
- 「大正末期から昭和十年代における田河水泡の創作活動について」
- 「横尾忠則の60年代ポスター作品における旭日旗の解釈について」
- 「フラ・アンジェリコの静謐性—サン・マルコ第7室「嘲弄」に関して—」
- 「児島虎次郎作品の表現と主題について—「和服を着たベルギーの少女」を中心に—」
- 「16～17世紀のメキシコ植民地美術の変容」
- 「「バリオーニの祭壇画」におけるラファエロの人物描写」
- 「MIHO MUSEUM 所蔵棺床屏風の研究」
- 「鳳凰堂九品来迎図に込められた頼通の意図」
- 「ドガとロートレックによる娼家描写の比較分析」
- 「千利休が追求した茶の美」
- 「董其昌絵画における「傲趙孟頫」—「秋興八景図冊」第一図を中心に—」
- 「柴田是真「漆絵」の成立と展開について」
- 「古代ローマの庭園画におけるイリュージョンイズム—リウィアの別荘の庭園画とポンペイ庭園画の比較を中心に—」
- 「快慶作品の宋代彫刻の受容の様相—安倍文殊院文殊菩薩半跏像を中心に—」
- 「『トリノ＝ミラノ時禱書』における「画家G」
- 「太平洋戦争と日本のシュールレアリスム」

2017年度

- 「フィレンツェ、サンタ・クローチェ聖堂 聖シルウエステル伝壁画に関する一考察」
- 「南蛮漆器の文様についての考察」
- 「徐渭の花卉雑画について—泉屋博古館蔵の「花卉雑画卷」を中心に—」
- 「少女マンガ家山岸涼子に関する考察」
- 「高松塚古墳壁画の制作意図について」
- 「京から江戸へ 出光本江戸名所図屏風について」
- 「ジョルジュ・スーラ研究《ポーズする女たち》を中心に」
- 「ルネ・マグリットの1950年代～60年代」
- 「ユディトをモチーフとした絵画作品を巡る考察」
- 「ルネ・マグリットの《大戦》の意義—絵画的視点及びグラフィックデザイン的視点を中心に—」
- 「近世宗教画における画中光の展開」
- 「《松崎天神縁起絵巻》試論—料紙、絵の様式、境内描写からみた松崎本の新たな位置付け—」
- 「ムハとスラヴ叙事詩とチェコ」
- 「オディロン・ルドン《オルフェウス》研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- 木全裕子「燕文貴「江山楼観図」とその画風の伝承について」(指導教員)板倉聖哲
- 瀧良介「ニコラ・プッサンの後期風景画の生成について—《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》を中心に—」(指導教員)秋山聰
- 楊雅菲「劉俊の仙人図—東アジアの視点から」(指導教員)板倉聖哲

2017年度

- 朝倉南「マルコ・ドッジオーノ再評価「接吻する幼児イエスと洗礼者ヨハネ」図像におけるレオナルド・イメージの合成」(指導教員)秋山聰
- 八田真理子「蔡山筆羅漢図について—元時代における禅月羅漢受容をめぐって—」(指導教員)板倉聖哲
- 竹崎宏基「円山応挙晩年における経営戦略—宮廷への接近と画風転換を視点として—」(指導教員)佐藤康宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

なし

(乙)

増記隆介「院政期仏画と唐宋絵画」

〈主査〉高岸輝 〈副査〉佐藤康宏・板倉聖哲・塚本鷹充・泉武夫

2017年度

(甲) (乙)

なし

04 哲学

1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木巖翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年からは、思想文化学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的な研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2018年3月現在の所属教員は、教授3名、准教授1名、助教2名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理哲学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している（なお、外国人専任講師1名が2016年度前期まで在職）。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から毎年進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選ばれた院生で毎年ほぼ満たされている。関心もたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあって重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披瀝と研鑽の場として機能している。2017年4月からは、伝統ある「哲学会」の歴史と近代日本哲学の形成に果たした役割を検証するために、『哲学雑誌』のバックナンバーのアーカイブ化をもとにした研究プロジェクトを研究室を中心に立ち上げ、科学研究費補助金の申請も行った（幸いにも、採択され、その後、実質的な研究を進めている）。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書もすでに刊行している。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2018年3月末までに、計10回の BESETO 哲学会議が開催された。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 一ノ瀬正樹 (教授、因果性の哲学・人格概念の研究)
榊原哲也 (教授、現象学・ドイツ現代哲学)
納富信留 (教授、西洋古代哲学、西洋古典学)
鈴木泉 (准教授、近世形而上学・現代フランス哲学)
Richard Dietz (専任講師、現代英米哲学・言語哲学)

(2) 助教の活動

野村 智清

- 在職期間 2015年度～2017年度
研究領域 アイルランド哲学とバークリ
主要業績

(論文) 野村智清, 「バークリと常識」, 『哲学雑誌』 131 巻 803 号, 2016, pp. 140-158

(学会発表) 野村智清, 「古典的テキストを巡る方法論 — 一ノ瀬哲学を手掛かりとして」, 因果・動物・所有: 一ノ瀬哲学をめぐる対話, 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区), 2017年12月24日

野村智清, 「バークリと証言」, 日本哲学会第76回大会, 一橋大学(東京都国立市), 2017年5月21日

富山 豊

- 在職期間 2016年度～
研究領域 フッサール現象学
主要業績

(著書) 富山豊(共著), 『ワードマップ現代現象学』, 新曜社, 2017年

(論文) 富山豊, 「現象学は外在主義から何を学べるか」, 『哲学』, 68号, 2017年, p. 155-168

富山豊, 「フッセリアーナ資料集第1巻『論理学』講義(1896)を読む」, 『フッサール研究』, 第15号 2018年, pp. 124-135

(3) 外国人教員の活動

ディーツ リチャード Richard Dietz (専任講師)

- 在職期間 2011年度10月～2016年度9月
研究領域 Philosophy of Language, Epistemology, Philosophical Logic
主要業績

(論文) Richard Dietz, 「Epistemicdisagreement」, 『哲学雑誌』 131 巻 803 号, 2016年10月, pp. 98-135

(学会発表) Richard Dietz, 「Roughcomparability, maximisation, and competitiveness」, Language and World workshop, Department of Philosophy, University of Hamburg, Germany, 2017年3月17日

Richard Dietz, 「Gradability, vagueness, and parity」, Semantics Research Group, 慶應義塾大学(東京都港区), 2016年12月9日

Richard Dietz, 「Gradability, vagueness, and parity」, SOCREAL 2016, 北海道大学(北海道札幌市), 2016年10月30日

Richard Dietz, 「Comment on Franz Berto's "Modal Meinongianism: Conceiving the Impossible"」, Tokyo Workshop on Meinongianism: Nonexistence, Contradiction and Metaontology, 首都大学東京(東京都八王子市), 2016年10月15日

Richard Dietz, 「Notes on delineationism」, CCPEA conference, Seoul National University, Seoul Korea, 2016年8月20日

Richard Dietz, 「Gradability, vagueness, and parity」, Tokyo Forum for Analytic Philosophy, 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区), 2016年7月15日

Richard Dietz, 「Natural language semantics of gradable adjectives and value theory」, Research Seminar, 広島大学(広島県東広島市), 2016年7月5日

Richard Dietz, 「Confirmation and aboutness」, Language & Reality workshop, 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区), 2016年6月25日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 「カント批判哲学における判断力の概念」
- 「演劇における演技の本質について」
- 「多文化主義についての一考察」
- 「J.S.ミル『自由論』と現代インターネット社会について」
- 「後期ウイトゲンシュタイン哲学における文法と必然性」
- 「クリスプ「徳の功利主義」の明確化と批判」
- 「D.ヒューム『人間本性論』における「類似」の問題」
- 「『判断力批判』における芸術について」
- 「マイノング『想定について』における「対象の把握」について」
- 「カント『純粹理性批判』における「現実性」について」
- 「ベルクソンの持続概念」
- 「ベルクソンの自由論について—解放の視点を導入することの妥当性—」
- 「デフレ主義的真理の一般性と保存拡大」
- 「『物質と記憶』における「映画」的瞬間—「現実」概念についての試論」
- 「<語る言葉>と<語られた言葉>:『知覚の現象学』におけるメルロ・ポンティの初期言語論」
- 「『純粹理性批判』における時間論の研究」

2017年度

- 「不安についての哲学的考察」
- 「サルトルの自由論と現代」
- 「マルブランシュ『真理の探究』における自由の問題について」
- 「メルロ＝ポンティにおける視覚の問題」
- 「言語の複雑さの成立」
- 「生殖技術が達成する普遍的「生命の質」向上への指向とその批判可能性」
- 「関係性を取り入れた動物倫理の展開可能性の検討」
- 「国家の人格性に関する一考察—ヘーゲル『法の哲学』を中心に—」
- 「ウイトゲンシュタインの言語論」
- 「バタイユの共同体論について」
- 「永遠回帰の研究」
- 「ダニエル・デネット『コグニティブ・ホイールズ』における「フレーム問題」について」
- 「アリストテレスにおける論証と知識」
- 「『自然宗教に関する対話』におけるヒュームの立ち位置」
- 「トマス・アクィナスにおける神の能力について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- 有賀雄大「デカルト『省察』における知識論の研究」(指導教員) 鈴木泉
- 野瀬彰子「ベルクソンにおける直観と生命—『創造的進化』から『道徳と宗教の二源泉』への発展」(指導教員) 鈴木泉
- 山下梨津「ハイデガー『存在と時間』における「先駆的決意性」の意味について—自由の問いの視座から—」(指導教員) 榊原哲也
- 本間裕之「ドゥンス・スコトゥスの個別者理解について」(指導教員) 鈴木泉

2017年度

- 森山玲子「ドゥルーズ『差異と反復』における反復論の研究」(指導教員) 鈴木泉
- 三浦隼暉「後期ライブニッツにおける有機的物体とその機構」(指導教員) 鈴木泉

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

次田瞬「自然主義的意味論の研究」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉 榊原哲也・納富信留・飯田隆・戸田山和久

(乙)

なし

2017年度

(甲)

野村智清「パークリと経験しえぬもの—その方法を巡って—」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉 納富信留・鈴木泉・植村恒一郎・河本英夫

川瀬和也「ヘーゲル『大論理学』「概念論」の研究」

〈主査〉 榊原哲也 〈副査〉 鈴木泉・高山守・久保陽一・大河内泰樹

(乙)

なし

05 倫理学

1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道德意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授2名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度4名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2016年度7名、2017年度8名）。研究室全体としてみれば、学生、院生あわせて30名ほどだが、学生、院生の研究テーマは、古代ギリシア哲学からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年一回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、在籍中の大学院生やオーバドクターの研究成果を発表する場ともなっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

教授 頼住 光子

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－現在

助教 岡田 大助

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－2017年3月

助教 池松 辰男

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2017年4月－現在

(2) 助教の活動

岡田 大助

在職期間 2013年4月－2017年3月

研究領域 日本仏教倫理思想史

主要業績

(論文)

岡田大助、「親鸞『教行信証』における六字釈私釈について」、『倫理学紀要』、第24輯、153-175頁、2017.3
(共同研究・受託研究)

受託研究、岡田大助、社会技術研究開発センター、RISTEX、「高度情報社会における責任概念の策定」、2016

池松 辰男

在職期間 2017年4月－現在

研究領域 倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

主要業績

(著書)

共著、寄川条路(編)、池松辰男他11名(著)、『ヘーゲル講義録入門』、法政大学出版局、2016.9

共著、荒谷大輔、小長野航太、桑田光平、池松辰男、『ラカン『精神分析の四基本概念』解説』、せりか書房、2018.2

(論文)

池松辰男、「市民社会における欲求と世界史における情熱 ―ヘーゲル「客観的精神の哲学」の動態をめぐって」、
『倫理学年報』、第 67 集、2018.3

池松辰男、「回帰する自然／自然の残滓 ―ヘーゲル「客観的精神の哲学」における自然の地位・試論」、『倫理
学紀要』、第 25 輯、2018.3

(学会発表)

国内、池松辰男他 11 名、「ヘーゲル講義録研究 ―今後のヘーゲル研究の課題と展望」、日本ヘーゲル学会第 23
回研究大会、立正大学、2016.6.18

国内、池松辰男他 5 名(発表者)、松岡健一郎、高城大樹(コメンテーター)、「最新研究サーベイ ―ヘーゲル講
義録入門」、日本ヘーゲル学会第 25 回研究大会、同志社大学、2017.6.18

国内、黒崎剛、池松辰男、伊藤功、川瀬和也、「ハイデルベルク・エンチュクロペディー刊行 200 年」、日本ヘ
ーゲル学会第 26 回研究大会、東洋大学、2017.12.16

(会議主催(チェア他))

国内、日本倫理学会第 68 回大会主題別討議「自由・恩寵・時間性 ―縦読みの思想史、グループ・ワークの実
践として」、弘前大学、2017.10.7

(学会)

国内、日本ヘーゲル学会、編集委員、2017.4～現在

(3) 外国人研究員・内地研究員

Etienne A. F. Staehelin, 2017.10.1-2018.3.31 (研究事項:「詮慧『正法眼蔵御聞書』における「時間」)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

『直毘霊』における神への畏れについて

「葉隠」における純一無雑

「国家と戦争:ヘーゲルの政治思想における戦争の倫理的意義

「ニーチェ『道徳の系譜学』における暴力性の解釈

「個性と運命―ヘーゲル『精神現象学』の「作品 Werk」をめぐる思考

「空海における悟りの理解について

『教行信証』における悪人住生について―阿闍世の五逆罪における大無量寿経の救済除外に対する親鸞思想をめぐって―

2017 年度

「レヴィナスのブランショ解釈

「日本の風土と精神性

「西田幾多郎『現実世界の論理的構造』における生死観

「カント『実践理性批判』 範型論の読解―自然法則が範型として機能することについて―

『エミール』 倫理と自由の所在

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

伊佐進「アリストテレス倫理学における友人と幸福について」(指導教員)熊野純彦

浅井尚希「親鸞の三願転入観―第十九願理解に着目して―」(指導教員)頼住光子

柳田詩織「カントの実践的認識について―道徳における叡知的なものの理解―」(指導教員)熊野純彦

2017 年度

大胡高輝「『教行信証』における『十住毘婆沙論』引文の位置―般舟三昧から称名念仏への転形―」(指導教員)頼住光子

小泉圭徳「リクール倫理思想における物語の問題―再形象化の概念を中心に―」(指導教員)熊野純彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲)

矢島壮平「アダム・スミスの道徳哲学と人間本性の合目的性」

〈主査〉 頼住光子 〈副査〉 熊野純彦・関根清三・佐藤康邦・勢力尚雅

池松辰男「ヘーゲル「主観的精神論」研究——精神における主体の生成と条件——」

〈主査〉 頼住光子 〈副査〉 熊野純彦・榊原哲也・小田部胤久・山田忠彰

(乙)

なし

2017 年度

(甲)

田島卓「エレミヤ書における罪責・復讐・赦免——応報倫理の展開——」

〈主査〉 頼住光子 〈副査〉 熊野純彦・市川裕・関根清三・魯恩碩

(乙)

なし

06 宗教学宗教学史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程（宗教学研究室）における研究は宗教の経験科学的研究である。2016～17年度の研究活動は、教授4、准教授1、助教1の計6名の教員を中心として行われた。研究分野は、宗教理論（宗教概念批判、宗教学史）、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史（中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエン特、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、慰霊と追悼、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）、発掘調査（イスラエル）、などをカバーしている。方法論は、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学、比較宗教学などである（詳しくは、教授・准教授については本書第Ⅲ部を参照のこと）。宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学・応用倫理センター（死生学グローバルCOE拠点の継承）との活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・研究動向サーヴェイ論文・研究ノート等が掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会誌的な性格をもち、同窓生や留学生の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。2016～7年度には、挑戦的研究として研究室・同窓生有志により「AI・ロボット勉強会」を組織し、AIの発達が宗教と宗教研究にどのような影響を及ぼすかについて共同研究を行った。さらに2017年度には日本宗教学会年次大会の開催校として、大会全体の運営、オープニング・シンポジウムの企画と実施に研究室を挙げて取り組んだ。その際、研究室に保管されていた、日本宗教学会の初期の会議資料や1958年国際宗教学宗教学史学会（IAHR）東京・京都大会に関する資料、また東大総合図書館に関する資料（本研究室歴代教授、姉崎正治・岸本英夫の図書館長時代にまつわるもの）を、学生・院生有志による解説をつけ、展示した。2017年度には本研究室所属の院生・学生がそれぞれの博士論文・卒業論文により、研究科長賞・学部長賞を受賞したことも特筆したい。

本専修課程の最近の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（15名前後）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事は、増加する学部生や、他大学からの大学院新入生が研究室に馴染むための、かつ教員が各学生の人柄や興味関心を把握するための場として、一層意義を増している。また、この旅行では東京近隣の宗教施設を複数見学するが、その企画は博士課程1年次の院生全員が担当する。このため文献研究を専門とする院生にもフィールドワークの実地経験のよい機会となっている。

国際研究交流としては、教員の一人が2017年7月から国際宗教学宗教学史学会（IAHR）の事務局長を代行しているため、IAHRの事務局が研究室に置かれる形になっている。IAHRは1950年に創立された宗教学分野最大の国際的学術組織であり、その潤滑な運営に大きく貢献している。

研究室として招聘し、講演を実施した主な外国人研究者は以下の通りである。

2016年4月	トマス・オリルスキ	ニューマン・インスティテュート教授
2016年5月	エドワード・ホフマン	ニューヨーク・イエシヴァ大学教授
2016年10月	ヨナタン・メイール	イスラエル ベイグリオン大学教授
2016年10月	ウィラード・マラカーン	デ・ラ・サール大学准教授
2017年1月	モルデハイ・アヴィアム	キネレト大学ガリラヤ研究所所長
2017年10月	カナ・ベルマン	イスラエル ベイグリオン大学教授
2017年10月	ヨーン・ボルプ	オーフス大学教授
2018年3月	アドルル・ラジュ	インド工科大学教授ティルパティ校教授
2018年3月	李有霆	國立臺灣大學 國家發展研究所

付け加えれば、学生の短期留学や夏季休暇を利用しての発掘調査への参加も毎年行われている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 鶴岡 賀雄 : 西洋神秘思想、近現代宗教思想 (1998年4月～2018年3月)
市川 裕 : 一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語 (1991年4月～)
池澤 優 : 中国宗教研究、祖先崇拜、生命倫理 (1995年4月～)
藤原 聖子 : 宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教 (2011年4月～)
西村 明 : 宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化 (2013年4月～)

(2) 助教の活動

江川 純一

在職期間 2016年4月～

研究領域 イタリア宗教史学、宗教学学問史

主要業績

(著書)

編著、江川純一・久保田浩、『呪術』の呪縛 (下)』、リトン、2017.3

(論文)

江川純一、「「**magia**」とは何かーデ・マルティノーと、呪術の認識論ー」、江川純一・久保田浩編、『呪術』の呪縛 (下)』、2017.3

(書評)

谷口江里也、『旧約聖書の世界』、『週刊読書人』、2016.10

畑中章宏、『21世紀の民俗学』、『週刊読書人』、2017.12

(学会発表)

国内、江川純一、「宗教史学における差異と反復ーペッタッツォーニとエリアーデ」、日本宗教学会、早稲田大学、2016.9.11

国内、江川純一、「イタリア宗教史学を作ったものーヴィーコ・近代主義・日本宗教ー」、「宗教の近代」研究会、親鸞仏教センター、2017.7.29

国内、江川純一、「イタリア宗教史学派はデュルケームをいかに読んだか?」、日本宗教学会、東京大学、2017.9.17

国内、江川純一、「ファシズム期イタリアにおける宗教史学・人類学・民俗学」、「人類学/民俗学の学知と国民国家の関係ー20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」研究会、国立民族学博物館、2017.10.28

国内、江川純一、「20世紀イタリアの芸術と文化」研究会、京都芸術造形大学外苑キャンパス、2018.3.18

(マスコミ)

「2016年の収穫」、『週刊読書人』、2016.12.16

「2017年の収穫」、『週刊読書人』、2017.12.15

(3) 外国人研究員・内地研究員

MONTROSE, VICTORIA

BERMAN, MICHAEL

MACARAAN, WILLARD ENRIQUE

ASHUR, AMIR

近藤光博

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「「引きよせの法則」とユングの「共時性」について」

「ジョルジュ・バタイユの内的体験とは何か」

「ブラック企業とカルト宗教の組織構造の比較検討」

「ハインリヒ・ゾイゼと水平的他者ーその神学的意味の変化と都市市民社会との関係ー」

「柳田国男『先祖の話』における戦死者論の検討ー七生報国と無縁仏ー」

「「聖地」としての東京ディズニーランド」

「草津温泉感謝祭の宗教性と観光化」
「真宗カウンセリングにみる宗教とカウンセリングの関係」
「葬儀の簡素化はなぜ成功したのか？ 群馬県における新生活運動を例に」
「イスラエル統一王国王権論再考」
「ひとりかくれんぼをめぐる諸事象の社会学的考察」
「岡潔の宗教観」
「ゆるキャラの源流を日本の多神教信仰とする説の検討」

2017年度

「単語の分散表現を用いた宗教的文献の分析—聖書、クルアーン、バガヴァッド・ギーターを例に—」
「太田龍の宗教に対する見方と反ユダヤ主義—「辺境最深处」から「爬虫類型宇宙人」まで—」
「トルコの政教分離とエルドアン大統領の強権化に関する考察」
「小学校道徳教育における宗教的情操教育の現状と問題点—平成30年度検定教科書の分析を通して—」
「日本のボーイスカウト運動における宗教の役割」
「エチオピア聖人伝から見る聖人の姿」
「明治後期における神道改革の潮流とその帰結」
「綱脇龍妙の「救癩」における思想と実践」
「真言宗における近代化の一面—梅尾祥雲を中心として—」
「近世後期江戸町人の参詣行動に関する考察」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

久松彰彦「近代日本における仏教と心理学」〈指導教員〉西村明
徳田安津樹「ニコラウス・クザーヌス『知ある無知について』の研究」〈指導教員〉鶴岡賀雄
膽畑隆明「大衆文化の中のゾロアスター教・マニ教的二元論」〈指導教員〉藤原聖子
熊谷友里「ニコラ・バレの修道思想と共同体論」〈指導教員〉鶴岡賀雄
高瀬航平「和辻哲郎の宗教理解と宗教研究について—大正期の和辻の仏教研究を手がかりに—」〈指導教員〉西村明
田中浩喜「現代フランスのライシテ研究—セクト論争とヴェール論争の分析から—」〈指導教員〉藤原聖子

2017年度

金佳麟「韓国済州島女神神話研究の現状と諸問題」〈指導教員〉西村明
丁小麗「イスラームと中国思想との出会い—16、17世紀の原回儒である王岱輿及びその『清真大学』から—」〈指導教員〉市川裕
MORROW Avery Hatch「New Religious Movements Strategies Towards the State in the Meiji and Taisho Periods（明治大正における新宗教運動の対国家戦略）」〈指導教員〉西村明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

佐藤清子「アンテベラム期合衆国プロテスタントの信教の自由概念—反カトリシズムとの関係から—」
〈主査〉藤原聖子 〈副査〉島藺進・森本あんり・増井志津代・久保田浩
岡田絵美「The Two Truths of Nonviolence: A Study of Vietnamese, Tibetan, and Japanese Mahayana Buddhist Movements for Peace(非暴力の二つの真理—ベトナム、チベット、日本の大乘仏教にもとづく平和運動を事例に—)」
〈主査〉藤原聖子 〈副査〉池澤優・島藺進・ポールスワンソン・矢野秀武
袴田玲「グレゴリオス・バラマスの身体観—東方キリスト教的人間観の研究—」
〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉高橋英海・宮本久雄・土橋茂樹・大森正樹
齋藤公太「日本神学の形成—近世日本における『神皇正統記』の受容史」
〈主査〉西村明 〈副査〉池澤優・島藺進・白山芳太郎・桐原健真

(乙)

なし

2017年度

(甲)

嶋田弘之「インドネシアの「預言者の医学」—神の癒しを媒介する技術—」

〈主査〉池澤優 〈副査〉西村明・堀江宗正・菊地達也・木村敏明

志田雅宏「ナフマニデスの聖書解釈研究——知の源泉とその彼方——」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・矢内義顕・勝又直也・高木久夫

袴田渉「ディオニュシオス・アレオパギテースの神化論」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・高橋英海・宮本久雄・土橋茂樹

飯島孝良「一休「像」の戦後史—日本禅文化論の語る「伝統」と「近代」—」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉西村明・島藺進・安藤礼二・ダヴァンディディエ

(乙)

なし

07 美学芸術学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方での日本の学界における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、外国人研究生をコンスタントに受け入れている。

本研究室では現在 JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要 (1976 年創刊) と『美学芸術学研究』(1982 年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995 年改題) と題された和文の紀要の 2 つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、美学会東部会等との共催で、ジェラルド・チプリアーニ (アイルランド国立大学)、リチャード・シュスターマン (フロリダ・アトランティック大学)、キャロル・メニエ (ローザンヌ大学)、パウル・ツイッヒ (ユトレヒト大学) といった著名研究者を迎え講演会を開催するなど、海外との学術交流に努めている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2008 年に着任した安西信一准教授 (2008 年着任。庭園美学、環境美学) が 2014 年 2 月に急逝したため、2014 年度は、残された渡辺裕教授 (在籍は 1996 年～。聴覚文化論、音楽社会史)、小田部胤久教授 (在籍は 1996 年～。近代美学、感性文化論) の 2 名で研究室のすべての運営を行うことを強いられた。幸いなことに、2015 年 4 月より、三浦俊彦教授 (分析哲学、分析美学) に加わってもらうことができるようになり、現在は 3 名の体制によって、少しでもバランスのとれた教育活動を展開できるよう心がけている。

(2) 助教の活動

桑原 俊介

在職期間 2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月

研究領域 美学

主要業績

(著書)

単著、桑原俊介、『シュライアマハーの解釈学——近代解釈学の成立史』、御茶の水書房、2016.2

柳澤 史明

在職期間 2017年4月1日～

研究領域 芸術学

主要業績

(著書)

共著、澤田直編、『異貌のバリ 1919-1939——シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化』、水声社、2017.7

単著、柳沢史明、『〈ニグロ芸術〉の思想文化史』、水声社、2018.3

(論文)

Fumiaki YANAGISAWA, 「Représentations des Noirs à travers le « rythme » : les images panafricaines apportées par les « arts nègres »」、『Cahiers du CRÉILAC』、n°1、pp. 37-54、2016.1

Fumiaki YANAGISAWA, 「La naissance du tableau en Afrique noire: Kalifala Sidibé et l'« art nègre »」、『Aesthetics』、No. 20、pp. 38-49、2016.3

柳沢史明、「フランス人宣教師らが見たアフリカの〈呪物〉と〈芸術〉——アフリカ宣教会とダオメ」、『民族芸術』、33号、39-45頁、2017.3.2

(非常勤講師)

國學院大學、「特殊講義」、2016.4～2017.3、「基礎演習」、2017.4～2018.3

江戸川大学、「ヴィジュアル・コミュニケーション」、2016.4～2018.3

昭和女子大学、「美学」、2016.4～2016.9、2017.4～2017.9

桜美林大学、「芸術と社会」、2016.9～2017.3、2017.9～2018.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

アンナ・ツシャウアー (2016年9月～2017年8月)

楊冰 (学振PD、2015年4月～2018年3月)

神保夏子 (学振PD、2016年4月～)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「コンピューター画面と「大ガラス」—2次元と3次元のはざまとして—」

「日本におけるスターバックスの受容—サードプレイス概念をメインに—」

「競技ボートの美学—大学スポーツの例を中心に」

「情報環境のお笑い番組の芸術的独自性に関する問題」

「『関係性の美学』理論を用いたリー・ミンウェイの評価」

「アール・ブリュット、アウトサイダー・アートの観点からみた山下清の受容について」

「フィクションと可能世界論」

「マウリス・プティパの「白鳥の湖」改訂に見られる19世紀末の白鳥イメージ」

「ディドロ「1767年のサロン」におけるヴェルネ散策研究—絵画批評への哲学小説的形式の導入とその効果—」

「公共劇場の可能性と限界—世田谷パブリックシアターの事例を中心に」

「『関係性の美学』の解釈の変容—リレーショナルアートから「地域アート」へ」

「漫才の“芸”と“共感”—マンザイブームに至る漫才の考察—」

「デジタル技術時代の写真表現—トーマス・ルフの作品を中心とした考察」

「都市を見ることと都市から見ること」

2017年度

「芸術作品における「見る・見られる」ジェンダー」

「映画『ファイト・クラブ』研究」

「映画『この世界の片隅に』研究」

「アメリカン・ニューシネマにおける真実らしさ」

「舞踊の美学」

「ポピュラー音楽制作過程における編曲（アレンジ）の意義」

「漫才の笑いにおける<ツッコミ>の美的特性に関する考察」

「テクノロジーによるスキルの代替が音楽演奏の定義に及ぼす哲学的問題—ゴドロヴィッチの演奏論を中心に—」
「劇場工学とマーケットによる路上演劇史の神話解体」
「ユードイ・メニューインにおけるヨガ」
「不可能性への足踏み—カント『判断力批判』の崇高論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

具慧原「小津安二郎映画の批評における「無人のショット」の受容—1980年代までの議論を中心に—」(指導教員) 小田部胤久

2017年度

村重陵「ペーター・ソンディの文芸解釈学と批評実践の関係」(指導教員) 小田部胤久

曹有敬「グスタフ・マーラーの引用技法解釈の変遷—G・リゲティの「コラージュ」概念と「想像の空間」論を中心に—」(指導教員) 渡辺裕

亀山凌「マイケル・フリードの美術批評および美術史における確信の概念について」(指導教員) 小田部胤久

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

松原薫「J.S. バッハと18世紀における対位法の美学」

〈主査〉渡辺裕 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・磯山雅・大角欣矢

(乙)

なし

2017年度

(甲)

青田麻未「環境を批評する—英米系環境美学の思想史的研究・理論構築—」

〈主査〉三浦俊彦 〈副査〉渡辺裕・小田部胤久・西村清和・津上英輔

瀬尾文子「近代市民社会と宗教音楽—《エリヤ》に至るオラトリオの世俗化の論理—」

〈主査〉渡辺裕 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・ヘルマンゴチェフスキ・星野宏美

(乙)

なし

08 心理学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授2名、准教授2名、助教2名、日本学術振興会のPD・研究員・大学院生・学部生ら約70名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・運動制御・社会認知などの心理現象を心理物理学的手法・脳科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。毎年、教養学部文科3類や他の科類の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトを対象とした実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果をまとめている。

大学院教育に関しては、指導体制の充実を図り、数名の課程博士（博士（心理学））が毎年誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本視覚学会・日本認知科学会・日本神経回路学会・日本認知心理学会・認知神経科学会・日本神経科学学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第になくなっていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

横澤 一彦

専門分野 統合的認知の心理学

在職期間 1998年10月～ 大学院人文社会系研究科 助教授

2006年4月～現在 同 教授

今水 寛

専門分野 運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

在職期間 2015年9月～現在 大学院人文社会系研究科 教授

村上 郁也

専門分野 知覚心理学、認知神経科学

在職期間 2005年4月～ 大学院総合文化研究科 助教授

2013年4月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

鈴木 敦命

専門分野 実験心理学、認知心理学

在職期間 2017年9月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

(2) 助教の活動

中島 亮一

専門分野 実験心理学

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(論文)

Nakashima, R., Komori, Y., Maeda, E., Yoshikawa, T., & Yokosawa, K., 「Temporal characteristics of radiologists' and novices' lesion detection in viewing medical images presented rapidly and sequentially」、『Frontiers in Psychology』、7(1553)、1-10 頁、2016.10

Nakashima, R. & Kumada, T., 「The whereabouts of visual attention: Involuntary attentional bias toward the default gaze direction」、『Attention, Perception & Psychophysics』、79(6)、1666-1673 頁、2017.7

Nakashima, R. & Yokosawa, K., 「To see dynamic change: continuous focused attention facilitates change detection, but the effect persists briefly.」、『Visual Cognition』、26(1)、37-47 頁、2018.2

(学会発表)

国際、Ueda, S., Nakashima, R., Iseki, R., & Kumada, T., 「Influence of selecting reference points that suit for a motor intension on motor control during visuomotor tracking task.」、International Meeting of Psychonomic Society (PS2016)、Granada, Spain、2016.5.8

国内、中島亮一・上田彩子・日根恭子・岩井律子・熊田孝恒、「目標の有無と効果の現れ方が自動制御時の操作主体感に与える影響」、日本認知心理学会第 14 回大会、広島、2016.6.18

国際、Nakashima, R., Ueda, S., Iwai, R., Hine, K., & Kumada, T., 「Where should we look in the road? The effect of gaze position on egocentric direction and position perceptions」、31st International Congress of Psychology (ICP2016)、Yokohama、2016.7.26

国際、Nakashima, R. & Kumada, T., 「The sense of agency for braking a moving object during the manual and automatic control.」、31st International Congress of Psychology (ICP2016)、Yokohama、2016.7.28

国内、中島亮一、「頭部方向に基づく視線位置の推定と視覚的認知」、認知科学会サマースクール 2016、箱根、2016.8.31

国際、Li, Q., Nakashima, R., & Yokosawa, K., 「The effects of spatial dividers on counting and numerosity estimation.」、European Conference on Visual Perception 2016、Barcelona, Spain、2016.9.1

国内、李琦・中島亮一・横澤一彦、「区切り枠による領域分割は数え上げ・数推定の成績を上昇させる」、日本基礎心理学会大 35 回大会、東京、2016.10.29

国内、中島亮一・上田彩子・日根恭子・岩井律子・熊田孝恒、「課題非関連なオブジェクト応答は自動制御オブジェクトに対する操作主体感を上昇させる」、日本基礎心理学会大 35 回大会、東京、2016.10.30

国内、上田彩子・中島亮一・井関龍太・熊田孝恒、「Influence of selecting reference points that suit for a motor intension on motor control during visuomotor tracking task.」、第 8 回多感覚研究会、東京、2016.11.19

国内、中島亮一・上田彩子・日根恭子・岩井律子・熊田孝恒、「自動制御オブジェクトに対する操作主体感の維持：目標指向行動とオブジェクト応答の影響」、「注意と認知」第 15 回合宿研究会、名古屋、2017.3.7

国内、中島亮一、「横目観察における視覚処理の偏り：有効視野課題を用いた検討」、日本認知心理学会 第 15 回大会、東京、2017.6.4

国際、Nakashima, R., 「Visual perception in peripheral visual field is modulated by eccentric gaze.」、The 13th Asia-Pacific Conference on Vision、Tainan, Taiwan、2017.7.16

国際、Nakashima, R., & Kumada, T., 「Task-irrelevant object response increases the subjective sense of control for the automatic control object.」、20th Conference of the European Society for Cognitive Psychology (ESCoP)、Potsdam, Germany、2017.9.5

国際、Ueda, S., Nakashima, R., & Kumada, T., 「Influence of automatic intervention on manipulation consequence evaluation during tool use.」、20th Conference of the European Society for Cognitive Psychology (ESCoP)、Potsdam, Germany、2017.9.5

国内、中島亮一、「オブジェクトの操作主体感に基づく視覚処理の空間的偏り」、日本心理学会第 81 回大会、久留米、2017.9.20

国内、中島亮一、「主体感の話—自動制御オブジェクトに対する錯覚的操作主体感・主体感と視覚的認知の関係—」、第 1 回認知科学ワークショップ、名古屋、2017.10.14

国内、中島亮一・横澤一彦、「ある空間位置に引き続きけた注意はその位置での変化検出処理を促進する」、日本基礎心理学会第 36 回大会、茨木、2017.12.1

国内、中島亮一、「オブジェクトに対する操作主体感が視覚処理を変容させる」、日本基礎心理学会第36回大会、茨木、2017.12.3

国内、中島亮一、「操作主体感が視覚処理に与える影響」、第9回多感覚研究会、熊本、2017.12.17

国内、小西慶治・中島亮一・横澤一彦、「聴覚刺激による視覚情報処理の促進と妨害—顔刺激の弁別反応時間と再認率を指標として—」、「注意と認知」第16回合宿研究会、名古屋、2018.3.5

国内、中島亮一、「操作主体感の生起に基づく視覚処理の空間的偏り」、「注意と認知」第16回合宿研究会、名古屋、2018.3.6

(他機関での講義等)

明治学院大学 非常勤講師、2016.4～2016.9、2017.4～2017.9

東京藝術大学 非常勤講師、2016.4～2018.3

立教大学 兼任講師、2016.9～2017.3、2017.9～2018.3

李 琦

専門分野 認知心理学

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(論文)

菊野春雄、菊野雄一郎、山田悟史、李琦、「問題解決に及ぼすメタ認知と性格特性の効果」、『環境と経営』、2017.12

(学会発表)

国際、Qi Li, Kazuhiko Yokosawa、「A task-irrelevant high memorability image can impair or enhance visual search performance」、16th Annual Meeting of the Vision Sciences Society、2016.5.18

国際、Qi Li, Ryoichi Nakashima, Kazuhiko Yokosawa、「The effects of spatial dividers on counting and numerosity estimation」、39th European Conference on Visual Perception、2016.9.1

国内、Qi Li, Jun Saiki、「Dynamic control of information in visual working memory maintenance」、日本基礎心理学会第35回大会サテライトオーラルセッション、2016.10.28

国内、李琦、中島亮一、横澤一彦、「区切り枠による領域分割は数え上げ・数推定の成績を上昇させる」、日本基礎心理学会第35回大会、2016.10.29

国内、李琦、鈴木淳之介、横澤一彦、「情景画像を用いた視覚性ワーキングメモリの容量限界の検討」、日本心理学会第81回大会、2017.9.22

国内、李琦、「視覚性ワーキングメモリの保持における空間的・非空間的属性の抑制」、日本心理学会「注意と認知」研究会第16回合宿研究会、2018.3.5

(受賞)

国内、李琦、中華人民共和国駐大阪総領事賞、中国留日同学会、2017.11.18

国内、李琦、公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞、公益社団法人日本心理学会、2017.12.12

(他機関での講義等)

聖心女子大学 非常勤講師、2016.4～2016.9、2017.4～2017.9

専修大学 非常勤講師、2016.4～2018.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「運動順応がモーションカルテットの運動対応に与える影響」

「文字学習を用いた色字共感覚の色字対応形成過程の検討」

「外国語副作用と外国語習熟度の相関関係についての検討」

「運動と運動順応による知覚的位置の変化」

「日本語の文字情報が共感覚色の数に与える影響」

「顔と声を結びつける要因の検討」

「感情にまつわる短期間の経験が色彩嗜好に及ぼす影響」

「盲点内への光照射が明るさ知覚に及ぼす影響」

「ASD 並びに自閉症傾向が多指間協調運動に与える影響」
 「復帰抑制が生じる条件下での時間順序判断」
 「視覚性ワーキングメモリにおける情景画像の固定に関する研究」
 「認知的介入による運動主体感の変容が運動制御に及ぼす影響について」
 「物体に対する背景の位置がシーン整合性効果に与える影響の検討」
 「色聴共感覚・色字共感覚者における音と色の対応付けを決定する因子の検討」
 「整合するオブジェクトと背景の処理が記憶に与える影響」
 「課題に対する構えと先行刺激の呈示時間が探索効率に及ぼす影響」
 「ヘッドマウントディスプレイで提示された視覚フィードバックのゲイン及び教示が姿勢制御に与える効果」
 「追跡眼球運動に伴う網膜像運動と知覚的持続時間との関係」
 「性格傾向に基づく感情が運動主体感に与える効果の検討」
 「自己行為による感覚イベントの開始と終了に対する時間近接効果の比較」
 「自己運動のパフォーマンス予測：予測的自信と回顧的自信」
 「ドローイングの感覚運動学習における身体座標系の役割」
 「二次の刺激特徴で定義された図形においてエビングハウス錯視は生じるか」

2017 年度

「oddball 効果における刺激の変化と時間知覚の関係」
 「運動する視覚刺激が聴覚刺激のテンポ知覚に与える影響」
 「妥当性を操作したフィードバックが視覚探索行動に与える効果」
 「道具の身体化の指標としての内受容情報」
 「瞬間呈示が Tilt illusion の attraction 効果に与える影響について」
 「新奇文学学習時に色字共感覚対応づけに影響する要因の検討」
 「他者運動の認識と引き込み現象が自己運動に及ぼす影響」
 「顔と声のマッチング能力を規定する要因の検討」
 「高速度での視覚的運動が時間伸長効果に及ぼす影響」
 「連続する能動的運動による時間知覚への影響」
 「発話時における運動主体感の測定法の検討」
 「フラッシュラグ効果を用いた復帰抑制の検討」
 「利き手と非利き手による運動主体感への影響」
 「視覚的ワーキングメモリにおける注意の切り替えの影響」
 「音声刺激を用いた聴覚的な文字呈示による色字共感覚の生起について」
 「日本の伝統文化が日本人の色彩嗜好に与える影響」
 「実行注意機能に影響を与えうる効果的な瞑想方法の探索」
 「閾下における盲点内の知覚的充填」
 「嗅覚刺激が反対運動学習に与える影響とその考察」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

井上照沙「運動視における主観的持続時間とタイミング知覚に関する実験的検討」(指導教員) 村上郁也

2017 年度

小西慶治「視覚記憶処理を促進させる聴覚刺激提示法の検討」(指導教員) 横澤一彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲)

松本章弘「網膜における視覚情報の符号化」

(主査) 横澤一彦 (副査) 今水寛・村上郁也・立花政夫・金田誠

(乙)

なし

2017 年度

(甲) (乙)

なし

09a 日本語日本文学（国語学）

1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続けてきたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げることになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2016年度は、学部生として1名の、大学院生として4名の外国人留学生在籍し、また、海外の日本語研究者が4名、1名は外国人研究員として、2名は外国人研究生として、1名は学部特別聴講生として研究室に在籍し、研究に従事している（2017年1月1日現在）。2017年度は、学部生として1名の、大学院生として6名の外国人留学生在籍し、また、海外より2名、1名は外国人研究員、1名は外国人研究生として本研究室に在籍し、研究に従事している（2018年1月1日現在）。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～現在
井島 正博	教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	准教授	日本語史	2003年4月～現在

(2) 助教の活動

田中 草大

在職期間 2016年4月～現在

研究領域 日本語史

主要業績

(著書)

藤本灯・田中草大・北崎勇帆、『山田孝雄著『日本文体の変遷』本文と解説』、2017.2

(論文)

田中草大、「変体漢文から見る接尾辞ラ」、『訓点語と訓点資料』、136、pp.23-34、2016.3

田中草大、「平安時代の変体漢文諸資料間における言語的性格の相違について」、『国語語彙史の研究』、35、pp.87-104、2016.3

田中草大、「橋本進吉による「変体漢文」の定義と古事記の位置付け」、『日本語学論集』、12、pp.1-7、2016.3

田中草大、「変体漢文における不読字一段落標示用法を中心に」、『論集 古代語の研究』、2017.3

田中草大、「語の用法より観たる変体漢文中の〈訓点語〉について」、『国語と国文学』、95(3)、2018.3

(解説)

藤本灯・林褪映・田中草大・南雲千香子・小野響太、「東京大学国語研究室蔵 黒川文庫目録〈辞書之部〉ら～を」、『日本語学論集』、12、2016.3

藤本灯・田中草大・北崎勇帆、「山田孝雄の未刊稿『日本文体の変遷』一附『院政鎌倉時代文法史』『院政鎌倉期の語法』一」、『日本語の研究』、12(4)、2016.10

林淳子・靳園元・北崎勇帆・南雲千香子・田中草大、「東京大学国語研究室蔵黒川文庫目録〈語学之部〉た～わ」、『日本語学論集』、13、2017.3

(学会発表)

国内、田中草大、「変体漢文の中の〈訓点語〉」、第115回訓点語学会研究発表会、2016.11.13

国際、Akari Fujimoto, Sota Tanaka、「The Validity of Using Iroha-Jiruishō to Interpret Ancient Japanese Diaries of the Male Nobility」、15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJJS2017)、2017.9.1

国内、田中草大・鴻野知暁・田中牧郎、「『尾張国解文』正中二年点のコーパス化とその可能性」、第117回訓点語学会研究発表会、2017.10.22

(共同研究 (産学連携除く))

国内、明治大学 (代表: 田中牧郎)、「『今昔物語集』を中心とするパラレルコーパス作成による平安語彙の層状構造の解明」、2017～

(非常勤講師)

青山学院大学、「日本語学 A・B」、2016.4～2018.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

2016年度

- ・呉 美寧 (韓国・崇実大学)
- ・郭 木蘭 (中国・華僑大学)
- ・成 ユンア (韓国・祥明大学)

2017年度

- ・安 善柱 (韓国・ソウル女子大学)
- ・郭 木蘭 (中国・華僑大学)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

特別演習を履修し、卒業した者、3名。

2017年度

- 「蓋然性を表す副詞の研究」
- 「日本語英語間翻訳における役割語について」
- 「可能表現の意味の再考察」
- 「逆接の接続詞「しかし」「でも」「ところが」の研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

横江優「古往来の国語学的研究—古往来五種における他動詞／目的語語順の分析を通して—」(指導教員) 月本雅幸

2017年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲)

林禎映「日本語の評価副詞に関する史的研究」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・肥爪周二・矢田勉・岡部嘉幸

田中草大「平安時代における変体漢文の日本語学的研究」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・肥爪周二・堀畑正臣・山本真吾

(乙)

なし

2017 年度

(甲)

林淳子「現代日本語の疑問文および質問表現に関する研究」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・西村義樹・肥爪周二・鈴木泰

馬紹華「原因・理由を表す複合的な接続表現の史的研究」

〈主査〉井島正博 〈副査〉月本雅幸・肥爪周二・岡部嘉幸・前田直子

伊藤博美「近・現代日本語の謙譲表現に関する研究」

〈主査〉井島正博 〈副査〉月本雅幸・肥爪周二・矢田勉・諸星美智直

(乙)

肥爪周二「日本語音節構造史の研究」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉井島正博・佐々木勇・高山知明・高山倫明

09b 日本語日本文学（国文学）

1. 研究室活動の概要

国文学研究室は、学部の言語文化学科・日本語日本文学専修課程と大学院の日本文化研究専攻・日本語日本文学専門分野の国文学の教育研究を担当している。本研究室は、1877年（明治10）の東京大学発足時の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一らの先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963年（昭和38）に国語国文学専修課程となり、1975年（昭和50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994年（平成6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまでも保たれている。

現在、本研究室は教授5名・准教授1名・助教1名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカバーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。また2017年4月現在で、国文学研究室には大学院学生35名（内、外国人留学生10名）・学部学生44名が在籍し、その他、大学院外国人研究生1名、日本学術振興会特別研究員2名、外国人研究員1名を受け入れている。

本研究室は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012年度以来、本専修課程では「総合日本文学」の研究・教育という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本研究室は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出しており、また、数多くの海外からの留学生を、それぞれ母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるよう、指導を行ってきた。特に国際交流には力を入れており、多くの外国人研究員を受け入れると共に、教員が海外の学会の招待講演を引き受けている。

「総合日本文学」は、留学生、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者の存在に配慮した試みでもある。2013年度より、集中講義、あるいはA2タームを利用した「総合日本文学」を開講し、スタッフ全員の輪講で年度毎に統一テーマにそった講義を行っている。2016年度からはこれを全学教養教育科目とし、「セクシュアリティ」（16年度）、「共同性」（17年度）をテーマに、17年度はシンポジウムを交えた講義を行った。

上記のような研究教育活動のほか、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている。卒業生を中心とする活動としては、東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924年（大正13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として「東京大学国文学論集」をも毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

長島 弘明 教授	日本近世文学
藤原 克己 教授	平安朝文学・和漢比較文学
渡部 泰明 教授	日本中世文学・和歌文学
安藤 宏 教授	日本近代文学
鉄野 昌弘 教授	日本古代文学
高木 和子 教授	平安朝文学

(2) 助教の活動

高木 周

在職期間 2016年4月～

研究領域 日本中世文学

主要業績

(論文)

高木周『『とはずがたり』巻五の後深草院の御影をめぐる表現』、『日本文学研究ジャーナル』、2号、2017.6

(非常勤講師)
明治学院大学、「日本文学(専)」、2016.4～2018.3

(学会)
国内、西行学会、会計監査、2016.4～2018.3
国内、中世文学会、一般会員、2016.4～2018.3
国内、日記文学会、一般会員、2016.4～2018.3
国内、東京大学国語国文学会、評議員、2016.4～2018.3

林 悠子

在職期間 2016年4月～2018年4月

研究領域 中古文学

主要業績

(著書)

林悠子、共著、鈴木健一編、『浜辺の文学史』、三弥井書店、2017.2

(非常勤講師)

実践女子大学、「日本の文学 a」、2016.4～9、2017.4～9、「日本の文学 b」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3、
「古典文学基礎講読 a」、2016.4～9、2017.4～9、「古典文学基礎講読 b」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3、
「国文学概論 a」、2017.4～9

(学会)

国内、中古文学会、一般会員、2016.4～2018.3
国内、東京大学国語国文学会、評議員、2016.4～2018.3

(3) 内地研修員・外国人研究員

内地研修員

2016年度

高田祐彦 (受入教員：藤原克己)

2017年度

なし

外国人研究員

2016年度

ニコラ・ミシェル・モラル (受入教員：安藤宏) スイス ジュネーブ大学講師 フランス外務省派遣
研究員

2017年度

ニコラ・ミシェル・モラル (受入教員：安藤宏) スイス ジュネーブ大学講師 フランス外務省派遣
研究員

韓京子 (受入教員：長島弘明) 韓国 慶熙大学副教授

日本学術振興会特別研究員

2016年度

森陽香 (受入教員：鉄野昌弘) RPD

2017年度

森陽香 (受入教員：鉄野昌弘) RPD

丸井貴史 (受入教員：長島弘明) PD

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「広津和郎 性格破産者への愛憎」

「枕草子の諸問題」

「源氏物語における「後目」と「側目」

「志貴親王挽歌の構造」

「芥川龍之介『河童』論」

『源氏物語』のものけ」
「太宰治「人間失格」論」
「(浮世) 閨中膝磨毛論」
「橘俊綱論」
『万葉集』における聴覚利用の展開」
「志賀直哉「城の崎にて」論」
「ナオミ像の変化から紐解く『痴人の愛』」
「三島由紀夫『豊饒の海』における死生観」
「西脇順三郎『旅人かへらず』論」
「芥川龍之介「玄鶴山房」論」
「坂口安吾『桜の森の満開の下』論」
『源氏物語』「雨夜の品定め」の射程」
「三島由紀夫「春の雪」論」
「森鷗外「雁」論」
「「そがひに」考」
「後鳥羽院和歌研究—百人一首を巡って—」
「新傾向俳句運動から見る河東碧梧桐」

2017年度

『源氏物語』における紫の上の描写方法」
「藤原定家の和歌について」
『落窪物語』が描く理想～男君道頼の人物造型を通じて～」
『海に生くる人々』と『蟹工船』～希望と絶望が交えた文学～」
「風の歌を聴け」における「語り」の様相とその受容について」
『心』論—偽りの生命を得た「心臓」—」
『白蟻の巣』から見る三島由紀夫の戦後観と戯曲世界」
『痴人の愛』に見られるモダニズムと谷崎の格闘について」
「志賀直哉「和解」論」
「六条御息所についての研究」
「「リー兄さん」について—白鳥晩年の思想を作品から読み解く—」
「明石の君の人物造型」
「堀辰雄における「夢」と「現実」」
「源氏物語における光源氏と女君の関係構造」
「中世説話研究」
『傾城水滸伝』研究」
「源俊頼の「めづらし」論」
「太平記研究」
「藤原定家の和歌研究—建暦・建保期をめぐる—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

阿部真也「久生十蘭研究——改稿過程の考察を中心に——」(指導教員) 安藤宏
山本歩波「源氏物語の結婚についての研究」(指導教員) 高木和子

2017年度

大野祐仁「安部公房<変形譚>論」(指導教員) 安藤宏
河相徹「夢野久作研究——探偵小説との関わりを中心に——」(指導教員) 安藤宏
河北遼平「『将門記』の研究」(指導教員) 渡部泰明
榎野祐大「『散木奇歌集』の研究—釈教部を中心に—」(指導教員) 渡部泰明
大島武宙「『万葉集』の「見る」について」(指導教員) 鉄野昌弘
丁世珍「井伏鱒二と<戦争>」(指導教員) 安藤宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲)

金美眞「柳亭種彦の合巻研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉藤原克己・渡部泰明・高木和子・佐藤至子
洪晟準「馬琴読本の研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉安藤宏・鉄野昌弘・古井戸秀夫・肥爪周二
陳童君「堀田善衛の敗戦後文学論—「中国」表象と戦後日本」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤井省三・藤原克己・紅野謙介・島村輝
李相旻「嵯阿和歌の研究」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・高木和子・村尾誠一
林悠子「源氏物語の方法としての時間設定に関する研究」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉長島弘明・安藤宏・高木和子・高田祐彦
大石紗都子「堀辰雄論——日本古典文学と西洋文学——」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤原克己・高木和子・衣笠正晃・渡部麻実

(乙)

なし

2017 年度

(甲)

萩野了子「古代和歌修辞の研究」

〈主査〉鉄野昌弘 〈副査〉渡部泰明・高木和子・多田一臣・鈴木宏子
尾葉石真理「新古今時代の和歌とその展開」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉藤原克己・鉄野昌弘・高木和子・谷知子
權桃楹「源氏物語正篇の方法 —光源氏形象論—」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉長島弘明・渡部泰明・高木和子・田村隆
宋吟「平安朝文人論」

〈主査〉藤原克己 〈副査〉渡部泰明・鉄野昌弘・高木和子・齋藤希史

(乙)

なし

10 日本史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近来では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史学コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊。6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究紀要』（1996年創刊。現在22号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2017年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に7名、研究生に3名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 信 教授	日本古代史
野島 (加藤) 陽子 教授	日本近代政治史
大津 透 教授	日本古代史
鈴木 淳 教授	日本近代史
牧原 成征 准教授	日本近世史
高橋 典幸 准教授	日本中世史
三枝 暁子 准教授	日本中世史

(2) 助教の活動

竹ノ内 雅人

在職期間 2016年4月～2017年3月

研究領域 日本近世史

主要業績

(著書)

竹ノ内雅人『江戸の神社と都市社会』（校倉書房）

(論文)

竹ノ内雅人「近世後期佃島の社会と住吉神社」（『年報都市史研究』14）

竹ノ内雅人「神社と神職集団—江戸における神職の諸相—」（吉田伸之編『身分的周縁と近世社会6 寺社をささえる人びと』吉川弘文館）

竹ノ内雅人「The Dissolution of Early-Modern Urban Society and the Activities of Shinto Priests in Edo」（『国際基督教大学学報3-A アジア文化研究』33）

竹ノ内雅人「近世鳩ヶ嶺八幡宮の社会構造」(『飯田市歴史研究所年報』7)

竹ノ内雅人「近世後期飯田町の人口動態と社会構造」(高澤紀恵他編『伝統都市を比較する 飯田とシャルルヴィル』山川出版社)

竹ノ内雅人「南信地域における神職の組織編成と社会変容」(塚田孝・吉田伸之編『身分的周縁と地域社会』山川出版社) など

木下 聡

在職期間 2016年4月～現在

研究領域 日本中世史

主要業績

(著書)

編著、木下聡、『戦国史研究史料集3 足利義政発給文書2・足利義熙(義尚)発給文書』、戦国史研究会、2016.4

編著、木下聡、『若狭武田氏』、戎光祥出版、2016.9

編著、木下聡、『豊臣期武家口宣案集』、東京堂出版、2017.10

(論文)

木下聡、「室町幕府において將軍直臣に対して將軍以外が名前の一字を与えること」、日本史史料研究会編『日本史のまめまめしい知識』第1巻、岩田書院、40～49頁、2016.5

木下聡、「足利持氏期の関東管領と守護」、黒田基樹編著『足利持氏とその時代(関東足利氏の歴史4)』、戎光祥出版、215～239頁、2016.8

木下聡、「南北朝期二階堂氏の系譜と動向」、佐藤博信編『中世東国の政治と経済』、岩田書院、27～54頁、2016.12

木下聡、「大和家蔵書」所収「大和和守晴完入道宗恕筆記」、『東京大学日本史学研究室紀要』、21、169～210頁、2017.3

木下聡、「室町幕府下の太田氏」、義堂の会編・発行『空華日用工夫略集の周辺』、57～75頁、2017.3

木下聡、「日本史研究におけるガラス乾板の意義 保阪潤治コレクションから」、久留島典子・高橋則英・山家浩樹編『文化財としてのガラス乾板 写真が紡ぎなおす歴史像』、勉誠出版、202～205頁、2017.3

木下聡、「明応の政変直後の足利義植御内書について」、『戦国史研究』、74、31～32頁、2017.8

木下聡、「室町幕府奉公衆結城氏の基礎的研究」、戦国史研究会編『戦国期政治史論集 西国編』、岩田書院、119～144頁、2017.12

木下聡、「足利成氏期の関東管領と守護」、黒田基樹編著『足利成氏とその時代(関東足利氏の歴史5)』、戎光祥出版、170～201頁、2018.1

(学会発表)

国内、木下聡、「室町幕府奉公衆の成立と変遷」、室町期研究会例会、明治大学グローバルフロント、2017.6

国内、木下聡、「中世における諸階層の官途受容」、中世学研究会第1回シンポジウム「幻想の京都モデル」、慶應義塾大学日吉キャンパス、2017.7.1

(啓蒙)

木下聡、「信長と美濃斎藤氏との戦い」、渡邊大門編『信長軍の合戦史』、吉川弘文館、24～38頁、2016.6

木下聡、「斎藤道三・一色義龍父子と美濃支配」、天野忠幸編『松永久秀』、宮帯出版社、266～275頁、2017.5

木下聡、「三河守任官」と尾張乱入は関係があるのか」、大石泰史編『今川氏研究の最前線 ここまでわかった「東海の大大名」の実像』、洋泉社、166～183頁、2017.6

木下聡、「信長と美濃斎藤氏との関係とは」、日本史史料研究会監修『信長研究の最前線2 まだまだ未解明な「革新者」の実像』、洋泉社、104～116頁、2017.8

木下聡、「足利義規」、榎原雅治・清水克行編『室町幕府將軍列伝』、戎光祥出版、2017.9

(他機関での講義等)

非常勤講師、白百合女子大学、「日本中世史、日本中世文化史」、2016.4～2018.3

特別講演、手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会、「享徳の乱と柏地域」、2016.4

特別講演、小牧市歴史講座「織田信長をめぐる人々2」、「尾張守護斯波氏と織田氏」、2016.10

非常勤講師、慶應義塾大学、「日本史演習I D・日本史演習II D」、2017.4～2018.3

特別講演、岐阜市歴史博物館、「16世紀の武家社会と斎藤氏」、2017.6

非常勤講師、法政大学、「日本史特講III」、2017.9～2018.3

特別講演、日本家系図学会総会、「系図における官位の記述について」、2017.11

(学会)

国内、戦国史研究会、副編集委員長、2016.2～2018.2

(行政)

自治体、清瀬市企画部市史編さん室、教育政策、中世史部会専門調査委員、2016.4～2018.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 「一九九〇年代におけるEコマースの伸長について」
- 「明治時代における法人の概念に関する一考察」
- 「岡倉天心の思想と、それに対する国内外からの評価、また後世への影響」
- 「戦国期大内氏の警固衆指揮官—大内氏当主側近層との関わりから—」
- 「毛利氏の国人統制」
- 「摂関期の天皇と宗教儀礼—神仏隔離を中心に—」
- 「樺太「陸接国境」警備とその歴史的位置付け—日ソ国交正常化期から総力戦体制期まで—」
- 「衾御教書の定義と捕捉力に関する一考察」
- 「室町～戦国期における地域支配の構造—摂津守護代薬師寺氏の事例—」
- 「蝦夷地産物流通と箱館産物会所—江戸の松前最寄問屋の動向を中心に—」
- 「南北朝期室町幕府の関東支配について」
- 「院政期女院と貴族社会」
- 「満州事変前後における満州移民政策の形成過程に関するの考察」
- 「中世前期における大隅国正八幡宮の造営事業と宗教的権威」
- 「明治三〇年代の保税倉庫制度に関する考察」
- 「上杉謙信と関東の国衆について」
- 「中世武家の親子と社会—継承と義絶の問題から—」
- 「嘉永末～安政初めの江戸における火薬流通とその規制」
- 「日清戦後経営期の農商務省の研究—金子堅太郎次官期を中心に—」
- 「「学徒出陣」再検討」
- 「日本古代における積奠の継受と展開」
- 「古代における斎王と斎宮寮」
- 「内務省社会局と移民政策—一九二〇年代におけるその参入と推進の意図をめぐって—」
- 「太平洋戦争期における新聞統制の実態—情報局を中心に—」
- 「室町期南都伝奏の役割とその変遷」
- 「選挙制度をめぐり立憲政友会代議士の動向—大正八年法成立から大正一四年法成立に至るまでを中心に—」
- 「寺院童はなぜ必要とされたのか—醍醐寺青瀧会を中心に—」
- 「太平洋戦争期日本海軍の士官人事制度とその運用」
- 「津山藩舟肝煎役と幕領廻米請負」
- 「戦前石油行政の考察—資源論の立場から—」
- 「幕末の捕鯨業からみる紀州古座浦の社会構造」
- 「一九五〇年代の新制高校生の平和運動についての一考察—第一次日本戦没学生記念会を中心に—」

2017年度

- 「寛元・宝治・建長政変と幕府・朝廷」
- 「毛利氏による都市尾道支配」
- 「江戸周辺地域の鷹狩と村々」
- 「橋本左内の教育思想—幕末変革期の政治と学問の一考察—」
- 「第一次電力国家管理体制の成立—政党と内閣の関係性から見る—」
- 「専門雑誌『野球界』にみる一九一一年の野球害毒論争」
- 「摂関期の外記と太政官」

「教育村の起源—私立有漢准教員養成所設立者佐藤晋一を中心に—」
「緒方竹虎と戦後外交」
「十九世紀前半知識人の由緒探求と考証」
「1900年前後の新潟における企業投資の様相～「富之越後」の再検討を通じて～」
「小金原御鹿狩の目的と意義—寛政七年の御鹿狩から—」
「近世江戸湾の海苔養殖」
「平沼一政友会ブロックの形成と展開」
「中世宇都宮の都市論的考察—下野宇都宮氏を中心に—」
「治承三年の政変と後白河院政」
「豊臣政権の外交政策—文禄の役における禅僧の動向—」
「中世延暦寺における「僧兵」の成立」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

石野夏幹「貴族院議員と鉄道問題—1890年代の貴族院における国家利害と反国家利害—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
中山翠「中世後期における勸進からみた社会関係の形成」〈指導教員〉高橋典幸
飯島直樹「昭和期の元帥府と元帥」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
内野恵佑「律令制神祇祭祀の展開と神祇官」〈指導教員〉佐藤信
廣瀬翔太「近世初期熊本藩における軍事動員と家臣団編成」〈指導教員〉牧原成征
三村佳緒「第三次日英同盟と日英両国の同盟認識—「対露軍事同盟」から「仮想敵国なき同盟」へ—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
章霖「旧日本海軍に於ける「戦争以外の軍事行動」(MOOTW)について—大正期関東州沿岸への巡航を中心に—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子

2017年度

塚原浩太郎「戦後日本における選挙一人の国家に対する関係から—」〈指導教員〉野島（加藤）陽子
安洪賛「日唐律令給与制度の比較研究」〈指導教員〉大津透
石坂桜「郡制期郡界変更をめぐる意思決定過程と帝国議会請願」〈指導教員〉鈴木淳
上西晴也「「勸農」の終わり和本草家の退出」〈指導教員〉鈴木淳
立石了「萩藩毛利家における近世大名家臣団の形成」〈指導教員〉牧原成征
谷川みらい「工場払下ヶ概則の制定・運用・廃止—官業払下げをめぐる明治十三～十七年の政治過程—」〈指導教員〉鈴木淳
古田一史「律令国家軍政官司の形成と展開」〈指導教員〉佐藤信
堀昌輝「戦国期における宗教勢力の動向—本願寺の門跡化と青蓮院—」〈指導教員〉三枝暁子
横山浩貴「近世後期幕府代官江川氏の地域支配と貸付金政策」〈指導教員〉牧原成征
金炯辰「近世後期朝廷の政務遂行と復古観念の台頭」〈指導教員〉牧原成征

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

大高広和「日本古代国家と辺境」
〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・鉄野昌弘・早乙女雅博・山口英男
樋口真魚「近代日本と「集団安全保障外交」の模索」
〈主査〉野島（加藤）陽子 〈副査〉鈴木淳・牧原成征・酒井哲哉・武田知己
嶋理人「戦前期日本の民間社会資本事業—電鉄事業者の兼営電気供給事業に着目して—」
〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島（加藤）陽子・中村尚史・老川慶喜・高嶋修一
屋良健一郎「琉球・日本の外交と文化交流」
〈主査〉高橋典幸 〈副査〉長島弘明・三枝暁子・渡辺美季・村井章介
国分航士「明治立憲制における宮中と府中の関係」
〈主査〉野島（加藤）陽子 〈副査〉鈴木淳・季武嘉也・坂本一登・西川誠

(乙)

近藤成一「鎌倉時代政治構造の研究」

〈主査〉高橋典幸 〈副査〉大津透・六反田豊・新田一郎・五味文彦

2017年度

(甲)

池田真歩「一九世紀東京の代議システム」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島(加藤)陽子・五百旗頭薫・櫻井良樹・横山百合子

尾崎智子「20世紀日本の生活改善運動」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島(加藤)陽子・岩本通弥・加瀬和俊・大門正克

山本ちひろ「沖縄のなかの近代日本—「地方」としての政治論理—」

〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉鈴木淳・山口輝臣・戸邊秀明・松沢裕作

神戸航介「日本古代財務行政の研究」

〈主査〉大津透 〈副査〉佐藤信・佐川英治・山口英男・尾上陽介

小池勝也「武家政権下における鎌倉・京の顕密寺社と両仏教界の関係についての基礎的考察—勝長寿院・鶴岡

八幡宮寺・醍醐寺を事例に—」

〈主査〉高橋典幸 〈副査〉蓑輪頭量・三枝暁子・高橋慎一郎・藤井雅子

(乙)

なし

1 1 中国語中国文学

1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学科の分離、帝国大学文科大学への改組などを経て、1904年哲史文三学科制への移行にともない、漢学科が支那哲学、支那文学に分かれ、学科制度の変更によって支那哲学支那文学科となった時期を挟みつつ、現在まで続いている。中国語中国文学の名称は、1953年新制東京大学大学院人文科学研究科に設けられた専攻に始まる。

研究領域は、中国語学と中国文学の2分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授3名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員1名、大学院総合文化研究科の教員1名が教育に参加している。学生数は、2016年度は学部学生6名、大学院修士課程9名、博士課程13名、研究生8名、交換留学生2名、2017年度は学部学生2名、大学院修士課程7名、博士課程15名、研究生5名、交換留学生1名で、多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陸からの留学生22名、台湾からの留学生1名、合計23名にのぼっている。留学生の増加は授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。また国内における研究発表や交流の機会も豊富である。2017年度からは年に1度、学生の研究発表を中心に、京都大学中国語学中国文学研究室と合同で研究会を開催し、交流を図っている。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。また、国内外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催するほか、学内での公開講演会等でも広く発信を行っている。主要な催しに「唐詩の韻律—漢文訓読の彼方—」（平山久雄教授講演、文学部主催第24回布施学術基金講演会、2016年5月26日）、「詩の翻訳—欧・漢・和」（齋藤希史教授講演、集英社高度教養寄付講座第6回講演会、2016年7月2日）、「漱石と魯迅、百年の“対話”」（東大中文研究室・魯迅文化基金会・南京大学・南京師範大学共催、東京大学ホームカミングデー特別シンポジウム、2017年10月21日）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、留学生を交えた共同研究の報告や、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2017年度第20号をUT Repositoryで公開している。（<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/index.php>）

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

藤井省三教授（中国近代文学、台湾・香港文学、日中比較文学）

大西克也教授（中国古典文法、文字学）

齋藤希史教授（中国古典詩文）

(2) 助教の活動

白井 澄世

在職期間 2016年度～現在

研究領域 中国現代文学

主要業績

（論文）白井澄世、「瞿秋白『多余的話』について—「語り」と「時間」についての試論」、『越境する中国文学』編集委員会『越境する中国文学—新たな冒険を求めて』、pp.137-163、東方書店、2018.2

（解説）白井澄世、「漱石と魯迅、百年の“対話”」シンポジウム報告、『東方』、445、2～7頁、2018.3

(3) 外国人教員の活動

孫 軍悦 (専任講師)

在職期間 2016年度～現在

研究領域 日中比較文学・翻訳研究

主要業績

(学会) 国内、昭和文学会、学術雑誌編集委員、2016.8～2018.8

(学会発表) 国際シンポジウム、孫軍悦、「1953-1956 中国社会主義改造の歴史、社会、文化、生活意涵」、パネルディスカッション発表、中国当代史読書会、亜際書院北京事務所主催、於：北京、2017.4.22～23
国際シンポジウム、孫軍悦、「1957年の歴史、社会、文化、生活意涵」、コメンテーター、中国当代史読書会、亜際書院北京事務所主催、於：北京、2018.4.28～29

(論文) 孫軍悦、「安放情感的場所(一) 一石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之一」、『人間思想』第8輯、人間出版社(台湾)、pp319-342、2018.3

孫軍悦、「安放情感的場所(二) 一石母田正『歴史與民族的発見』読書筆記之二」、『人間思想』第9輯、人間出版社(台湾)、pp.317-399、2018.3

(評論) 孫軍悦、「超越時空境界の呼応」、『人間思想』第9輯、人間出版社(台湾)、pp.215-218、2018.3

(新刊紹介) 孫軍悦、「戦時上海のメディア—文化的ポリティクスの視座から」、『昭和文学研究』第75集、p167、2017.9

(4) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

葉子: 南京大学現代文学研究中心副教授

研究題目—アメリカ文芸誌『ニューヨーカー』と現代東アジア文学

研究期間—2015年4月1日～2016年5月5日

董冰華: 長春理工大学文學院副教授

研究題目—《中原雅音》の再編集と復元

研究期間—2015年9月20日～2016年9月19日

呂周聚: 山東師範大学教授

研究題目—魯迅文学の異端性

研究期間—2016年8月1日～2016年9月30日

尚一鷗: 東北師範大学日本研究所副教授

研究題目—村上春樹長編小説における芸術性の研究

研究期間—2016年8月28日～2017年8月27日

林敏潔: 南京師範大学日語系教授

研究題目—魯迅・莫言を中心とする中日両国文化交流

研究期間—2016年11月16日～2017年11月15日

陳松長: 湖南大学岳麓書院教授

研究題目—岳麓書院藏秦簡を中心とする秦代簡牘研究

研究期間—2016年12月19日～2016年12月27日

常森: 北京大学教授

研究題目—出土文献『五行』『孔子詩論』と中国先秦学術史の研究

研究期間—2017年2月1日～2017年3月30日

陳國偉: 国立中興大学台湾文学・トランスナショナル文化研究科准教授

研究題目—21世紀中国語小説における日本文学の受容

研究期間—2017年7月1日～2017年7月31日

楊海峰: 武漢理工大学・政治行政学院副教授

研究題目—類型論に基づく古代中国語の副詞研究

研究期間—2017年9月15日～2018年9月14日

胡萍: 華僑大学副教授

研究題目—古代中国語教育カリキュラム改革研究

研究期間—2017年9月20日～2018年9月19日

許智香: 学術振興会 外国人特別研究員

研究題目—翻訳と東アジア—近代日本における Philosophy の翻訳と植民地朝鮮への伝播

研究期間—2017年10月1日～2019年9月30日

内地研究員

飛田英伸: 日本学術振興会 特別研究員(DC2)

研究題目—明治初期訓読体小説における言語世界の形成—主人公としての書生の出現

研究期間—2017年4月1日～2019年3月31日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「上古中国語における「如／若」に関する認知言語学的考察」

「先秦における「也」と「矣」の機能について—劉承慧(2008)の検証を中心に—」

「魯迅における芥川龍之介の受容—「鼻」「羅生門」を中心に—」

「上古漢語の接続詞「故」の文法機能と談話機能」

『説文解字』における「部」の意義と変遷」

『祖堂集』の「個什摩」疑問文研究」

2017年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

張憶「日本における莫言文学の受容：1949年以後の中国農村社会凝視を中心に」(指導教員) 藤井省三

李慧文「東アジアにおける村上春樹文学とウォン・カーウエイ映画について—ウォン・カーウエイと村上春樹の影
響関係を巡って—」(指導教員) 藤井省三

LI Xiaoting「馬王堆漢墓帛書『春秋事語』用字研究」(指導教員) 大西克也

市原靖久「上古中国語の一人称代名詞「我」と「吾」について」(指導教員) 大西克也

彭琳「寺山修司の作品における中国—魯迅との比較を中心に」(指導教員) 藤井省三

LI Jing「1929年-1930年における陶晶孫の左翼文芸活動について—『大衆文芸』でのプロレタリア文学作品の翻訳
を中心に—」(指導教員) 藤井省三

2017年度

今井順子「中国“語文”教科書のなかの魯迅—「藤野先生」から考える「魯迅の希望」—」(指導教員) 藤井省三

金子賢太郎「九〇年代台湾の同志雑誌における文学—《G&L》掲載作品の分析を中心に」(指導教員) 藤井省三

武茜「『搜神記』の編纂—「方士的儒生世界」の浮上」(指導教員) 齋藤希史

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

上原究「百回本『西遊記』の成立と展開—書坊間の関係を視野に—」

〈主査〉大木康 〈副査〉大西克也・齋藤希史・金文京・小松謙

徐子怡「中国における村上春樹の受容と「村上チルドレン」の成長—「70後(チャーリン HOW)」 「80後(バーリン
HOW)」作家群および一般読者を中心に—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉孫軍悦・伊藤徳也・桑島道夫・島村輝

明田川聡士「李喬文学と“台湾意識”の形成—フォークナー、安部公房の受容と“歴史素材小説”創作をめぐつ
て—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉松田康博・垂水千恵・三木直大・山口守

(乙)

なし

2017年度

(甲)

張瑤「中国における岩井俊二——その映画と小説の受容の比較研究」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉野崎敏・伊藤徳也・孫軍悦・桑島道夫

蓋曉星「日本における中国映画の受容——中華人民共和国建国（一九四九）以後」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉大木康・劉文兵・西澤治彦・松村茂樹

加納希美「現代中国語における数量詞の構文機能——属性・様態描写の機能を中心に——」

〈主査〉大西克也 〈副査〉楊凱榮・小野秀樹・木村英樹・佐々木勲人

楊冠穹「『八〇後』作家の韓寒と現代中国文化市場の変容」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉孫軍悦・伊藤徳也・小川利康・桑島道夫

八木はるな「白先勇小説翻案作品論——変奏する現代台湾文学——」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉松田康博・四方田(垂水)千恵・星名宏修・山口守

王曉白「張恨水文学と民国期『古都』北京の残照」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉村松伸・山口守・小川利康・河村昌子

(乙)

なし

1 2 東洋史学

1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2016～2017年度本専修課程の授業を担当したのは、教授1名・准教授4名・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけでなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるとともに、史学会大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡協議会、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわるとともに、また個別적으로는、中国社会文化学会、南アジア学会、社会経済史学会、アジア歴史地理情報学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係を持ちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	水島 司 (南アジア史)	(1997年10月～2018年3月)
准教授	佐川 英治 (中国古代史)	(2010年4月～現在)
准教授	吉澤 誠一郎 (中国近現代史)	(2001年4月～現在)
准教授	島田 竜登 (東南アジア史)	(2012年4月～現在)
准教授	守川 知子 (西アジア史)	(2016年4月～現在)

(2) 助教の活動

助教 大塚 修

在職期間 2014年4月～2018年3月

専門分野 西アジア史

主要業績

(著書)

共著、大塚修、池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史 120』(範囲:第45章「シャーン・ナーメ」(138-140頁)、第47章「トルコ語辞典」(144-146頁))、2016.11

共著、Eva Orthmann & Petra G. Schmidl (eds.), 『Sciences in the City of Fortune: The Dustur al-Munajjim and Its World (範囲:"The Dustur al-Munajjim as a Source of Early Ismaili History" (pp. 173-187))』、2017.9

単著、大塚修、『普遍史の変貌：ペルシア語文化圏における形成と展開』、2017.12

(論文)

大塚修、『集史』の伝承と受容の歴史：モンゴル史から世界史へ、『東洋史研究』、75-2、347-312頁、2016.9

大塚修、『2016年の歴史学界—回顧と展望—：西アジア・北アフリカ(イスラーム時代)』、『史学雑誌』、126-5、284-289頁、2017.5

(学会発表)

国際、Osamu OTSUKA、「Qashani and Rashid al-Din: A New Perspective on Ilkhanid Historiography」、Workshop: Dynamics in Middle Eastern Societies during the Mongol Period、2017.3.22

国内、大塚修、「歴史家カーシャニーの村度：二人の名宰相ラシード・アッディーンとアリーシャーの狭間で」、2017年度内陸アジア史学会大会、2017.10.28

国際、Osamu OTSUKA、「Hamd-Allāh Mustawfī and Īrān-zamīn: With a Special Reference to the Unexamined Source, the Dhayl-i Zafar-nāma」、Workshop: From the Mongols to the post-Safavids: Iranian Historical Studies in Japan、2018.3.7

国際、Osamu OTSUKA、「Kingship and Titles of Ilkhanid Rulers: Do They Really Claim Themselves Pādshāh-i Īrān?」、The Eighth Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies、2018.3.16

(受賞)

国内、大塚修、日本オリエント学会第38回奨励賞、日本オリエント学会、2016.11.12

(非常勤講師)

法政大学文学部、「イスラム世界論Ⅰ」、2016.4～9、2017.4～9、「東洋中世史」、2016.4～9、2017.4～9、「イスラム世界論Ⅱ」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3、「東洋史特講Ⅱ」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3
日本大学経済学部、「比較宗教文化論」、2016.4～9、2017.4～9、「地域と文化D」、2016.10～2017.3、2017.10～2018.3

青山学院大学文学部、「東洋史原典講読Ⅰ」、2016.4～2017.3、「東洋史特講(4)」、2017.4～2018.3

九州大学文学部、「イスラム史学講義Ⅵ」、2017.10～2018.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

エリック・シッケタンツ(ドイツ) 2015年4月～2017年3月

朱佩禧(中国) 2015年5月～2016年4月

牛貫傑(中国) 2016年6月～2016年9月

姚樂(中国) 2016年10月～2017年3月

王安泰(台湾) 2016年10月～2016年11月、2017年12月～2018年2月

李若文(台湾) 2017年1月～2017年2月

イエレ・ファンロットウム(オランダ) 2017年10月～2017年11月

朱瑪龍(台湾) 2017年12月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「ターハー・フサインの教育理念と20世紀前半のエジプト」

「吳淞鉄路建設事業と現地住民」

「鉄鋼都市ジャムシェドプルと近代化」

「19世紀までのベンガル・アジア協会組織研究」

「マドラス州における不可触民の教育の発展—1880年代から1920年代までを中心に—」

「「タジク民族」の出現—1920年代ウズベク・タジク間関係に焦点を当てて」

「清代科挙制度における不正とその処分規定」

「19世紀中葉、華南沿海における苦力貿易とイギリスの取り締まり政策」

「秦代郡県制における県組織—里耶秦簡を中心として—」

「ベトナム華僑の資金送金と横浜正金銀行」

「シンガポールの言語政策」

2017年度

「日清戦争に至る時期の両国海軍」

「イギリス東インド会社によるマニラ占領(1762-1764年)」

「蒋介石と北方における軍事支配者の抗争—中原大戦に至る時期を中心に—」

「シリア・パレスチナの私家文書にみる在地地主の農業経営」

「馬君武の社会主義理解 1902～1919」

「清仏戦争におけるイギリスの中立政策」

「朝鮮時代初期における文引制度の外交政策化—倭人・女真人への授職政策との関係の考察—」

「モンゴル帝国の権力抗争とアナトリア」

「ペルシア湾岸地域と真珠商」
「19世紀末の香港市場における日本商品」
「新羅における龍王祭祀について」
「沿海州をめぐる露清関係（1858～1860年）」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

金谷真綾「イルハン朝期の地方政権キルマーン・カラヒタイ朝における君主の表象と統治の正当化——いわゆる『王の歴史（Tarikh-i shahi）』の分析」（指導教員）森本一夫
徳永佳晃「カンダハール地方をめぐるサファヴィー朝とムガル朝の係争—両朝関係の性格の再検討—」（指導教員）森本一夫
大久保翔平「オランダ東インド会社のアヘン貿易、1667-1780年—生産・流通・消費—」（指導教員）島田竜登
瀬尾光平「第二次世界大戦後香港における爆竹規制の展開と華人社会」（指導教員）吉澤誠一郎
新津健一郎「古代西南中国地域社会史の研究—出土文字資料からみる後漢・三国期の地域社会—」（指導教員）佐川英治
殷晴「邸報と清代の情報伝達」（指導教員）吉澤誠一郎

2017年度

浅見千秋「立憲制下のイランのユダヤ教徒—請願と移住を中心に—」（指導教員）守川知子
柏倉優一「戦国楚国の司法と国家祭祀—春秋戦国時代楚国の政治・社会構造研究序説—」（指導教員）平勢隆郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

河野正「中華人民共和国初期、河北省農村における社会変容」
〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉池田嘉郎・黒田明伸・城山智子・山本真
工藤裕子「オランダ領東インドにおける華人の経済活動—1900-1930年のスマランを中心に—」
〈主査〉島田竜登 〈副査〉水島司・吉澤誠一郎・加納啓良・弘末雅士
久保茉莉子「南京国民政府時期における刑事司法」
〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉高見澤磨・黒田明伸・松原健太郎・中村元哉

(乙)

なし

2017年度

(甲)

植田暁「農牧経済の展開と近代フェルガナ」
〈主査〉水島司 〈副査〉島田竜登・守川知子・宇山智彦・小松久男
海老根量介「『日書』の展開と中国古代の社会」
〈主査〉平勢隆郎 〈副査〉吉澤誠一郎・佐川英治・小寺敦・小嶋茂稔
澁谷由紀「植民地期サイゴン市議会選挙の考察—ベトナム人都市政治運動の再評価—」
〈主査〉水島司 〈副査〉島田竜登・高田洋子・根本敬・古田元夫

(乙)

なし

1 3 中国思想文化学

1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治10年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。平成7年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成21年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成28年度の教員は、教授2名、助教1名で、平成29年度は、教授3名、助教1名であり、他に非常勤講師を4～5名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成4年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助手1名体制にともない、平成8年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に平成28年度は計17名（博士課程8名、修士課程4名、研究生5名）、平成29年度は計18名（博士課程9名、修士課程5名、研究生4名）が在籍、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。平成29年度前期には1名が留学中であった。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選ばれる事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年1～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会科学学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和48年～）が組織されて月例会を開いており、平成2年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

小島 毅 教授	専門分野	儒教史・東アジア王権論
横手 裕 教授	専門分野	道教史・中国三教交渉史
陳 捷 教授	専門分野	中国書籍史・東アジアの書籍交流史・日中文化交流史

(2) 助教の活動

李 龢書 助教 専門分野 道教思想史

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(書評)

李龢書「王皓月著、『析經求真：陸修靜與靈寶經關係新探』、『道教研究學報：宗教・歴史與社會』第9期（香港）、頁207-220、2018.2

(学会発表)

国際、李龢書「關於隋代以前重玄思想的幾點問題」、「首屆老子與道教文化國際學術研討會」、中国安徽省渦陽天靜宮、2017.3.27

国内、李龢書「關於中國中古道教思想史研究的幾點問題——以唐前重玄學為例」、「第59屆以文會學術研討會」、東京大學駒場キャンパス、2017.4.22

国際、李胤書「中古道教至尊神信仰體系之形成」、「中國魏晉南北朝史學會第十二屆年會暨國際學術研討會」、中国河北漳河經濟開發區、2017.8.18

国際、李胤書「儒道關係史裡的中古道教研究」、「中國中古史的史實與想像國際學術研討會」、中国天津南開大學、2017.8.23

国内、李胤書「中国中世道教における「三清」の信仰体系の成立について」、「日本道教学会第68回大会」、國學院大學、2017.11.11

国際、李胤書「中古道教對般若思想的容攝與改造——以《太玄真一本際妙經》《道教義樞》為中心」、「2017 東亞佛教思想文化國際學術研討會」、台北臺灣大學文學院、2017.12.1

(予稿・會議録)

国際會議、李胤書「關於隋代以前重玄思想的幾點問題」、「首屆老子與道教文化國際學術研討會」、『首屆老子與道教文化國際學術研討會論文集』所収、頁 323-336、中国安徽省渦陽天靜宮、2017.3.27

国内會議、李胤書「關於中國中古道教思想史研究的幾點問題——以唐前重玄學為例」、「第 59 屆以文會學術研討會」、頁 1-14、東京大學駒場キャンパス、2017.4.22

国際會議、李胤書「中古道教至尊神信仰體系之形成」、『中国魏晉南北朝史学会第十二屆年會暨國際學術研討會會議論文集（上冊）』所収、頁 859-875、中国河北漳河經濟開發區、2017.8.18

国際會議、李胤書「儒道關係史裡的中古道教研究」、「中國中古史的史實與想像國際學術研討會」、『中國中古史的史實與想像國際學術研討會論文集』所収、頁 397-409、中国天津南開大學、2017.8.23

国際會議、李胤書「中古道教對般若思想的容攝與改造——以《太玄真一本際妙經》《道教義樞》為中心」、「2017 東亞佛教思想文化國際學術研討會」、頁 1-13、台北臺灣大學文學院、2017.12.1

(翻訳)

中村未来著、李胤書訳「作為統治手段之「恥」：以《逸周書》三訓為中心」『東亞觀念史集刊』第 11 期（臺北）、頁 311-337、2016.12

(他機関での講義等)

非常勤講師、武蔵大学 人文学部、「東アジアの宗教（前期・後期）」、2015.4～2018.3

非常勤講師、武蔵大学 人文学部、「中級中国語（前期・後期）」、2016.4～2017.3

非常勤講師、麻布高等学校、「2016 年度教養総合授業：「中国」学 「道教とはなにか」」、2016.7.8

(3) 外国人研究員・内地研究員

本橋裕美（日本學術振興會特別研究員）

2014 年 4 月～2017 年 3 月

姜智恩（台湾大學助理教授）

2017 年 1 月～2 月

金光来（東京大學人文社會系研究科研究員）

2017 年 4 月～現在

李承貴（南京大學教授）

2017 年 6 月

韓睿媛（朝鮮大學校教授）

2017 年 8 月～2018 年 8 月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

「江戸儒学者による荀子研究」

『『莊子』における「聖人」観」

「近世日本における『孫子』について」

2017 年度

「黄宗羲の忠節観について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

なし

2017年度

LEE Chin-Ying「孝」概念と治者階層：国民道徳教育における中江藤樹の孝子の姿（指導教員）小島毅
張瀛子「清代の荀子再評価『十六字心伝』から恵棟まで」（指導教員）中島隆博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

商兆琦「明治時代の知識人と足尾鉍毒事件—「近代性」問題への思想史的接近」
〈主査〉小島毅 〈副査〉横手裕・中島隆博・黒住真・澤井啓一

(乙)

なし

2017年度

(甲) (乙)

なし

1.4 インド語インド文学

1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では三千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8年（1996）度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられた。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。さらに、プラークリット語各種やヒンディー語を学べる機会も設けている。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

非常勤講師

水野善文、宮本城、宮本久義、矢島道彦（2016年度）

(2) 助教の活動

河崎 豊

在職期間 2016年4月ー現在

研究領域 インド学、プラークリット語学文学、ジャイナ教

主要業績

(論文)

河崎豊、「飢えと屍肉 — 何のための食事か —」、『印度民俗研究』、15号、3-20頁、2016.3

河崎豊、「ジャイナ教団におけるリーダーの適性について」、『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』、27号、37-52頁、2016.8

河崎豊、「ジャイナ教における虚偽の概念をめぐって」、『中央学術研究所紀要』、45号、151-164頁、2016.11

河崎豊、「パーリ文献の paññā」、『仏教文化研究論集』、18・19号、5-15頁、2017.3

河崎豊、「ハリバドラとカーマ肯定論」、『印度学仏教学研究』、66巻1号、469-464頁、2017.12

Kawasaki, Yutaka. "Haribhadra on property ownership of Buddhist monks," *International Journal of Jaina Studies* (Online), Vol.13, No.5, 1-12 頁、2017

(解説)

河崎豊、「ジャイナ教関連書籍・論文紹介」、『ジャイナ教研究』、22号、67-82頁、2016.9

河崎豊、「ジャイナ教関連書籍・論文紹介」、『ジャイナ教研究』、23号、100-115頁、2017.9

(項目執筆)

河崎豊、「ジャイナ教の神話・伝説」、『世界神話伝説大事典』（編：篠田知和基・丸山顯徳）、勉誠出版、165-167頁、2016.8

河崎豊、「アショーカ」、『世界神話伝説大事典』（編：篠田知和基・丸山顯徳）、勉誠出版、433-434頁、2016.8

河崎豊、「八正道」、『上座仏教事典』（編：パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編集委員会）、めこん、381-382頁、2016.10

河崎豊、「アヒンサー（不殺生）」、『インド文化事典』（編：インド文化事典編集委員会）、丸善出版、210-211頁、2018.1

(学会発表)

国内、河崎豊、「ジャイナ教における aparigrahavrata の解釈をめぐって」、日本印度学仏教学会第 67 回学術大会、東京大学、2016.9.4

国際、Kawasaki, Yutaka. “Haribhadra’s Criticism of Buddhism on the Concept of Possession (*parigraha*),” 19th Jaina Studies Workshop, School of Oriental and African Studies, London University, 2017.3.18

国内、河崎豊、「誰が出家すべきか 白衣派ジャイナ教資料に見える議論をめぐって」、ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性 第 2 回シンポジウム、京都大学、2017.3.25

国内、河崎豊、「kāma 肯定論に対するジャイナ教の批判」、日本印度学仏教学会第 68 回学術大会、花園大学、2017.9.2

国内、河崎豊、「ジャイナ教文献に見られる葬送儀礼」、ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性 第 4 回シンポジウム、東京大学、2018.3.25

(予稿・会議録)

国際会議、Kawasaki, Yutaka. “Haribhadra’s Criticism of Buddhism on the Concept of Possession (*parigraha*),” 19th Jaina Studies Workshop at SOAS, Brunei Gallery Lecture Theatre, University of London、2017.3.18、*Jaina Studies: Newsletter of the Centre of Jaina Studies*, 12, 8 頁、2017.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

特別演習 2 名

2017 年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

なし

2017 年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲) (乙)

なし

2017 年度

(甲) (乙)

なし

15 インド哲学仏教学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。以来、現インド語インド文学専修課程と密接な関係を保ちつつ、現在に至っている。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播してそれぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2018年度現在、教員は教授2名、准教授2名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野（南アジア・東南アジア・仏教コース）に対応し、その一部を構成する。ここでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門などと連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年2~4名ほどであり、学士入学者も1~2名ほどいる。学部卒業生の半分近くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学するが、一般企業に就職する者もいる。最近の傾向として、一般企業への就職が増えてきている。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくるものも稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としているから、結果的には、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通である。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に4回研究例会を開催している。ここでは、大学院の博士課程在学学生などによる研究発表、国際会議等で海外に出張した教員による帰朝報告、海外留学生の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、原則として年に1回、『インド哲学仏教学研究』が刊行され、好評を得ている。

本専修課程が関わるインド哲学研究ならびに仏教学は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。2016、2017年度には、韓国の全南大学校と大学院生の交流シンポジウムを開催し、2016年度には、中国の北京大学を会場に、東国大学校(ソウル)、北京大学(北京)、台湾大学(台北)とともに合同でシンポジウムを開催し、教員による発表が行われた。また、数名の留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の諸学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	丸井 浩	専門分野	インド哲学	在職期間	1992年4月より2018年3月	定年退職
教授	下田 正弘	専門分野	インド仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る	
教授	養輪 顕量	専門分野	日本仏教	在職期間	2010年4月より現在に至る	
准教授	高橋 晃一	専門分野	インド仏教	在職期間	2017年4月より現在に至る	

(2) 助教の活動

青野 道彦 専門分野 初期仏教(戒律)

在職期間 2016年4月～現在

主要業績

(論文)

青野道彦「仏教文献における注釈構造の可視化に関する予備的研究—パーリ語仏教文献を事例として」『研究報告人文科学とコンピュータ』, vol. 2017-CH-114, no. 2, 2017, pp. 1-5

青野道彦「世人の非難を受けて制定された律規定—パーリ律比丘分別を参照して」『仏光学報』新三巻第一期, 2017, pp. 87-106

- 青野道彦「日本仏教における受戒儀礼の変遷—戒統に注目して」『大学院研究論集』（韓国・中央僧伽大学校）
vol. 9, 2016, pp. 195-226
- 青野道彦「pamsukūla について」『仏教学研究』（韓国・仏教学研究会）, vol. 46, 2016, pp. 1-15
- （その他）
- 青野道彦「上座部仏教僧と煙草—古代の戒律と現代の僧院生活」『春秋』第 586 号, 2017, pp. 16-19
- 青野道彦「上座部仏教僧侶の喫煙に関する研究—戒律文献の規定と実際」『平成 27 年度公益財団法人たばこ
総合研究センター助成研究報告』, 2016, p.132-154

(3) 外国人研究員・内地研究員

- 2016 年度： 何立新（中国）
2017 年度： Yokota, Samuel Yhubun（パラグアイ）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

- 2016 年度
特別演習 2 名
- 2017 年度
特別演習 4 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

- 2016 年度
左藤仁宏「Mahavastu に挿入された仏伝経典「大観察経」の研究」（指導教員）下田正弘
- 2017 年度
井手了「Karunapundarika の研究—第 5 章 dana 品における釈迦本生説話の考察」（指導教員）下田正弘
權圓濟「Mahāparinibbana-sutta における七不衰退法の研究—ブッダゴーサの注釈を中心として—」（指導教員）下田
正弘

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

- 2016 年度
（甲）
鄭祥教「『中観学派によるブドガラ（人格主体）説批判』」
〈主査〉下田正弘 〈副査〉 蓑輪顕量・斎藤明・桂紹隆・上田昇
一色大悟「『順正理論』における法（dharma）の認識」
〈主査〉下田正弘 〈副査〉 蓑輪顕量・馬場紀寿・斎藤明・佐古年穂
日野慧運「金光明経の研究—インド語原典の思想的発展を中心として—」
〈主査〉下田正弘 〈副査〉 蓑輪顕量・馬場紀寿・鈴木隆泰・渡辺章悟
- （乙）
藤井隆道「古典インド思想における文と行為の理論—『シュローカヴァールツィカ』「文題論」研究—」
〈主査〉丸井浩 〈副査〉 下田正弘・梶原三恵子・赤松明彦・小川英世
- 2017 年度
（甲）
韓尚希「パーリ仏教文献における聖者と修道」
〈主査〉下田正弘 〈副査〉 蓑輪顕量・高橋晃一・馬場紀寿・李慈郎
近藤隼人「古典サーンキヤ体系展開史論—『ユクティディーピカー』による復古と改新—」
〈主査〉丸井浩 〈副査〉 高橋晃一・馬場紀寿・宮本久義・志田泰盛
王俊淇「Prasannapadā 第 25 章の研究」
〈主査〉下田正弘 〈副査〉 蓑輪顕量・高橋晃一・馬場紀寿・斎藤明
- （乙）
小野卓也「インド古典討論術研究—ウダヤナ『ニヤーヤ・パリシシュタ』における詭弁と敗北の場合—」
〈主査〉丸井浩 〈副査〉 蓑輪顕量・桂紹隆・小野基・護山真也

16 イスラム学

1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2016年度及び2017年度は教授1名、准教授1名がそれぞれ近代より前の古典期イスラムの法学や伝承や思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、オスマン史研究、現代アラブ政治、イラン思想、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属する西アジア歴史社会専門分野と連携しつつ、さらには東洋文化研究所ならびに大学院総合文化研究科の教員2名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2~3名前後である。学部及び大学院の在籍数は、2016年度は16名、2017年度は18名である。他大学からの学士入学者もいる。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2016年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法・預言者伝承
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

2017年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法・預言者伝承
准教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「アンリ・コルバンにおける imaginal と imagination について」
『四典要会』における馬徳新の来世思想

2017年度

「イブン・トゥファイルの思想—ヤクザーンの子ハイイの物語から」
「英国若者ムスリムの社会統合とメディア利用」
「近代エジプトにおける一夫多妻についての見解—マラク・ヒフニー・ナースィフの『女性論』を例に」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

大淵久志「イスラーム神学における天使論の意義——天使と預言者の優位性についてのファフルッディーン・ラーズィーによる議論を中心に」〈指導教員〉菊地達也

2017年度

木下誠「イフワーン・アッ=サファーの政治哲学の研究：政治哲学とその活動の関係性に関する一考察」
〈指導教員〉菊地達也

佐藤春香「マムルーク朝期ウラマーの社会的役割～ウラマーと庶民層との関係を中心に～」〈指導教員〉柳橋博之

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

矢口直英「フナイン・ブン・イスハーク『医学問答集』研究」

〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・高橋英海・鎌田繁・坂井建雄

(乙)

なし

2017年度

(甲) (乙)

なし

17 西洋古典学

1. 研究室活動の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語でしるされた文献全体を対象とする。そして、それを通じて古典古代世界の文化全体の把握をもめざす学問である。西洋社会を理解する上で、この学問の重要性はますます強調するまでもなく、欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問である。本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は助教を除くと1人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語／ラテン語・韻文／散文いずれをもおおえるように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。2016～2017年度は、「クラシカル・セミナー」と称する研究会を、修士論文報告会など学生用報告に12回ほど開催した。このほか、世界的研究者の研究の最先端に触れるようにしている。また、4学期制になったのを利用して、1学期（6週間半）、週2コマ、2単位講義を通常の非常勤講師の授業および集中講義とは別に、一種の半集中講義として、外国人の著名教授にお願いすることにした。2017年度はA2学期にエジンバラ大学ダグラス・ケアンズ（Douglas Cairns）教授に「古典文学におけるemotion」と題する授業をしていただいた。

研究室紀要（査読つき）を原則として年1回発行している。2018年3月に第10号を刊行した。

この他、一種の課外活動として、東京大学本部「体験活動」プログラムの資金援助を受け、2016年度、2017年度に、オックスフォード大学クライスト・チャーチを主たる宿泊地として、「古典学とコモンロー」入門と称する、サマープログラムを実施した。参加者は大学院生を含めると、2016年度、2017年度とも、約20名を数える。学生はこのほか、各自のテーマを滞在中に研究し、最終発表会にてプレゼンテーションを行った。この試みの手ごたえは十分大きいので、今後も継続の予定である。また、大学院生に関しては、東京大学スーパーグローバル事業の一つとして、オックスフォード大学との研究交流活動の一環として、JASSO（日本学生支援機構）より奨学金をえて、2016年度は2名、2017年度は2名を先方に1～3か月留学させている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

葛西 康德 ギリシア・ローマ法とその普及、法廷弁論、ギリシア宗教、西洋古典学継受史

（教授）2011年度～

(2) 助教の活動

吉田 俊一郎

在職期間 2014年度～

研究領域 ラテン語散文、修辞学

主要業績

（著書）

単著、吉田俊一郎、『ワレリウス・マクシムス『著名言行録』の修辞学的側面の研究』、東海大学出版部、2017.3

（論文）

吉田俊一郎、「has translaticias quas proprie sententias dicimus (Sen. Con. 1.pr.23)」、『フィロロギカ』、11、80-85頁、2016.6

吉田俊一郎、「ローマ帝政初期の模擬弁論と歴史記述」、『西洋史研究 新輯』、45、138-153頁、2016.11

Shunichiro Yoshida、「Political Crisis in Rhetorical Exercises of the Early Roman Empire」、『Interface - Journal of European Languages and Literatures』、2、39-50頁、2017.2

（書評）

S. Feddem、「Die Suasorien des älteren Seneca: Einleitung, Text und Kommentar」、『西洋古典学研究』、65、109-112頁、2017.3

(学会発表)

国内、吉田俊一郎、「大セネカにおける警句 *sententiae* に関する一考察」、第 16 回フィロロギカ研究集会、
2017.10.7

(翻訳)

共訳、Quintilianus、"Institutio Oratoria"、森谷宇一、戸高和弘、伊達立晶、吉田俊一郎、『クインティリアヌス
弁論家の教育 4』、京都大学学術出版会、2016.12

(非常勤講師)

立教大学、「ギリシア語 1、ギリシア語 2」、2016.4~2018.3

首都大学東京、「西洋古典学演習 (ラテン文学)・西洋古典学研究法第二」、2016.4~2017.3

早稲田大学、「ラテン語 1、ラテン語 2、ギリシャ・ラテン文学 1、ギリシャ・ラテン文学 2」、2017.4~2018.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

「メナンドロス『エピトレポンテス』における父スミークリネースのキャラクター造形について」

「Priam's Supplication and Achilles's Response in Book 24 of the Iliad (『イリアス』24 巻におけるプリアモスの嘆願と
アキレウスの応答について)」

2017 年度

「アイスキュロス『アガメムノン』におけるカッサンドラの入場から発話までの演出」

「古代ギリシアにおける供犠の一側面」

「ルクレティウス『物の本質について』における修辞学的側面」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

本田拓也「田中美知太郎の古代哲学研究 ―日本における西洋古典学の受容と方法の一側面―」(指導教員) 葛西
康德

2017 年度

長島真以「A Study on Lucan's Rhetorical Poem: Exempla and Retribution in Bellum Civile (ルーカヌス研究: 『内乱』
に於ける範例と報いについて)」(指導教員) 葛西康德

岡野航星「ホラーティウス『カルミナ』における韻律の使用とその解釈の可能性に関する試論―アルカイオス風ス
タンザでの詩作を巡って―」(指導教員) 葛西康德

加藤弘朗「ギリシア叙事詩の伝統と Hexameter 前史」(指導教員) 葛西康德

佐藤洋平「古典ギリシア語小辞 *καὶ μὲν δὴ* の文法的解釈及びその機能・意味の再検討」(指導教員) 葛西康德

篠田昌史「アプレイウスのメタモルフォセスと SA」(指導教員) 葛西康德

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

(甲) (乙)

なし

2017 年度

(甲) (乙)

なし

18 フランス語フランス文学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にもなって、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授4名、外国人教師(准教授)1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実際的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2017年度の大学院学生数は、修士課程13名、博士課程12名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格(Master II)を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。もちろん、本研究科に課程博士論文を提出し博士号を取得する学生もコンスタントに存在する。一方で、修士課程修了後に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年10名程度で、2017年度の学部在学学生は16名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、他専修課程・他学部の学生に対しては「原典を読む」の枠内で講読授業を提供している。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院2コマ(「アカデミック・ライティング」を含む)、学部2コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年1~2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリおよびリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール(高等師範学校)との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 教授 月村辰雄(フランス中世文学)
中地義和(ランボー、フランス近代詩)
野崎 敏(ネルヴァル、フランス19世紀文学)
塚本昌則(ヴァレリー、フランス20世紀文学)

(2) 助教の活動

2016-2017年度

前之園望(マエノソノ ノゾム)

略歴

- | | |
|----------|-----------------------------------------------------------|
| 2000年3月 | 東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修卒業 |
| 2000年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程入学 |
| 2002年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了 |
| 2002年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程入学 |
| 2002年10月 | フランス国立高等師範学校リヨン校文学人文学科留学 [~2003年9月/交換留学] |
| 2002年10月 | フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究科
フランス言語文学文化研究専攻DEA課程入学 |
| 2003年9月 | フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究科
フランス言語文学文化研究専攻DEA課程修了 |
| 2006年10月 | フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究科
文学芸術学専攻博士課程入学 |

2010年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得満期退学
2016年3月 フランス国立リュミエール・リヨン第2大学文学言語科学芸術学研究所
文学芸術学専攻博士課程修了（文学芸術学博士）
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教

研究領域 20世紀フランス文学、シュルレアリスム（特にアンドレ・ブルトン研究）

主要業績

（論文）

「声は石になった」、『声と文学 拡張する身体の誘惑』、平凡社、2017.3、p.232-255

「線と糸との物語——アンドレ・ブルトンの『三部会』、『シュルレアリスムと抒情による蜂起』、エディシ
ョン・イレース、2017.7、p.118-140

「ブルトンの詩的描写とプロジェクションマッピング」、『ユリイカ ダダ・シュルレアリスムの21世紀』
8月臨時増刊号、青土社、2017.8、p.270-279

（学会発表）

「潜在的現実の現働化——アンドレ・ブルトンにおけるポエム=オブジェの詩学」、日本フランス語フラン
ス文学会秋季大会、名古屋大学、2017.10.28

『キュビスム詩』の徴のもとに——アンドレ・ブルトン「ナジャ」の断片形式』、世界文学・語圏横断ネッ
トワーク第8回研究集会、立教大学、2018.3.30

（翻訳）

フィリップ・ティエボー、「フランスの工芸におけるジャポニスム」、『別冊太陽 ガレとラリックのジャポ
ニスム』、平凡社、2016.7、p.24-26

フィリップ・ティエボー、「一八七八年パリ万博の日本庭園について—ガレが見た『日本の農家』と庭」、
『別冊太陽 ガレとラリックのジャポニスム』、平凡社、2016.7、p.134-136

アンドレ・ブルトン、「物事を見抜く若き見者よ、次に語るのはあなただ……」、『現代詩手帖 ダダ・シュ
ルレアリスムの可能性』、3月号、思潮社、2017.3、p.22-29

アンドレ・ブルトン、「物事を見抜く若き見者よ、次に語るのはあなただ……」、『シュルレアリスムと抒情
による蜂起』、エディシオン・イレース、2017.7、p.76-91

アンドレ・ブルトン、「三部会』、『シュルレアリスムと抒情による蜂起』、エディシオン・イレース、2017.7、
p.92-117

（研究テーマ）

文部科学省科学研究費補助金、研究活動スタート支援、研究代表者、「アンドレ・ブルトンの詩学」、2016～
2017

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(B)、分担研究者、「『作者』の死と再生：フランス・ロマン主義文
学の現代的意義をめぐる総合的研究」、2017～

（非常勤講師）

明治大学、「フランス語Ⅰ」、「フランス語Ⅱ」、「フランス語Ⅲ」、2016.4～2018.3

(3) 外国人教員の活動

マリアンヌ・シモン＝及川 (Marianne SIMON-OIKAWA)

略歴

1989年9月 国立高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）およびパリ第7大学入学

1990年9月 同大学にて仏文（現代文学）学士号、英文学士号取得

1991年9月 同大学にて修士号取得（現代文学）

1992年7月 大学教育教授資格（アグレガシオン）取得

1993年9月 パリ第7大学にてDEA(PhD)取得（現代文学）

1993年9月～1995年8月 東京大学研究生

1995年9月～1998年9月 リール大学講師（現代文学）

1996年9月 パリ第7大学にて日本語学士号取得

1997年9月 同大学にて日本語修士号取得

1999年12月 パリ第7大学にて文学博士号取得（現代文学）

1999年4月～2005年4月 早稲田大学非常勤講師（フランス文学）

2000年9月～2005年9月 慶應義塾大学訪問講師（フランス文学）

2000年4月-2008年8月 日仏会館客員研究員
2006年10月 東京大学准教授
研究対象 フランス文学と絵画；日仏両文化における視覚詩の伝統
主要業績

(著書)

共著、Marianne Simon-Oikawa, H el ene Campaignolle-Catel, Sophie Lesiewicz, Ga elle Th eval et al., *Livre/ Po esie : une histoire en pratique(s)*,  ditions des Cendres, 2017

(論文)

Marianne Simon-Oikawa, « L'allumette et le pyrog ene : Le Japon de Pierre Albert-Birot », *Revue de langue et litt erature fran aises*, 49, p.671-687, 2016.10

Marianne Simon-Oikawa et H el ene Campaignolle-Catel, « Pr eface », *Textimage*, 8, 2017

Marianne Simon-Oikawa, « L'image  crite dans les livres de po emes de Pierre Albert-Birot », *Textimage*, 8, 2017

Marianne Simon-Oikawa et Carole Aurouet, « Un infatigable exp erimentateur », *Europe*, 1056, p.3-5, 2017.4

Marianne Simon-Oikawa, « Dire, voir, faire - Les po emes visuels de Pierre Albert-Birot », *Europe*, 1056, p.89-99, 2017.4

(学会発表)

国内、Marianne Simon-Oikawa, "Poetry and Space: The Collaborative Poems of Niikuni Seiichi and Pierre Garnier", panel "From Modernism through Digital Culture in Japan: Poetry and the Visual", The Second EAJS Japan Conference, 神戸大学, 2016.9.24

国際、Marianne Simon-Oikawa, « Les relations de Pierre et Ilse Garnier avec Niikuni Seiichi, Pierre et Ilse Garnier, deux po etes face au monde », Universit  de Tours, 2016.10.6

(会議主催(チェア他))

国内、« Texte et image - Hommage   Anne-Marie Christin », 主催、東京大学, 2016.5.21

国際、« Pierre Albert-Birot (1876-1967) au confluent des avant-gardes », 主催、Institut M moires  dition Contemporaine (Normandie, France), 2017.5.4~2017.5.5

国際、« Jacques Pr vert : d tonations po tiques », 主催、centre international de Cerisy-la-Salle (Normandie, France), 2017.8.11~2017.8.18

(4) 2016~2017 年度受け入れ外国人研究者

2016 年度

Julien Blaine (詩人)

Yoon Jung Do (仁荷大学教授)

Jan Baetens (ルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)教授)

Cl lia Zernik (フランス国立高等美術学校教授)

Michel Jarrety (パリ=ソルボンヌ大学教授)

William Marx (パリ・ナンテール大学教授)

Anne-Ga elle Saliot (ノースカロライナ州・デューク大学准教授)

2017 年度

Vincent Debaene (ニューヨーク・コロンビア大学/ジュネ ヴ大学教授)

Jean-Luc Steinmetz (ナント大学名誉教授)

Antoine Compagnon (コレージュ・ド・フランス教授)

Patrizia Lombardo (ジュネ ヴ大学名誉教授)

Andr  Guyaux (パリ=ソルボンヌ大学教授)

Aur lia Cervoni (パリ=ソルボンヌ大学助教)

Paolo Tortonese (パリ第3大学教授)

Henri Scepi (パリ第3大学教授)

Jean-Louis Jeannelle (ルーアン大学教授)

William Marx (パリ・ナンテール大学教授)

Cl lia Zernik (フランス国立高等美術学校教授)

J. M. G. Le Cl zio (2008年ノーベル文学賞受賞作家)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 「語りの要請と愛と—モーリス・ブランショ『死の宣告』論—」
- 「シュペルヴィエルにおける少女」
- 「『未来のイヴ』論」
- 「ランボー「地獄の季節」における詩的想像力」
- 「マラルメ研究」
- 「フランス・ボンジュ『物の味方』論」

2017年度

- 「『マルドロールの歌』における語り手の断片化と生成の世界」
- 「ステファヌ・マラルメ研究」
- 「『シルヴィ』における主人公と3人の女性たち」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- 入交広晃「フロベールにおけるアイロニー」〈指導教員〉野崎敏
- 武藤奈月「クレチアン・ド・トロワにおける語りと物語構造」〈指導教員〉月村辰雄
- 加藤広和「忘却のエクリチュール：モンテーニュにおけるエクリチュールと倫理」〈指導教員〉月村辰雄

2017年度

- 加藤一輝「ジョゼフ・ド・メーストルにおける来たるべき合一の概念—反革命からペンテコステへ—」〈指導教員〉野崎敏
- 和田雅人「アポリネールのカリグラム（1918）と美術批評の関係」〈指導教員〉中地義和
- 大野田裕矢「存在と不在の狭間で ポール・ヴァレリー『魅惑』における揺らぎの詩法」〈指導教員〉塚本昌則
- 谷内青羽「老いの発見と受容：コレットの『青い灯』について」〈指導教員〉塚本昌則
- 深田孝太郎「朝に真理を学んで夕べに死ぬこと——マルグリット・ユルスナールにおける自己を描くエクリチュールの研究」〈指導教員〉中地義和

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲) (乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

- 村中由美子、*Marguerite Yourcenar, autre portrait d'une voix. Esthétique d'un écrivain au miroir du néoclassicisme de l'Entre-deux-guerres* (パリ第4大学/ルーヴェン・カトリック大学)
- 木内堯、*L'Éducation sentimentale et la littérature romantique* (パリ第8大学)
- 谷川雅子、*Bayle et Port-Royal : la tolérance et la morale de soumission* (パリ第4大学)

2017年度

(甲) (乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

- 上杉誠、*L'Honneur dans l'œuvre de Stendhal. Enjeux éthiques, esthétiques et politiques* (パリ第3大学)
- 中野芳彦、*La Poétique du voyage dans la poésie lyrique et les textes de voyage de Victor Hugo sous la monarchie de Juillet* (パリ第7大学)

19 南欧語南欧文学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、94年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業(学部・大学院共通)も年度により開講されてきた。また、2001年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2016～2017年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように3名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 : 浦 一章 (イタリア13・14世紀文学)

准教授 : Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート) (イタリア15世紀文学)

助教 : 長野 徹 (イタリア近現代文学・イタリア児童文学)

(2) 助教の活動

長野 徹

在職期間 1997年10月～現在

研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学

主要業績

(論文)

長野徹、「モラヴィアのシュルレアリスム～『超現実主義的・風刺的短篇集』をめぐって～」、『イタリア語イタリア文学』、第8号、pp.119-146、2016.4

(翻訳)

個人訳、ジョヴァン・フランチェスコ・ストラパローラ『愉しき夜』"Le piacevoli notti"、平凡社、2016.6

個人訳、ディーノ・ブツァーティ『古森の秘密』"Il segreto del Bosco Vecchio"、東宣出版、2016.7

個人訳、ディーノ・ブツァーティ『魔法にかかった男』"Il borgese stregato"、東宣出版、2017.12

(他機関での講義等)

セミナー、国際子ども図書館、「今日のイタリア児童文学と児童書をめぐる状況」、2016.6

非常勤講師、共立女子大学、「基礎イタリア語」、2016.4-2018.3

(マスコミ)

「言葉が彩る新しい世界へ」、『日本経済新聞』2017年11月12日 日曜版

(3) 外国人教員の活動

Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート)

研究領域 15世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容

在職期間 2011年4月～現在

主要業績

(著書)

共著、Lorenzo Amato、『Transmission of knowledge in the Late Middle Ages and the Renaissance, Atti del Convegno del Progetto TRALMAR- 26-27 luglio 2017』、2017

(論文)

Lorenzo Amato、『Nuovi appunti sulla tradizione manoscritta di Giovan Battista Strozzi il Vecchio: fisionomia ed evoluzione del corpus delle Rime』、『Medioevo e Rinascimento』、n.s. 27、pp. 259-308、2017

Lorenzo Amato、『Orchi, mostri e ninne-nanne. Tradizione umanistica e folclore in alcuni madrigali inediti di Giovan Battista Strozzi il Vecchio』、『Per leggere』、pp. 9-29、2017

(書評)

F. Muecke、『Beatus Rhenanus, the Roman Comitia and Biondo Flavio's Roma Triumphans』、『Roma nel Rinascimento』、2017

F. Muecke、『Biondo Flavio on the Roman Elections』、『Roma nel Rinascimento』、2017

C. Berra、『La gratulatoria di Giovanni Della Casa a Ranuccio Farnese』、『Roma nel Rinascimento』、2017

T. A. Hass、『Questioning Virgil: Poetic Ambition and Religious Reform in Erasmus Laetus and Baptista Mantuanus』、『Roma nel Rinascimento』、2017

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「ピランデッロ演劇の軌跡」(シチリア的ヴェリズモから演劇革命への道程)

2017年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

小畑節子「カルロ・レーヴィ『キリストはエボリに止りぬ』論—イタリア南部農民たちの食と象徴的世界—」(指導教員) 浦一章

2017年度

辻岡三南子「アルベルト・モラヴィア作品研究—3人の Michele—」(指導教員) 浦一章

宇賀神百合花「ジャンニ・ロダリー作品における旅の役割—『青矢号』を中心に—」(指導教員) 浦一章

藤澤大智「レオパルディの唯物主義」(指導教員) 浦一章

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲) (乙)

なし

2017年度

(甲) (乙)

なし

20 英語英米文学

1. 研究室活動の概要

本学に英文学が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品まで幅広い。2017年4月現在、専任教員は教授3名、准教授2名、外国人客員教授1名、専任講師1名、助教2名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした「英語漬け」の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1~2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhDの学位を取得した者はすでに10名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を35名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	今西 典子	IMANISHI, Noriko	(英語学、2016年度まで)
教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学)
教授	後藤 和彦	GOTO, Kazuhiko	(アメリカ文学、2017年度から)
教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
准教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
専任講師	WILLIAMS, Laurence		(イギリス文学)
助教	岸 まどか	KISHI, Madoka	(アメリカ文学、2016年度まで)
助教	中嶋 英樹	NAKAJIMA, Hideki	(イギリス文学)
助教	木村 明日香	KIMURA, Asuka	(イギリス文学、2017年度から)

(2) 助教の活動

岸 まどか

在職期間 2015年4月－2017年3月

研究領域 アメリカ文学

主要業績

(受賞)

国際、岸まどか、Madoka Kishi、Lewis P. Simpson Distinguished Dissertation Award、“The Erotics of Race Suicide: the Making of Whiteness and the Death Drive in the Progressive Era, 1880-1920.”、ルイジアナ州立大学、Louisiana State University、2016.3.20

国際、岸まどか、Madoka Kishi、Ann Veronica Simon Outstanding Gender Studies Dissertation Award、“The Erotics of Race Suicide: the Progressive Era, Whiteness, and the Death Drive”、ルイジアナ州立大学、Louisiana State University、2016.5.5

中嶋 英樹

在職期間 2016年4月－現在

研究領域 イギリス文学

主要業績

(著書)

共著、金井嘉彦・吉川信編、『ジョイスの畏——『ダブリナーズ』に嵌まる方法』、言叢社、2016.2

(学会発表)

国内、中嶋英樹、『『テレニー』におけるテレパシー的「流体」と過剰な親密性』、日本英文学会関東支部第14回大会、明治学院大学、2017.6.17

(非常勤講師)

東京藝術大学、「英語上級」、2016.4～2017.3

東京医科歯科大学、「英語講読」、2016.4～2016.9、「Global Communication」、2016.4～2017.3

東京藝術大学、「英語演習」、2017.4～2018.3、「英語初級」、2017.10～2018.3

東京医科歯科大学、「英語講読」、2017.4～2017.9、「Global Communication」、2017.4～2018.3

木村 明日香

在職期間 2017年4月－現在

研究領域 イギリス文学

主要業績

(論文)

Asuka Kimura、“The Widows’ Chorus and Boy Actors in Richard III.” *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews*, vol. 30, no. 3, 142-44, 2017

(学会発表)

国際、Asuka Kimura、“Widows’ Recognition of their Husbands’ Ghosts and the Issues of Memory in Elizabethan Drama”、JFIGS Friday Forum、University College London、2016.2.5

国内、木村明日香、「モルフィ公爵夫人と少年俳優」、第56回シェイクスピア学会、近畿大学東大阪キャンパス、2017.10.7

国内、木村明日香、「初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多層性」、日本英文学会関東支部2017年度秋季大会、中央大学後楽園キャンパス、2017.10.28

(非常勤講師)

東京藝術大学音楽学部、「上級英語 Ia、IIa」、2017.4～2018.3

明治薬科大学、「英語ライティング B」2017.9～2018.3

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark : 客員教授

(論文)

Steve Clark, “A City Without a Nation: Personal and Collective Memory in the Fiction of Gopal Baratham.” *Singapore Literature and Culture: Current Directions in Local and Global Contexts*, edited by Angelia Poon and Angus Whitehead, 82-98, Routledge, 2017

Steve Clark, "Isabella Bird, Victorian Globalism, and Unbeaten Tracks in Japan (1880)." (co-written with Laurence Williams), *Studies in Travel Writing* 21, 1-16, 2017

Steve Clark, "Something's Lost but Something's Gained: Joni Mitchell and Postcolonial Lyric." *Canadian Music and American Culture: Get Away from Me*, edited by Tristanne Connolly and Tomoyuki Iino, 27-46, Routledge, 2017

(講演・学会発表)

国際、Stephen Clark, "Re-Orienting Romanticism." *Romantic Legacies*, National Chengchi University, Taiwan, 2016.11.18-19

Laurence Williams : 専任講師

(論文)

Laurence Williams, "Jonathan Swift and Kaempfer's History of Japan: The Origins of the Court and Empire of Japan (1727/8)." *Notes and Queries* 63, 79-82, 2016

Laurence Williams, "Isabella Bird, Victorian Globalism, and Unbeaten Tracks in Japan (1880)." (co-written with Steve Clark), *Studies in Travel Writing* 21, 1-16, 2017

Laurence Williams, "'Like the Ladies of Europe?': Female Emancipation and the 'Scale of Civilization' in Victorian Women's Writing on Japan, 1840-80." *Studies in Travel Writing* 21, 17-32, 2017

(講演・学会発表)

国内、Laurence Williams, "Gulliver and the Wall of Japan: Fumi-e in Jonathan Swift's Gulliver's Travels." *The Challenge of Japan*, University of Tokyo, 2016.9

国際、Laurence Williams, "'The Japanese have grown weary of standing apart': J.G. Zimmermann, Romantic Solitude, and the 'Opening' of Japan, 1790-1860." *Romantic Legacies*, National Chengchi University, 2016.11

国内、Laurence Williams, Speaker in panel session on "Demystifying the Discipline of Literary Studies", Liberlit Conference, Tokyo Woman's Christian University, 2017.2

国際、Laurence Williams, "Swift and the Anti-Cosmopolitan Vision: Rethinking the Japan Episode in *Gulliver's Travels*." Canadian Society for Eighteenth-Century Studies (CSECS) Annual Conference, University of Toronto, 2017.10

国内、Laurence Williams, "An Aesthetic Gateway to Japan: Mount Fuji in Victorian Travel Accounts, 1880-1900." *Pacific Gateways*, University of Tokyo, 2017.11

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

Patterns of Plural Morpheme of English Loanwords in Japanese

(日本語における英語借入語の複数形態素のパターンについて)

A Comparative Analysis of Literary Texts in High School English Textbooks in Japanese

(高校英語教科書における文学教材の比較分析)

Writing and Independence: A Study of Spiritual Growth of the Heroine in L. M. Montgomery's *Emily* Trilogy

(執筆と自立—L.M.モンゴメリ作『エミリー』三部作における女性主人公の精神的成長に関する研究—)

Unaccusative Verbs with an Agent/Cause

(状態変化をもたらす動作主を伴う非対格動詞)

How Robinson Crusoe Came to Believe in God

(ロビンソンクルーソーが神をどのように信じるようになったか)

To Marry or Not to Marry: A Comparative Study of *Pygmalion* and *My Fair Lady*

(結婚すべきか結婚せざるべきか—『ピグマリオン』と『マイ・フェア・レディ』の比較研究)

The Structure of Comedy in Eudora Welty's *Delta Wedding*

(ユードーラ・ウェルティの『デルタの結婚式』における喜劇の構造)

Gollum in J. R. R. Tolkien's *The Lord of the Rings*

(J. R. R. トールキン『指輪物語』におけるゴラム)

2017 年度

Not "Here, Here, Here but Everywhere": *Mrs Dalloway* and Transcendence

(『今、ここ』ではなく遍く広く: 『ダロウェイ夫人』と超越)

The Present-Tense Narration in J.M Coetzee's *Waiting for the Barbarians*

(J.M.クッツェーの『夷狄を待ちながら』における現在形の語りについて)

Wide Sargasso Sea: Rhys's Attempt to Show "the Other Side"

(サルガッソーの広い海:「もう一方」を示すリースの試み)

Controller Choice Based on MDP and Ditransitive Construction

(最小距離の原理に基づくコントローラー選択と二重目的語構造)

A Comparative Study of *Romeo and Juliet* and *West Side Story*

(『ロミオとジュリエット』と『ウエスト・サイド・ストーリー』の比較研究)

Chinese Commodities and British Characters: Tea, Opium and Silk in Charles Dickens's *Our Mutual Friend* (1864-65)

(中国の<物>と英国の<人>:ディケンズの『互いの友』における茶、アヘン、絹)

Innocence to Be Acquired: A Study of Truman Capote's *Other Voices, Other Rooms*

(獲得される「無垢」—トルーマン・カポーティ『遠い声遠い部屋』研究)

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

竹内まり The Economics of Time and Love on *The Ambassadors* (『大使たち』における時間と愛の経済学) (指導教員) 諏訪部浩一

岡本悠理 Poetics of Self-control: A Study of Robert Frost (セルフコントロールの詩学: ロバートフロストの研究) (指導教員) 阿部公彦

吉岡求 Will to Architecture and Queer Desire: Reasoning and Romantic Love of *Absalom, Absalom!* (建築への意思とクイアなものへの欲望: 『アブサロム、アブサロム!』を探偵小説として読むこと) (指導教員) 諏訪部浩一

佐久間健 Dimensionality of Identity: Shakespeare's Roman Tragedies in the Jacobean Age (アイデンティティの位相性: ジェームズ朝時代のシェイクスピアのローマ悲劇) (指導教員) 大橋洋一

長島礼和 The Painful Pleasures of the Eighteenth-Century Gothic Narrative: Masochistic Curiosity and Sexual Discovery in Matthew Lewis's *The Monk* (1796), Ann Radcliffe's *The Italian* (1797), and Charles Maturin's *Melmoth the Wanderer* (1820) (18世紀ゴシック小説における痛みという喜び マシュー・ルイス「修道士」(1796)、アン・ラドクリフ「イタリヤの惨劇」(1797)、チャールズ・マチューリン「放蕩者メルモス」(1820)におけるマゾヒスト的好奇心と性的発見) (指導教員) Laurence Williams

広本優佳 Far beyond the Baronetage: *Persuasion* as a History of 'Nobody' (女性の個人的な歴史の探究—ジェイン・オースティンの『説得』を中心に) (指導教員) 阿部公彦

2017年度

飯川貴大 Melville's Way to Depict Brotherly Love: A Reconsideration of Relation between Friendship, Homosexuality and Romance in *Moby-Dick* (メルヴィルの兄弟愛の描出方法: 『白鯨』における友情と同性愛、ロマンス再考) (指導教員) 諏訪部浩一

勝田悠紀 Vanishing Depths: Spatiality and Temporality in *Little Dorrit* (消えゆく深さ: 『リトル・ドリット』における空間性と時間性) (指導教員) 阿部公彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

稲田俊一郎 A Unified Account for Restrictive Relative Structures at the Syntax-Semantics Interface (統語と意味のインターフェイスにおける制限的關係節構造に対する統一的説明)

(主査) 今西典子 (副査) 渡邊明・池内正幸・高橋将一・千葉修司

(乙)

なし

2017年度

(甲)

猪熊恵子 Between Voice and Text: Techniques of Narration in Charles Dickens's Early and Mid-Period Novels, 1836-50 (声と文字の交錯—ディケンズの前期中期小説(1836-50)に見られる語りの手法)

(主査) 阿部公彦 (副査) 高橋和久・大橋洋一・スティーヴンクラーク・ローレンスウィリアムズ

有井巴 The Acquisition of English and Japanese Measure Phrase Comparatives (英語と日本語の度量句を含む比較構文の獲得)

(主査) 渡邊明 (副査) 今西典子・佐野哲也・高橋将一・郷路拓也

(乙)

なし

2 1 ドイツ語ドイツ文学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

(2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

[2016 年度]

「現代文学における Auto(r)fiktion (1)、(2)」

「ゲーテ研究」

「Bildwissenschaft 研究 (I)、(II)」

[2017 年度]

「ドイツ語のしくみと教え方」

「ペーター・ハントケと「グルッペ47」」

「18 世紀ドイツの文学的人間学」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキアムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

(3) 研究室としての活動

研究論文誌として年 2 号発行している『詩・言語』は、2016 年度には 83 号が、2017 年度には 84 号が発行された。

科学研究費補助金関係では、「抗争」言説の再検討（ドイツ文学の場合）（基盤研究（C）、研究代表者大宮勘一郎）は、2016 年度から 3 年間の予定で交付を受け、継続中である。「パウル・ツェラーンの抒情詩 — 人間学と自然史のはざまに」（基盤研究（C）、研究代表者平野嘉彦名誉教授）は、2015 年度から 3 年間の予定で交付を受け、継続中である。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。大宮勘一郎は 2015～2016 年度に学会長をつとめ、宮田眞治は 2017 年度より理事職にある。大宮勘一郎は、2017 年度より、日本独文学会主催の「2019 年アジアゲルマニスト会議」準備委員および実行委員をつとめている。宮田眞治はまた、2008 年度より日本シェリング協会理事をつとめている。

(4) 国際交流の状況

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2016 年度

Kevin Vennemann 博士 (New York University) : 研究員として滞在 (世話教員: 大宮勘一郎)、研究題目: Böckmann to Raymond, Conder to Taut and Gropius — the Early Western Gaze on Japanese Architecture、滞在期間: 2016 年 4 月 1 日～6 月 28 日

Thorsten Valk 教授 (Klassik Stiftung Weimar / Universität Jena) : 日本学術振興会短期招聘研究者として滞在 (世話教員: ケプラー田崎シュテファン)、研究題目: Goethes „Faust“ im französischen Musiktheater des 19. Jahrhunderts、滞在期間: 2016 年 6 月 30 日～7 月 15 日

Tomas Sommadossi 博士 (Freie Universität Berlin) : 研究員として滞在 (世話教員: 宮田眞治)、研究題目: Schriftsprache im Film、滞在期間: 2016 年 7 月 10 日～21 日

Elisabeth Bronfen 教授 (Universität Zürich) : 科研費 (基盤 C、研究代表者: ケプラー田崎シュテファン) による招聘研究者として滞在 (世話教員: 大宮勘一郎)、研究題目: Amerikanische Journalistinnen im Deutschland der 1940er Jahre、滞在期間: 2016 年 7 月 12 日～20 日

2017 年度

Irmela Hijiya-Kirschner 教授 (Freie Universität Berlin) : アインシュタイン財団による招聘研究者として滞在 (世話教員: 宮田眞治)、研究題目: Schönheit und Identität. Kulturelle Selbstbehauptung im Zeitalter der Globalisierung、滞在期間: 2017 年 4 月 1 日～30 日

Chunjie Zhang 教授 (University of California Davis)、科研費 (基盤C、研究代表者: ケプラー田崎シュテファン) による招聘研究者として滞在 (世話教員: 大宮勘一郎)、研究題目: Die Rezeption Chinesischer Gärten im Deutschland und England des 18. Jahrhunderts、滞在期間: 2017年7月2日~7日

Shuangzhi Li 教授 (Fudan University, Shanghai)、科研費 (基盤C、研究代表者: ケプラー田崎シュテファン) による招聘研究者として滞在 (世話教員: 大宮勘一郎)、研究題目: Kakazo Okakura, Gu Hongming und Hugo von Hofmannsthal: eine Konstellation der (Wieder-) Entdeckung Asiens in der globalen Geistesgeschichte、滞在期間: 2017年7月2日~7日

大宮勘一郎: Freie Universität Berlin 訪問教授、訪問期間: 2017年8月1日~12日

また、大学院の学生の多くがドイツ、オーストリアへ留学している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授: 重藤 実 ドイツ語学 (2017年3月まで)

教授: 大宮勘一郎 近現代ドイツ文学

准教授: 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

准教授: Keppler-Tasaki Stefan 近現代ドイツ文学

(2) 外国人教員の活動

准教授 Keppler-Tasaki Stefan

在職期間 2012年10月1日~現在

主要業績

(論文)

Stefan Keppler-Tasaki, 「‘Enlightenment Guaranteed’. Some Remarks on Doris Dörrie, Japan, and Zen.」、『Bunron - Zeitschrift für literaturwissenschaftliche Japanforschung』、Nr. 3 (2016)、91-110 頁、2016.5

Stefan Keppler-Tasaki, 「Literarische Angliphilie und deutscher Nationalstaat. Walter Scott bei Willibald Alexis, Hermann von Pückler-Muskau und Gustav Freytag.」、『Britisch-deutscher Literaturtransfer 1756-1832.』、217-236 頁、2016.9

Stefan Keppler-Tasaki, 「Literarische Änderungsschneiderei zwischen ‘California Myth’ und Putins Dresden. Marcel Beyers Gedicht ‘California Girls’.」、『Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literature.』、253、348-356 頁、2016.10

Stefan Keppler-Tasaki, 「Die faustische Leinwand. Faust in den ersten fünfzig Jahren der Filmgeschichte.」、『Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literature.』、254、259-323 頁、2017.2

(書評)

Jörg Robert, 『Einführung in die Intermedialität.』、wbg Academic in Wissenschaftliche Buchgesellschaft (WBG)、『Arbitrium』、34、6-9 頁、2016.4

Tobias Döring, Ewan Fernie (eds.), 『Thomas Mann and Shakespeare. Something Rich and Strange.』、『Shakespeare Jahrbuch』、153、2017

(学会発表)

国際、Stefan Keppler-Tasaki, 「Brechts Privatfilme von 1928/29 und seine Filmerscheinung in der SBZ/DDR」、Litpics: Literarische Kommunikation im filmischen Dispositiv、2017.3.31

国際、Stefan Keppler-Tasaki, 「Goethe in Japan. Vom Buddhismus zur Populärkultur.」、85. HAUPTVERSAMMLUNG DER GOETHE - GESELLSCHAFT、Weimar, Germany、2017.6.9

国際、Stefan Keppler-Tasaki, 「Villa Aurora as Sanctuary」、American Comparative Literature Annual Meeting 2018、UCLA、2018.3.31

(監修)

Stefan Keppler-Tasaki, 『Pritsch, Laura C.: Das Geheimnis der Tempelritter. Erkundungen in Geschichtsschreibung und Roman 1780-1880.』、ISBN: 978-3-8260-5934-6、2016.4

Stefan Keppler-Tasaki, 『Meyer, Anne-Rose / Spedicato, Eugenio (Hrsg.) Migration - Reise - Zusammenprall der Kulturen: Neue Italienbilder in deutschsprachiger Gegenwartsliteratur.』、ISBN: 978-3-8260-5919-3、2016.9

Stefan Keppler-Tasaki, 『Schindler, Andrea (Hrsg.) Alte Helden - Neue Zeiten. Die Formierung europäischer Identitäten im Spiegel der Rezeption des Mittelalters.』、ISBN: 978-3-8260-6105-9、2016.12

Stefan Keppler-Tasaki, 『Görbert, Johannes u.a. (Hrsg.) Pazifikismus. Poetiken des Stillen Ozeans.』、ISBN: 978-3-8260-6169-1、2017.2

Stefan Keppler-Tasaki, 『Sommadossi, Tomas (Hrsg.) "Polytheismus der Einbildungskraft". Wechselspiele von Literatur und Religion von der Aufklärung bis zur Gegenwart.』, ISBN: 978-3-8260-6460-9, 2018.2

(会議主催(チェア他))

国際、「SOLITUDES: “The Christian prince between withdrawal and engagement」、チェア、University of Copenhagen, Faculty of Theology、2016.4.20～2016.4.21

国内、「PROF. DR. THORSTEN VALK (KLASSIK STIFTUNG WEIMAR): Goethes „Faust“ im französischen Musiktheater des 19. Jahrhunderts」、主催、東京大学文学部、2016.7.4

国内、「Lecture: Prof. Dr. Elisabeth Bronfen (Universität Zürich)」、主催、山上会館、2016.7.13

国内、「Dr. Tomas Sommadossi: "Schriftsprache im Film - Aspekte der Semiotik und Translation"」、主催、東京大学文学部ドイツ語ドイツ文学研究室、2016.7.14

国内、「Wissenschaftlicher Gesprächskreis: Vortrag von Prof. Dr. Elisabeth Bronfen (Universität Zürich) Eine Amerikanerin in Hitlers Badewanne - Journalistinnen berichten vom Zweiten Weltkrieg.」、その他、東京ドイツ文化センター、2016.7.19

国際、「DEUTSCH-JAPANISCHE KOMPARATISTIK IM WELTKULTURELLEN KONTEXT」、主催、Freie Universitaet Berlin, Germany、2016.11.2

国内、「Chunjie Zhang (UC Davis): The Reception of Chinese Gardens in 18th Century England and Germany」、主催、山上会館、2017.7.5

国内、「SHUANGZHI LI (FUDAN UNIVERSITY NIVERSITY , S HANGHAI): Okakura, Gu Hongming und Hofmannsthal: Eine Konstellation der (Wieder-)Entdeckung Asiens in der globalen Geistesgeschichte」、主催、東京大学文学部ドイツ語ドイツ文学研究室、2017.7.6

国内、「Frauen an der Nachrichtenfront – Wissenschaftlicher Gesprächskreis」、実行委員、東京ドイツ文化センター、2017.7.7～2017.7.19

国内、「DURS GRÜNBEIN: Lesung mit Autorengespräch: „Aus der Hauptstadt des Vergessens“. Über Gedichte, Bilder und Erinnerungen.」、主催、山上会館、2017.9.14

国際、「Fabrics of Time」、主催、Freie Universitaet Berlin, Germany、2017.9.29～2017.9.30

国際、「"Asian German Studies" - Methoden, Gegenstände, Ziele.」、主催、Mori-Ôgai-Gedenkstätte (Humboldt-Universität zu Berlin), Germany、2017.11.3

(マスコミ)

「Von der 'Festung' zum 'Hub'. Der Umbau des japanischen Hochschulsystems.」、『Forschung & Lehre 4/16 (2016), pp. 312-314.』、2016.4.1

「Resonanzen von 'California Girls'.」、『Forschung & Lehre 6/16 (2016), pp. 518.』、2016.6.1

「Die Welt erinnert sich an Bertolt Brecht.」、『Salzburger Nachrichten』、2016.8.12

「Elke Vogel (dpa): Theatergenie und Frauenheld – 60. Todestag von Brecht.」、『Bild』、2016.8.14

「Literaten auf der Leinwand. Der Literatur- und Medienwissenschaftler Stefan Keppler-Tasaki untersucht, wie Autoren den frühen Film für sich nutzten.」、『Der Tagesspiegel』、2016.9.26

「Felix Lill: Boxen statt Judo.」、『Cicero. Magazin für politische Kultur. Dec. 2016, p. 62.』、2016.12.1

「Jonas Huggins: Das große neue Mittelmeer. Wie die Deutschen von 1900 bis 1945 auf den Pazifik blickten.」、『Tagesspiegel』、2017.12.6

(他機関での講義等)

セミナー、Klassik Stiftung Weimar、「Repräsentanz und Präsenz. Thomas Mann als deutsches Filmidol. / Gerhart Hauptmann: Rebell und Repräsentant. Ein Filmkommentar.」、2016.8

特別講演、UC Davis, German Department、「THOMAS MANN'S APPEARANCES IN NEWS REELS AND DOCUMENTARY FILMS, 1920 TO 1955. TOWARDS A FILM HISTORY OF MODERN AUTHORSHIP.」、2017.2

セミナー、インターユニ・ゼミナール(ドイツ語・ドイツ文化ゼミナール)、「Goethes Faust als Medium "gemeinsamer Werte" - Betrachtungen zu Kurosawa und Tezuka」、2017.8

(3) 内地研修員・外国人研究員

外国人研究員

Elena Giannoulis 教授 (Freie Universität Berlin)、研究題目: Emotional Management in Japanese Literature and Culture (2016年3月1日～2016年4月3日)、世話教員: 大宮勸一郎

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 『ウンディーネ』における「水の精」像と女性像
- 「バルトルト・ブレヒトの『セチュアンの善人』における「試み」

2017年度

- 『晩夏』における教養的美学と『ヴェニスに死す』における退廃的美学の比較
- 「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」「ファウスト」におけるゲーテの女性像

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- 石橋奈智「身体にのこされた曖昧な領域——H. v. ホーフマンスタールの「暗闇」——」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 小林重文「沈黙と読書—トーマス・マンの亡命時代 1933-36」〈指導教員〉宮田眞治
- 藤田政恒「証言・類推・ヘテロトピア—セーバルトの『移民たち』と『アウステルリッツ』をめぐって」〈指導教員〉宮田眞治

2017年度

- 内海和幸「『子どもと家庭のためのメルヒェン集』—その改訂過程と内容から明らかになるグリム兄弟の編纂の理念—」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 中原綾「アンナ・ゼーガース“Der Kopflohn”における「あきらめる者」と「揺れる者」の形象」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 西本真実「「父」に抗して書く—フランツ・カフカ『判決』をめぐって」〈指導教員〉大宮勘一郎
- 森下勇矢「Erbaulicher Pikturismus. Zum Verhältnis satirischer und frommer Elemente in Grimmschen „Simplicissimus Teutsch“（信仰の書としてのピカレスク—グリンメルスハウゼンの『阿呆物語』における諷刺的および敬虔的な要素の関係性に関して—）」〈指導教員〉宮田眞治

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

- 梶原将志「一八〇〇年前後のドイツにおける悲劇（論）の言説力学」
〈主査〉宮田眞治 〈副査〉重藤実・大宮勘一郎・松浦純・田中均

(乙)

なし

2017年度

(甲) (乙)

なし

2.2 スラヴ語スラヴ文学

1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年(昭和47年)、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし、日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

現在の教員数は教授2名である。ほかに他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、スラヴ語学、スラヴ語史、ロシア文学(詩、小説、演劇、批評)、またスラヴ語圏の言語文化に関する研究・教育が行われている。今後、スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し、国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在、学部学生4名、大学院修士課程院生3名、博士課程院生8名が在籍している。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2016年度に第32号が刊行された。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉学成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のスラヴ学、ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、セルビアのベオグラード大学、クロアチアのザグレブ大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

三谷恵子	スラヴ語学
沼野充義	ロシア・ポーランド文学
楯岡公美	ロシア演劇・芸術

(2) 助教の活動

平野恵美子

在職期間 2016年4月1日～現在

研究領域 ロシア・欧州芸術学、舞踊研究

主要業績

(翻訳) 平野恵美子、沓掛良彦、前田ひろみ訳 ソフィア・サーチナ他著『ラフマニノフの思い出』水声社、2017年、171-290,327-348,361-394頁(全403頁)

(論文) 平野恵美子『バレエ《火の鳥》の起源：20世紀初頭ロシア文化と帝室劇場』(博士学位論文) 2010年9月

(学会発表) Emiko Hirano. *Ballet and Opera in the Russian Imperial Theatres of 1890-1900*. ICCEES World Congress 2015, Makuhari, Japan Kanda University of International Studies, Tokyo, 4.Aug. 2015

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「教養小説・悪漢小説として読む『私は英国王に給仕した』」

「印欧祖語における最終音節の共通スラヴ語に至るまでの通時的変化について」

「ドストエフスキーの『悪霊』におけるキリーロフの表象」

「ポーランド語とカシューブ語の過去時制—所有完了の発達を中心に—」

2017年度

- 「行為者としてのアレクセイ・カラマーゾフ：『カラマーゾフの兄弟』論」
- 「ベルジャーエフの歴史哲学」
- 「トゥルゲーネフ『ファウスト』を読む」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- 大久保圭「近代ロシア絵入り雑誌及び読者層の研究—『ニーヴァ』と『ロージナ』の比較を中心に—」(指導教員) 沼野充義
- 大崎果歩「レフ・トルストイ『要約福音書』研究」(指導教員) 沼野充義
- 田中祐真「Энклиптики в подкарпатурсинском языке—исследование по поведению энклитик на основании написанных текстов— (サブカルパチア・ルシン語における前接語—記述されたテキストに基づく前接語の挙動の研究—)」(指導教員) 三谷恵子

2017年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

- (甲) (乙)
- なし

2017年度

- (甲)
 - 梶山祐治「ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究」
(主査) 沼野充義 (副査) 三谷恵子・楯岡求美・望月哲男・前田和泉
 - 古宮路子「オレーシャ『羨望』草稿研究——人物像の生成を中心に」
(主査) 沼野充義 (副査) 三谷恵子・楯岡求美・野中進・岩本和久

(乙)

なし

2 3 現代文芸論

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に2007年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア・中東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊のペースで発行。2017年3月には第7号、2018年3月には第8号を発行した）。

非常勤講師による授業も、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。またイディッシュ語、リトアニア語、バスク語など、他では学ぶことが難しいマイナー言語の授業も積極的に開講していることが、現文の特徴になっている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3～4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はこれまでの実績を見ると、ロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となっており、大学院生相互の国際的な交流はきわめて盛んである。

(3) 研究室としての活動・国際交流活動

現代文芸論研究室が中心となってスタートさせた科研費研究「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」（基盤A、平成25年度～29年度）によって、旧ソ連・中東欧地域の文学・文化に新たな現代的視点からアプローチする共同研究プロジェクトに取り組んでいる。

研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。

2016年度：

日本ナボコフ協会大会（日時：2016年5月7日、協力：現代文芸論研究室）、ポーランドの国民作家シェンクェヴィチ生誕170周年・没後100周年記念特別企画「ヘンリク・シェンクェヴィチの生涯と作品 映画『火と剣によって』上映と講演」（主催：東京大学文学部現代文芸論研究室・スラヴ語スラヴ文学研究室、共催：ポーランド広報文化センター）、連続映画上映会「シネマ・ユーゴ2016」（日時：2016年6月3日、10日、17日、主催：現代文芸論研究室、ユーゴ映画上映委員会、協力：ゴラン・ヴォイノヴィチ、アルスメディア、ヴラディミール・ブラジェフスキ、ダルコ・ポポフ、マリナ・コストヴァ、後援：在日マケドニア共和国大使館、在日セルビア共和国大使館、在日スロヴェニア共和国大使館）、中村隆之氏特別講義「エドゥアール・グリッサンの〈全世界〉をめぐる」（日時：2016年6月27日、講師：中村隆之（大東文化大学専任講師）、主催：現代文芸論研究室）、第一回ボヘミア研究会（日時：9月10日、報告者：半田幸子（東北大学・院）、島田淳子（大阪大学・院）、須藤輝彦（東京大学・院）、主催：現代文芸論研究室）、ツヴィカ・セルペル教授『霊と現身—日本映画における対立の美学』出版記念講演「日本映画における対立の美学」（日時：10月14日、講師：ツヴィカ・セルペル（テルアビブ大学芸術学部学部長）、主催：現代文芸論研究室）、第一回現代文芸論研究報告会（日時：2016年11月5日、報告者：ライアン・モリソン（名古屋外国語大学専任講師）、高橋知之、見田悠子、坪野圭介、小澤裕之、西菜津子、特別講演：蜂飼耳氏（詩人）「言葉置き換えるということ」、主

催：現代文芸論研究室)、第一回ボヘミア・フォーラム(日時：12月10日、講師：林忠行(京都女子大学)、薩摩秀登(明治大学)、大野松彦(日本学術振興会特別研究員 PD)、長與進(早稲田大学)、三谷研爾(大阪大学)、梶原初映(CUKR 編集長・チェコ語講師)、飯島周(跡見学園女子大学名誉教授)、進行：篠原琢(東京外国語大学)、阿部賢一、主催：ボヘミア・フォーラム準備委員会、共催：現代文芸論研究室)、2015年度ノーベル文学賞受賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチとの対話——『戦争は女の顔をしていない』から『セカンドハンドの時代』へ——(日時：11月25日、主催：現代文芸論研究室、後援：日本ペンクラブ、協力：株式会社岩波書店/科学研究費補助金 基盤研究(A)「越境と変容—グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超越的枠組みを求めて」(研究代表：沼野充義)、デリア・ウングレアヌ博士特別連続講義(2月27日、28日、講師：デリア・ウングレアヌ(ブカレスト大学助教授、ハーヴァード大学 Institute for World Literature 副所長)、主催：現代文芸論研究室)、国際シンポジウム「<聖なる愚者>が切り開く文学の未来——ロシアの作家・中世研究者エヴゲニー・ヴォドラスキンを向かえて——」(日時：3月19日、講師：エヴゲニー・ヴォドラスキン(作家)、亀山郁夫(名古屋外国語大学学長)、島田雅彦(作家)、沼野充義、主催：スラヴ語スラヴ文学研究室、現代文芸論研究室、国際交流基金)、アルジェリア文学国際シンポジウム「アルジェリア文学、しかしなぜ?」(日時：3月25日、主催：日本マグレブ文学研究会 共催：東京大学文学部現代文芸論研究室、韓国マグレブ文学研究会)

2017年度

「シンポジウム 中欧の現代美術」(2017年6月4日(日)主催：ポーランド広報文化センター、チェコセンター、駐日スロバキア大使館、駐日ハンガリー大使館、東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室)、「シネマポストユーゴ2017 家族の肖像」(2017年6月6日(火)、6月16日(金)、6月22日(木)主催：ユーゴ映画上映委員会、東京大学文学部現代文芸論研究室、上智大学比較文化研究所、筑波大学人文社会国際比較研究機構、協力：レギナ・シリング、ヴィサル・クルシヤ、アルベン・ジャルク(コソボ映画センター)、ヴラド・スカファル、後援：在日コロヴォ共和国大使館、在日スロヴェニア共和国大使館)、ポーランド出身の英語作家ジョセフ・コンラッド生誕160周年記念特別企画「ジョセフ・コンラッドとポーランド ワイダ監督映画『シャドウ・ライン』上映と講演」(2017年7月14日(金)講師：久山宏一(ポーランド広報文化センター)、沼野充義、主催：東京大学文学部現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室、共催：ポーランド広報文化センター)、「オリガ・T・ヨコヤマ教授特別講義 妖婆バーバ・ヤガーの謎」(2017年7月19日(水)講師：オリガ・T・ヨコヤマ(UCLA)、コメンテーター：中村喜和(一橋大学名誉教授)、司会：熊野谷葉子(慶應義塾大学准教授)、主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室)、「水・5限『原典を読む』/「フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』を読む」特別授業 ジェイムズ・ジョイスとフリオ・コルタサル」(2017年7月5日(水)講師：Dr. Dámaso López García(Universidad Complutense de Madrid))、「現代文芸論研究室10周年記念シンポジウム 文学を読む・語る・動く」(2017年7月16日(日)オープニング・トーク、講師：野谷文昭、沼野充義、柴田元幸、パネル1：文学を<読む>、講師：福嶋伸洋、マイケル・エメリック、進行：柳原孝敦、パネル2：文学を<語る>——「物語」と「私」の距離、講師：平野啓一郎、千野帽子、進行：阿部賢一、パネル3：文学を<動く>——exile(亡命)・extraterritorial(脱領域)・errantry(彷徨)、講師：西成彦、今福龍太、進行：沼野充義、主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室)、「パヴェル・コジーネク氏講演会「社会主義体制下のコミックス 馴致されながらも、繁栄したチェコのコミックス」(2017年10月16日(月)講師：パヴェル・コジーネク、通訳：ペトル・ホリー、司会：阿部賢一、主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室、科研費・基盤研究(B)「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」(研究代表：井上暁子))、「国際学術シンポジウム チェーホフとサハリン島の文学」(2017年10月12日(木)講師：エヴゲニヤ・フィソワ(チェーホフ『サハリン島』博物館館長代行)、アナスタシヤ・ステパネンコ(チェーホフ『サハリン島』博物館学術啓蒙部門主任研究員)、岩本和久(札幌大学教授)、楯岡求美(東京大学准教授)、沼野充義、エレナ・アイコンニコワ(サハリン国立大学教授)、渡辺雅司(東京外国語大学名誉教授)、司会：ワレリー・グレチコ(東京大学・早稲田大学講師)、アレクサンドル・メシチェリャコフ(ロシア国立人文大学教授)、主催：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室)、「アレクサンドル・メシチェリャコフ教授を迎えて ～『殻』上映会～」(2017年11月21日(火)：上映 『殻』(原題 Скорлупа) 監督 オレグ・コロドニク、2017年*日本語字幕付き(翻訳 守屋 愛)、解説と討論：アレクサンドル・メシチェリャコフ、司会：楯岡求美、主催：東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室、現代文芸論研究室)、「第二回現代文芸論研究報告会」(2017年11月26日(日)報告者：ヴィヤチェスラヴ・スロヴェエイ、片山耕二郎、高橋知之、マヌエル・アスアヘアラモ、邵丹、特別講演：陣野俊史(文芸評論家)「戦争と原爆と文学——林京子さんの亡くなった年に」、司会：柳原孝敦、主催：東京大学文学部人文社会系研究科 現代文芸論研究室)、「日中作家対談 「風土と小説 — 中国と日本」対談：劉震雲・浅田次郎」(2017年11月28日(火)、主催：日本ペンクラブ、協力：東京大学文学部現代文芸論研究室)

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教授

教授：沼野充義（ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ）

教授：柳原孝敦（ラテンアメリカ文学・芸術、広域スペイン語圏文学）

准教授：阿部賢一（中東欧文学、比較文学）

(2) 助教の活動

亀田真澄

在職期間 2014年4月～2018年1月

研究領域 ロシア東欧文化、表象文化論

主要業績

論文 Masumi Kameda “Yugoslav Reproductions of Heroes: Making National Icons through Photography” *Балканские чтения 13 «Балканский тезаурус: Начало»*, (M., Институт славяноведения РАН, C.242-248)

国際学会（口頭報告）Masumi Kameda, “Soviet Cosmvision: First Live Broadcasts from Outer Space” ASEEEES, 47th Annual Convention 2015年11月

国際学会（口頭報告）Masumi Kameda, “Live Images of Cosmonauts: Soviet Television Broadcasts of Spaceflights, 1961-1965” The Ninth World Congress of ICCEES 2015年8月

国際学会（口頭報告）Masumi Kameda, “Nation-Building Cult in Photography: Iconography of Heroes in Soviet Union and Yugoslavia” Belgrade University 2015年3月

国際学会（口頭報告）Masumi Kameda, “Representation of the Folk in 1950s Yugoslav Propaganda: A Photo Series Issued by the Publishing House “Yugoslavia” ASEEEES, 45th Annual Convention 2014年11月

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

ヤロスワフ・ペトロフ（Jaroslaw Pietrow）ワルシャワ大学准教授。言語学、日本語学。研究題目「シンタクスから見た日本語の形式名詞の問題」滞在費用の負担：ワルシャワ大学、2015年7月～8月

ツヴィカ・セルペル（Zvika Serper）、テルアビブ大学芸術学部長・教授。日本演劇。研究題目「日本の三つの伝統演劇（能・狂言・歌舞伎）の動作における共通要素の発展」滞在費用の負担：イスラエル国立科学基金、2016年2月
ウラディミール・チャバス（Wladimir Chávez）、エストフォル大学准教授。ラテンアメリカ文学。研究題目「日本におけるラテンアメリカおよびスペイン語作家」2017年9月22日～10月8日

マリヤ・トロピギナ（Maria Toropygina）、ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員。滞在費用の負担：国際交流基金。研究題目「日本古典和歌史の研究」2017年10月1日～11月30日

アレクサンドル・メシチュリャコフ、戦後日本の知の営みの歴史 滞在費用の負担：ロシア国立人文大学2017年10月1日～11月30日

人文社会系研究科研究員

小椋彩、研究課題「ヨーロッパ・モダニズムにおける亡命ロシア文化の諸相」2016年4月～2017年3月

日本学術振興会特別研究員

田中まさき(RPD)、研究課題「ソヴィエト文化における《大衆的なもの》と《ハイカルチャー》の境界」2014年1月～2016年12月

田中壮泰 (PD)、研究課題「戦間期ポーランド東部国境地域の比較文学研究」2015年4月～2018年3月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

「崎山多美作品における舞踊」

「メキシコ都市の表象 カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』（1958）を題材に」

「『異邦人』論争」を再考する」

「『マシマス・ギリの失脚』における孤独」

「オノマトペと日本文学—幸田文『黒い裾』におけるオノマトペ」

「二十世紀初頭のペテルブルグ文学—ベールイ『ペテルブルグ』を読む—」

「『汚辱の世界史』から見るボルヘス作品の礎」

2017年度

『十日間の不思議』における<意外な推理>のあり方

「Richard Brautigan『アメリカの鱒釣り』、『西瓜糖の日々』の翻訳分析

「T. H. White “The Once and Future King”における二項対立との対峙

「片山広子のアイルランド文学翻訳について——ウィリアム・シャープの作品を中心に——

「読むことから書くことへ——水村美苗の私小説的語りについて」

「Allegory and Ghosts: The Historiography in Steve Erickson’s *Arc d’X* (アレゴリーと幽霊——スティーヴ・エリクソン『Xのアーチ』における歴史記述

「ディック作品における「アンドロイド」

「ブルーノ・シュルツの創作原理——書評・評論・書簡を中心に——」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

足立伊織「The Problem of Interpretation in Donald Barthelme’s Works as Visual Text (視覚的文学としてのドナルド・バーセルミ作品における解釈の問題)」(指導教員) 沼野充義

遠藤徹「ボフミル・フラバル研究『わたしは英国王に給仕した』—給仕とその知覚—」(指導教員) 阿部賢一

益子裕子「ハンナ・ヘーヒのスクラップブックに見る、私的世界と共有イメージの交差点」(指導教員) 阿部賢一

井ノ上羽菜「ルイス・セプルベダの作品における環境問題」(指導教員) 柳原孝敦

村島夏美「『燃えるスカートの少女』の魅力——翻訳は作品にどのような影響を与えるのか——」(指導教員) 沼野充義

KORONA Elzbieta Beata「俳句と Haiku の詩学—ポーランド語への翻訳とポーランド語での創作—」(指導教員) 沼野充義

佐藤和香「迷宮とミノタウロス—Los Reyes における死と超越のかたち—」(指導教員) 柳原孝敦

2017年度

杉田健太郎「Literatura Chilena Contemporánea y Roberto Bolaño, desde el punto de vista de los marginados (「のけ者」から見る、チリ現代文学とロベルト・ボラーニョ)」(指導教員) 柳原孝敦

豊田宏「ナボコフ『賜物』とエコクリティシズム」(指導教員) 沼野充義

西野学「コルタサルは秋：フリオ・コルタサルの六つの短編における枯葉の効用」(指導教員) 柳原孝敦

杜玉「夏目漱石とエドガー・アラン・ポーの比較研究 『こゝろ』とポーの心理小説群」(指導教員) 柳原孝敦

山田絵里奈「パウル・ツェランにおける「剽窃」と「引用」——時間論との関連から——」(指導教員) 沼野充義

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

Ryan Shaldjian Morrison「Waves into the Dark: A Critical Study of Five Key Works from Ishikawa Jun’s Early Writings (写実的リアリズムへの対抗言説としての石川淳初期五作品)」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉安藤宏・柳原孝敦・柴田元幸・山口俊雄

(乙)

なし

2017年度

(甲)

ヴァチャスラヴ・スロヴェイ「概念メタファー分析から文化的キーワード翻訳可能性の探求へ——日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語に即して」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉三谷恵子・西村義樹・柳原孝敦・阿部賢一

小澤裕之「理知のむこう——ダニエル・ハルムスの手法と詩学」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉楢岡求美・阿部賢一・村田真一・八木君人

高橋知之「反省と直接性のあいだ——ベリンスキーの構想、プレシチエーフの実践、グリゴリーエフの漂泊」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉楢岡求美・阿部賢一・望月哲男・坂庭淳史

(乙)

なし

2 4 西洋史学

1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に史学科として発足した後、1919年に西洋史学科として独立、講座の増設や制度の改変を経て、現在の専修課程に至っている。おもにヨーロッパ史に関する研究および教育に従事している。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2016年度、2017年度には教授2名、准教授3名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教員2名から、また学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2016年度、2017年度ともに4名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ定数25名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2016年度52名、2017年度50名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2016年度40名、2017年度39名である。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、さらに異文化接触や公共圏の問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。

また学会活動への参与も精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集協力を研究室として引き受けている。さらに各教員は、自ら海外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、海外の研究者と連携して、国内外で国際会議や講演会を定期的に行い、その成果を邦語（翻訳）や英語で公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

高山 博	教授	西洋中世史
橋場 弦	教授	古代ギリシア史
長井伸仁	准教授	フランス近現代史
勝田俊輔	准教授	近代アイルランド史・近代ブリテン世界史
池田嘉郎	准教授	近現代ロシア史

(2) 助教の活動

芦部 彰

在職期間 2016年4月1日～現在

研究領域 ドイツ近現代史

主要業績

(著書)

単著、芦部彰、『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策—1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策（山川歴史モノグラフ33）』、山川出版社、2016.11

(論文)

芦部彰、「西ドイツ社会史研究の現在—「長い 60 年代」をめぐる研究を中心に—」、『歴史学研究』、960 号、15-22, 28 頁、2017.8

芦部彰、「現代ドイツの住宅政策」、『歴史と地理 世界史の研究』、252、57-60 頁、2017.8

(書評)

中野隆生(編)、『二十世紀の都市と住宅—ヨーロッパと日本』、山川出版社、『史学雑誌』、第 125 編第 10 号、1771-1780 頁、2016.10

(学会発表)

国内、芦部彰、「カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策—1950 年代におけるキリスト教民主同盟 (CDU) の住宅政策から」、第 66 回日本西洋史学会大会、自由論題報告、慶応義塾大学、2016.5.22

国内、芦部彰、「小野竜史報告「ドイツ連邦共和国のカトリック青少年における「戦争と平和」—「カトリシズムと兵役拒否」の歴史研究に向けた一考察」へのコメント」、第 39 回ドイツ現代史学会、2016.9.24

国内、芦部彰、リブライ: 書評会「芦部彰『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策— 1950 年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』(山川出版社、2016 年)」、西洋近現代史研究会、2017.6.10

(非常勤講師)

立正大学、「西洋史特講」、2016.4~2016.9、2017.4~2017.9

法政大学、「ドイツ語 3」、2016.4~2018.3

共立女子大学、「ヨーロッパ地域論 (ドイツ・中欧)」、2016.10~2017.3、「ヨーロッパ地域文化入門」、2016.12

立教大学、「世界史」、2017.4~2017.9

横浜国立大学大学院、「欧米社会論特講」、2017.10~2018.3

(学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員)

任意団体、現代史研究会、運営委員、2016.10~

(3) 外国人研究員・内地研究員

空 由佳子 (人文社会科学研究科研究員、2015 年度~)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

- 「19 世紀中葉のイギリスにおける簡易生命保険の興隆—プルデンシャル社の事例を中心に—」
- 「18 世紀後半におけるブリテン帝国によるオーストラリアの植民地化—その背景についての考察—」
- 「重装歩兵改革の再考—兵士・装備・戦術を通して—」
- 「ヘルメス柱像破壊とエレウシスの秘儀冒瀆—事件の性質と関連性について—」
- 「第一次ポエニ戦争以前におけるローマ艦隊の組織像の再検討—「海軍二人委員 duoviri navales」を中心として」
- 「ニュージーランド総督ロバート=フィッツロイの軍事・経済政策」
- 「ヘンリー 7 世の経済政策の歴史的意義—イングランドを繁栄に導いた偉大な王—」
- 「ヴィシー政権期における Jeune France (若きフランス) の活動とその意義」
- 「第二次マケドニア戦争におけるローマの対外政策、ギリシャの自由宣言をめぐって」
- 「13~14 世紀シュトラスブルクにおけるベギンと托鉢修道会との関係について」
- 「戦間期イギリスにおけるフェシズム運動」
- 「セウエルス朝期における女性皇族の政治的介入について」
- 「19 世紀後半期マルセイユにおける移民・社会・暴力」
- 「二〇世紀ロシアの自由主義政党カデット—大改革時代からコルニーロフ・クーデターまでの系譜」
- 「独ソ不可侵条約とノモンハン事件—1930 年代全体を俯瞰して—」
- 「17 世紀イングランドにおける常備軍の形成について」
- 「16 世紀ケルンに於ける市政の変容及び大学の改革」
- 「18 世紀中葉のイングランド財政金融革命に見る議会のコスモポリタン性」

2017 年度

- 「12~13 世紀にかけてのマグナ・カルタに至るまでのイングランドにおける諸侯の動向」
- 「カレッジからユニバーシティへの移行期のアメリカにおける大学経営体制の変容」

「古代ギリシアにおける運動競技の平等性と民主政の関わり」
 「13世紀イングランドの諸侯の改革運動と国王の外交関係」
 「リヴァプール・マンチェスター鉄道と地域社会」
 「19世紀におけるブリテン王室の受容」
 「デロス同盟の「アテナイ帝国」化について」
 「19世紀イギリスにおける貴族院の政治的影響力」
 「19世紀末から20世紀初頭におけるアイルランド・ナショナリズム—アビーシアター—の活動を中心に—」
 「17～18世紀フランスにおける宮廷貴族と国王の関係—宮廷派閥（faction）に関する論考—」
 「12世紀エルサレム王国におけるフランク人と現地住民の関係について」
 「前期帝政期ローマによるブリタンニア属州統治—対外クリエンテラ—の視点から—」
 「エルンスト＝フォン＝ヴァイツゼッカーの外務次官期における第三帝国の外交政策」
 「1867年以降のウィーンにおける芸術政策について」
 「革命期フランスにおける非キリスト教化運動の位置づけ—聖職放棄運動による聖職者モデルの変化を中心として—」
 「「怪物」についての社会的想像力 ピエール＝フランソワ・ラスネール（1803～1836）の処刑を通して」
 「帝政ローマのキリスト教迫害の意義について」
 「ヴェンス＝オーウェン和平案の時期における米国のボスニア政策」
 「フルシチョフ期の地方ソヴェト行政改革」
 「パリにおける1878年6月30日の国祭日」
 「ヴァイマル共和国期ドイツにおける映画とドイツ共産党」
 「16世紀カステリヤ都市参事会における血の純潔規約の影響—トレド市を例に—」
 「中世スペイン社会の多様性・複雑性」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

高橋優「『一般訓令』の成立（789年）とその政治的・社会的背景」（指導教員）高山博
 植野翔「1641年アイルランド反乱表象の政治学：休戦協定をめぐる政治学：内戦期イングランドでの被害者供述出版を手がかりに」（指導教員）勝田俊輔
 石島達哉「第一次ポエニ戦争勃発時のシチリア情勢とカルタゴの対外政策」（指導教員）橋場弦
 石見勇樹「ロシア第一次革命期の右翼団体の考察—1880年代からの動向を踏まえて—」（指導教員）池田嘉郎
 久世真「第一次大戦前夜のドイツ・オスマン両帝国の関係強化に関する一考察」（指導教員）勝田俊輔
 桑子亮「フランス宗教戦争末期のリーグ派帰順王令の分析—宗教戦争からカトリック改革への歴史的文脈に位置づけて—」（指導教員）長井伸仁
 小西正紘「「ピータールーの虐殺」という記憶——マンチェスター選挙法改正運動再考 1819-1832」（指導教員）勝田俊輔
 櫻井理沙「ジャウマ1世の証書からみるムデハルの隷属性」（指導教員）高山博
 鶴田健太「ヘラクレイア碑文における所属表象について」（指導教員）橋場弦
 築田航「13世紀前半の都市トリーアにおける統治構造の変容」（指導教員）高山博

2017年度

合田富美「南部ロシア白軍運動における義勇軍とコサックの関係」（指導教員）池田嘉郎
 岩本純佳「古典期アテナイにおける市民顕彰と大衆」（指導教員）橋場弦
 田野崎アンドレア嵐「アリエノール・ダキテーヌの発給証書にみるイングランド王妃の宮廷——王妃周辺的人的集団をめぐる——」（指導教員）高山博
 長島濤「フランス革命期の外国人レジオン—フランスの視点から見たその設立の様相—」（指導教員）長井伸仁
 松本祐生子「戦後スターリン期の祭典—モスクワ800周年記念祭と都市空間」（指導教員）池田嘉郎
 村田優樹「革命期ロシアにおける民族領域自治構想の展開—ウクライナを中心に、1904～1917年」（指導教員）池田嘉郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

なし

(乙)

長谷川博子（筆名：長谷川まゆ帆）「近世フランスの法と身体教区の女たちが産婆を選ぶ」

〈主査〉勝田俊輔 〈副査〉 姫岡とし子・池上俊一・長井伸仁・深沢克己

小林亜子「〈祭典〉 のユートピアから 〈啓蒙の灯台〉 エコール・サントラルへ」

〈主査〉勝田俊輔 〈副査〉 長井伸仁・深沢克己・森田伸子・小井高志

2017年度

(甲) (乙)

なし

25 社会学

1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は、社会学が「世態学」という名で初めて講じられた1878（明治11）年に遡る。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治26）年帝国大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部遜吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和36）年には3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984年には4講座となった。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では行動文化学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。

2017年度の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、都市、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約50名。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的な基礎訓練とともに領域横断的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近では金融やメーカーに就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員になったり研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者も定着してきた。院生総数は40名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては、日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献している。また、ソウル大学社会学部と2年に1回国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行している。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。大学院生も、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロゴス』を毎年編集・発行している。

ポスドクや外国人研究員として、フルブライト財団や日本学術振興会の選考をへて本研究室で一定期間を研究滞在する場合も増えてきている（これまで、アメリカからの来訪者が比較的多い）。本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1～2年過ごしたあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生も在籍している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

松本三和夫

専門分野 科学社会学・知識社会学

在職期間 1996年4月～2018年3月

武川正吾

専門分野 社会政策

在職期間 1993年4月～現在

佐藤健二

専門分野 歴史社会学

在職期間 1994年10月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006年4月～現在

赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006年4月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究

在職期間 2011年4月～現在

祐成保志

専門分野 コミュニティの社会学

在職期間 2012年4月～現在

(2) 助教の活動

三浦倫平

在職期間 2015年4月～2017年3月

研究領域 地域社会学、都市社会学

主要業績

(著書)

『「共生」の都市社会学』、新曜社、2016.3

(論文)

Characteristics and importance of Japanese disaster sociology: Perspectives from regional and community studies in Japan、地域社会学会40周年記念事業、2016

「環境行政訴訟が地域社会にもたらす可能性と課題」、都市住宅学、91号、2015

都市空間における「共約不可能な公共性」の形成過程、地域社会学会会報22号、2010

(教育実績)

2011年度 立教大学非常勤講師

2010年度～2012年度 明治大学非常勤講師

武岡暢

在職期間 2017年4月～現在

研究領域 都市社会学、職業

主要業績

(著書)

『生き延びる都市—新宿歌舞伎町の社会学』、新曜社、2017年2月

『歌舞伎町はなぜ〈ぼったくり〉がなくなるのか?』、イーストプレス、2016年6月

(論文)

「客引きとスカウトは何故いなくなるのか—歓楽街のストリートにおける法と経済」、グローバル都市研究、6号、2013

「可視的な『無秩序』の両義性—繁華街の客引きを中心として」、年報社会学論集、25号、2012年

「下位文化集団の秩序問題—都心繁華街歌舞伎町の商店街組織を事例として」、日本都市社会学会年報、29号、2011年

「盛り場の不可視性増大過程の分析—2000年までの歌舞伎町を事例に」、ソシオロギス、33号、2009年(非常勤講師)

2016年度～現在 立教大学兼任講師

(4) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

Adam Bronson (2017 年度)

日本学術振興会特別研究員 (PD)

野島那津子 (2016, 17 年度)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016 年度

「家庭生活における合理化の歴史社会学」

「学歴社会」日本と東大ブランド」

「ひとり親世帯の不利の中身」

「コミュニティの再生は可能であるのか（多摩ニュータウンを事例にとつて）」

「リベラリズムの社会学的位置づけ」

「都市型アートプロジェクトにおけるエピソード評価の有効性—小金井アートフル・アクション！小金井と私
秘やかな表現 市民生活展 想起のボタン を事例として—」

「企業メセナの社会的意義と企業の必要性」

「ソーシャルメディアの弊害と今後の展望」

「持続可能な働き方改革に向けたテレワークの現状と問題点」

「ゲーム研究の研究史」

「Youtube からみる若者の就労意識について」

「女性の就業継続を支える企業内保育所の可能性」

「Z.Bauman の文化論からまなざす日本文化の諸相」

「社会の問題」としての犯罪事件：「秋葉原連続殺人殺傷事件」の新聞報道を題材に」

「観光政策としてのギャンブル」

「「遅刻する」とはいかなることか 遅刻の社会的意味付けについての考察」

「自転車を通じて見る、東京の都市交通の特色と今後の姿」

「個人が芸術から得られるもの—パフォーマンスアート・フェスティバル参加者の事例に着目して—」

「無縁社会から考える問題視の影響」

「三番瀬における外来種ホンビノスガイの特産化」

「現代社会における結婚式の役割」

「インドにおける日本の教育支援 NPO の活動に着目して」

「キャラクター利用による自治体のコミュニケーションについて」

「安楽死・尊厳死の社会学」

「人口減少社会における野球の在り方—低年齢層に着目して—」

「「嘘」というコミュニケーション」

「アイドル消費論」

「二十世紀末における健康政策—自立する高齢者の形成—」

「刑務所の福祉施設化について」

「日本人高齢者の国際引退移動と定住志向」

「震災ボランティアをめぐる考察」

「科学技術社会論 (STS) はいかに構築されたか—日本の商業化メディアアートに見る—」

「スポーツにおける集団の力学」

「誹謗中傷の社会学」

「社会におけるテレビの地位変遷から見る、バラエティ番組を中心としたテレビのコンプライアンスと人々の規
範意識の関係性」

「新聞を通じた「現実」の構築—北朝鮮報道を例に—」

「恋愛関係の社会学」

「現代日本の健康と医療に関する実証研究」

「地域社会におけるコミュニティビジネスの可能性—富良野市を事例として—」

「少子高齢化の進行する離島コミュニティにおける意思決定プロセスと決定機能の低下要因を明らかにする」
「ラオスから分析する観光の形」
「性自認の獲得と伝達—X ジェンダーの語りから—」
「リレーショナル・アートの展開について」
「運動部活動の歴史と現在—「子ども自身の真の自主性」から考える」
「日本における、フードバンク活動の展開—食品ロス、社会福祉、セーフティネットの観点から—」
「RPG のリアリティへの接近とプレイヤーの歴史」
「『文学部廃止』を巡る新聞報道の分析」
「現代社会における人とペットの関わり」
「災害からの事前復興計画と合意形成過程について」
「観光用ガイドブックにおける名所紹介文の社会学的考察」
「日本企業の組織デザインにおける課題」
「鉄道駅の都市社会学的考察」
「震災避難所における秩序形成の背景—人々の利他性発揮の過程に着目して—」
「若者の政治参加と精神構造」
「動物飼養の変質が描出する現代日本人の不安定性について」
「1969 年の新宿西口地下広場 歌とイデオロギー闘争に揺れた若者への考察」
「ベジタリアニズムからみた食の社会学」
「現代集団行動の社会学」
「生きづらさの定義に関する再検討」

2017 年度

「社会的孤立問題論考」
「動画共有サイトを用いたビデオゲーム経験の共有への考察—「ニコニコ動画」の事例を中心に—」
「日本のインドシナ難民の受容と教育支援の変遷」
「だれのための衣服か—同調する中流と、必要とされる正解—」
「介護労働者の離職に関する研究—介護労働市場からの退出に影響を与える要因—」
「2010 年代の社会運動と参加者の意味世界」
「近現代の日本における遊び言説の考察」
「就職活動における意思決定の社会学的分析」
「格差社会における解決策としてのベーシック・インカム—フィンランド・ケニアの実験から見るその可能性—」
「能力主義についての原理的検討」
「消費対象としての” 萩本欽—”」
「完全自動運転車はどのように受容されるのか」
「ホルクハイマーにおける近代的権威論の研究」
「都市における撮影行動について」
「「変わっている」人や集団に対する社会意識」
「流行現象からみる現代日本の社会意識」
「摂食障害を読み解く<食>の社会的想像力」
「日本に於ける障害者雇用の現状と課題、及びに社会的事業所の課題について」
「歴史的町並みの保全における住民の思考—埼玉県川越市—一番街商店街を事例として—」
「日本の家族と社会—歴史人口学と家族社会学の成果をふまえて」
「養子縁組から見る現代日本の家族観」
「自動車の進歩と社会の変化」
「運動部活動の成立と現状」
「ドメスティックバイオレンス政策の日韓比較について」
「先進衰退国としての日本と労働生産性」
「東大闘争における活動家の意識の多様性—全共闘と民青の比較から」
「現代社会における葬送墓制について」
「公民館・文化会館と地域の文化活動」
「現代日本の若者の死生観及びそれに影響された事象」

「災害復興における地域主導—予算配分、プロフェッショナル育成の観点から—」
「都市と広告」
「個別化する消費社会とビッグデータ・マーケティング」
「戦後 70 年間の高学歴女性の人生」
「農山村の人口減少対策」
「社会におけるスポーツと企業との関わり」
「プロスポーツチームによるコミュニティの再創造」
「SNS による若者の恋愛関係構築への影響」
「日本人はなぜ過労死するまで働くのか」
「共同体再生の手段としてのアートプロジェクト」
「有利子貸与型奨学金制度の有用性についての検討」
「芸術鑑賞型から地域づくり型へ—今日におけるパブリックアートの意義と課題」
「高松市丸亀町商店街における土地問題の解決について」
「これからの小学生の放課後—放課後子ども総合プランをめぐる論争構造を手がかりにして—」
「日本における女性の性別役割分業意識とその変遷」
「日本における「負の遺産」観光をめぐる考察」
「ショッピングセンターの変遷から見る日本の消費空間の変化」
「なぜ居住誘導は受け入れられてこなかったのか」
「ディストピア文学の社会的意義について」
「親子関係における衝突と「干渉」～H・ガーフィンケル研究の観点から～」
「漫才は日本社会の「鏡」か？」
「県人学生寮における関係性の変容—戦後社会と水戸塾—」
「健康増進を目的とした公共政策—社会環境への介入事例に着目して—」
「静岡県沼津市におけるアニメを活用した地域振興」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016 年度

坂井愛理「訪問鍼灸マッサージ場面の相互行為分析」(指導教員) 出口剛司
篠宮紗和子「通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒」としての「発達障害」概念の形成過程とその背景—生物医学モデルと障害モデルの混在—」(指導教員) 赤川学
名川航太郎「インドシナ系ニューカマー第二世代の社会経済的地位達成研究—日本における移民のライフコース—」(指導教員) 白波瀬佐和子
張惠媛「高齢男性の地域活動参加—「ジェンダー化された組織」論の観点から—」(指導教員) 武川正吾
魚住知広「フロムにおける権威主義論の展開—権威主義の批判と自己実現を通じた連帯—」(指導教員) 出口剛司
打越文弥「現代日本の学歴結合からみた家族変容—その超勢と帰結」(指導教員) 白波瀬佐和子
園田薫「日本で働く新卒外国人のキャリア選択—日本で働く論理から働き続ける論理への変容過程—」(指導教員) 赤川学
西澤和也「昇進構造からみた雇用者内格差に関する実証研究」(指導教員) 白波瀬佐和子
前嶋直樹「コミュニケーション・メディアによって重層化された社会的ネットワークに関する研究—学級内セグレーションに着目して—」(指導教員) 白波瀬佐和子
欧陽静雅「現代中国都市部の晩婚・未婚化に関する研究—「剩女」というカテゴリーを中心に」(指導教員) 赤川学
鄭惠仙「現代中国の都市計画理念と「城中村」」(指導教員) 祐成保志

2017 年度

青木淳弘「「創造的ビューロクラット」はいかにして生まれたのか—横浜市・都市デザインの社会過程分析」(指導教員) 祐成保志
大和冬樹「米国都市貧困研究における方法論的課題—近隣効果論に注目して—」(指導教員) 祐成保志
金志勲「外国人労働者受入れ政策の転換と福祉国家の変容—再生産レジームにおける政策志向の多様性」(指導教員) 武川正吾
中俣尚美「公立図書館の社会的存在意義—千代田図書館を事例に—」(指導教員) 佐藤健二
堀江和正「近隣による援助と専門機関—高齢者の集中する公営住宅団地を事例として—」(指導教員) 祐成保志

堀川優奈「シベリア抑留体験はどのように意味づけられたか——語りを記録する営みにおいて」(指導教員) 佐藤健二

宮部峻「総力戦における宗教の歴史的研究所—浄土真宗の戦時教学の分析—」(指導教員) 出口剛司

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

米澤旦「労働統合型社会的企業の成立と展開に関する社会学的研究——社会政策におけるサードセクターの位置」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・白波瀬佐和子・祐成保志・大沢真理

石島健太郎「手足としての介助者像とその社会的帰結——神経難病療養における障害者と介助者の関係の検討——」

〈主査〉赤川学 〈副査〉松本三和夫・武川正吾・白波瀬佐和子・榊原哲也

斉藤史朗「日本における家理論の形成と展開——その社会像と政治観」

〈主査〉赤川学 〈副査〉佐藤健二・出口剛司・盛山和夫・米村千代

原田峻「NPO 法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動——ロビイング戦略・組織間連携・帰結の分析」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉武川正吾・出口剛司・祐成保志・町村敬志

流王貴義「デュルケムの近代社会構想——有機的連帯から職能団体へ——」

〈主査〉出口剛司 〈副査〉赤川学・祐成保志・盛山和夫・夏刈康男

張継元「中国農村における社区福利の成立と供給構造に関する研究」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・沈潔・澤田ゆかり

藤田研二郎「環境 NGO・NPO の政策提言運動におけるセクター横断的連携——生物多様性関連の政策決定・実施過程を事例に——」

〈主査〉赤川学 〈副査〉松本三和夫・出口剛司・祐成保志・寺田良一

(乙)

上村泰裕「東アジアにおける福祉国家形成の比較社会学」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・白波瀬佐和子・有田伸・稲上毅

大塚明子「『主婦の友』にみる日本型恋愛結婚イデオロギーの固有性と変容」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉出口剛司・祐成保志・盛山和夫・瀬地山角

定松淳「環境問題における科学的側面と社会的側面の複合関係の解明——所沢ダイオキシン問題の科学社会学的分析——」

〈主査〉松本三和夫 〈副査〉武川正吾・佐藤健二・赤川学・小松丈晃

2017年度

(甲)

栗田知宏「ブリティッシュ・エイジアン音楽の社会学——音楽産業内の力学からみる「エイジアン」の境界」

〈主査〉赤川学 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・上野千鶴子・吉野耕作

齋藤圭介「<生殖と男性>の社会学——ジェンダー理論における平等論・再考」

〈主査〉赤川学 〈副査〉佐藤健二・白波瀬佐和子・金野美奈子・上野千鶴子

税所真也「成年後見の社会化に関する社会学的研究」

〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・祐成保志・藤崎宏子・藤村正之

開田奈穂美「巨大開発における損益の分配と生業の被害に関する社会学的研究——複合問題としての諫早湾干拓事業——」

〈主査〉松本三和夫 〈副査〉武川正吾・赤川学・祐成保志・関礼子

(乙)

武田俊輔「長浜曳山祭の都市社会学：伝統消費型都市の生活共同と社会的ネットワーク」

〈主査〉赤川学 〈副査〉佐藤健二・出口剛司・吉野耕作・有末賢

26 社会心理学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の規定因を実証的に研究する経験科学であり、社会的状況における個人の行動や認知、集団・組織行動、文化と心理の関係など、幅広い研究テーマを扱う。

当社会心理学研究室は、1974年4月に創設（同年に文学部の専修課程、1976年4月に大学院社会科学研究所の専攻として設置）された比較的新しい研究室である。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学専門分野として、教授2名、准教授1名、専任講師1名、助教1名で運営されている。それぞれの教員が個別にラボを運営しつつ、協力しあって学部生・大学院生の教育に従事している。

各々のラボでは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げて、旧来の社会心理学を超えた人間知の構築を目指している。いずれのラボにおいても、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることが特徴的である。教員は共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催しているほか、学内においては互いに連携して、2ヶ月に1度ほどのペースで国内外の研究者を招いて社会心理学コロキウムを開催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究に関する詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ (<http://www.utokyo-socpsy.com/>) およびリンク先の各教員ラボのホームページに公開されている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的で開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表や、専門学術誌や学術書等への掲載というかたちで公表されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、心理学、社会心理学および関連する行動科学諸領域の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミックス学会、アジア社会心理学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。また教授2名は、日本学術会議（第一部）の会員、連携会員を務めている。

(4) 国際交流の状況

上述の通り、各教員が種々の国際共同研究プロジェクトに参加しており、複数の学問領域にまたがる国際交流も盛んである。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

亀田達也 教授

在職期間 2014年10月～現在

専門分野 社会心理学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 准教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

(2) 講師の活動

白岩祐子

在職期間 2016年4月～現在

専門分野 社会心理学

主要業績

(著書)

白岩祐子、「裁判員裁判と市民」、村松励・大淵憲一（編著）、『犯罪心理学事典』、丸善出版、2016.8

(論文)

Tanibe, Shiraiwa, & Karasawa, 「Opposition to popular legal participation and the reason-emotion framework: Empirical research on citizens' attitudes toward the lay judge system in Japan」、『Journal of Human Environmental Studies, 14』、2016.7

白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「“知ること”に対する遺族の要望と充足：被害者参加制度は機能しているか」、『社会心理学研究, 32』、2016.8

白岩祐子、「“感情的”であることへの嫌忌：裁判員としての市民の実像」、『 α シノドス, 215』、2017.2

白岩祐子・唐沢かおり、「刑罰抑制効果の検討：“理性”重視の価値観に着目して」、『人間環境学研究, 15』、2017.6

白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「警察による犯罪被害者政策の有効性：遺族の立場からの検討」、『犯罪心理学研究, 55』、2017.9

(学会発表)

国内、白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「警察の犯罪被害者政策：遺族の立場からの実証的検討」、犯罪心理学会第54回大会、2016.9

国内、齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり、「裁判員裁判に対する認知が参加意欲へ及ぼす影響」、日本社会心理学会第57回大会、2016.9

国内、森芳竜太・白岩祐子、「社会的制裁場面における第三者の制裁行動：すでに他者が罰していることは制裁行動を調整するのか」、東京大学第10回新社会心理学コロキウム(本郷・駒場合同セミナー)、2016.11

国際、Saitoh, M., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「The effects of cognition of the lay judge system on intentions to participate in the lay judge system」、The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences 2017, 2017.3

国際、Hashimoto, T., Sakurai, R., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「Effects of trait self-control on people's decisions toward moral dilemmas」、AASP 2017 Conference、2017.8

国内、白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「犯罪被害者遺族による政策評価：被害者参加制度・意見陳述制度に着目して」、日本犯罪心理学会第55回大会、2017.9

国内、荒川歩・白岩祐子、「有罪・取調べへの言及が行為や人物の印象に与える影響」、日本パーソナリティ心理学会第26回大会、2017.9

国内、白岩祐子・荒川歩、「行動政策学への招待：実証的人間観にもとづく政策立案を目指して」、日本心理学会第81回大会、2017.9

国内、安部晃司・井上哲・小舟溪・杉本大斗・白岩祐子、「ロボットの見た目が心の知覚に与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会、2017.9

国内、幅勇介・白岩祐子、「ペットといるとなぜ癒されるのか：心の知覚にもとづく考察」、日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会、2017.9

国内、小泉喜之介・齋藤真由・白岩祐子、「遺体に対する心の知覚：保護・非難意図に及ぼす影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会、2017.9

国内、齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり、「司法参加意欲の規定因：公正さ認知および主体・客体意識の効果」、日本社会心理学会第58回大会、2017.10

国内、白岩祐子・齋藤真由・橋本剛明・唐沢かおり、「司法解剖が死者に対する心の知覚に及ぼす影響」、日本社会心理学会第58回大会、2017.10

(会議主催)

国内、「日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会」、実行委員、2017.9.30～2017.10.1

(監修)

特定非営利活動みらいプラネット、学習教材ビデオ「咲き誇れ、強く」第2部(学習活動)、2016.8

(受託研究)

警察庁、「犯罪類型別調査」企画分析会議構成員、2017.11～2018.3

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、研究代表者、「遺体に対する心の知覚：死者に愛着と敬意を抱く心的メカニズムの解明」、2017～現在

(非常勤講師)

早稲田大学理工学術院、「変革期の社会と心理」、2016.4～2016.9、2017.4～2017.9

(市民講座)

立川市、市民交流大学講師、2017.7

(学会)

法と心理学会理事、2016.10～現在

(2) 助教の活動

綿村英一郎

在職期間 2014年4月～2017年3月

専門分野 社会心理学

主要業績

(論文)

Watamura, E., Saeki, M., Niioka, K., Wakebe, T., 「How is the Death Penalty System Seen by Young People in Japan? —An analysis of a survey of university students—」、『Advances in Applied Sociology』、2016

(学会発表)

国内、綿村英一郎、「裁判官の影響—死刑評議実験からの考察—」、『日本心理学会シンポジウム：裁判員の判断を左右するもの～罪を裁く人の心～』、2016.11 および 12

針原素子

在職期間 2016年4月～2017年3月

専門分野 社会心理学

主要業績

(学会発表)

国際、Harihara Motoko、「Amae as a self-critical view of dependence among the Japanese」、23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology、2016.8.2

国内、針原素子、「他者依存の自己批判的ラベルとしての「甘え」：ダイアドデータを用いての検討」、新・社会心理学コロキウム、2016.11.25

国内、針原素子、「青少年における性イメージとその規定因の変化について」、社会調査・データアーカイブ研究センター課題公募型二次分析研究成果報告会、2017.3.13

橋本剛明

在職期間 2017年4月～現在

専門分野 社会心理学

主要業績

(論文)

Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「When and by whom are apologies considered? The effects of relationship and victim/observer standing on Japanese people's forgiveness」、『Interpersona: An International Journal on Personal Relationships』、10(2)、171-185 頁、2017.1

Tanibe, T., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「We perceive a mind in a robot when we help it」、『PLoS ONE』、12(7)、e0180952 頁、2017.7

福本都・苫米地飛・橋本剛明・唐沢かおり、「自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える効果—運命的決定論信念に着目して—」、『人間環境学研究』、15(1)、73-80 頁、2017.7

Machery, E., Stich, S., Rose, D., Alai, M., Angelucci, A., Bermiūnas, R., Buchtel, E. E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Ormelas, J., Osimani, B., Romero, C., Lopez, A. R., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., del Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 「The Gettier Intuition from South America to Asia」、『Journal of Indian Council of Philosophical Research』、34(3)、517-541 頁、2017.8

Rose, D., Machery, E., Stich, S., Alai, M., Angelucci, A., Bemiūnas, R., Buchtel, E. E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Ornelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas Lopez, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Vázquez del Mercado, A., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 「Nothing at stake in knowledge」、『Noūs』、1-24 頁、2017.8

Rose, D., Machery, E., Stich, S., Alai, M., Angelucci, A., Bemiūnas, R., Buchtel, E. E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Cova, F., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Olivola, C. Y., Ornelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., del Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 「Behavioral circumscription and the folk psychology of belief: A study in ethno-mentalizing」、『Thought: A Journal of Philosophy』、6(3)、193-203 頁、2017.8

(学会発表)

国際、Hashimoto, T., 「People's conceptualization of the "mind" and how it works」、31st International Congress of Psychology、2016.7.25

国内、谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり、「ロボットに対する『心』の知覚を促進する要因」、日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会、2016.10.9

国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Mind attribution of "brain-dead" patient influences people's attitudes toward organ transplant」、2017 Society for Personality and Social Psychology Convention、2017.1.21

国際、Hashimoto, T., Sakurai, R., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K., 「Effects of trait self-control on people's decisions toward moral dilemmas」、AASP 2017 Conference、2017.8.27

国内、榊原瑞清・櫻井良祐・橋本剛明・唐沢かおり、「道徳ジレンマ問題で道徳判断と行動選択の差を生じる要因の検討：自己制御と共感」、日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会、2017.10.1

国内、谷辺哲史・橋本剛明・唐沢かおり、「不祥事企業の集団実体性と購買回避理由の関係」、日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会、2017.10.1

国内、福本都・苫米地飛・橋本剛明・唐沢かおり、「自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える影響—運命的決定論信念に着目して—」、日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会、2017.10.1

国内、森芳竜太・橋本剛明・唐沢かおり、「多数派のふるまいが第三者の制裁行動に与える影響：二重過程モデルとの関連から」、日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会、2017.10.1

国内、白岩祐子・齋藤真由・橋本剛明・唐沢かおり、「司法解剖が死者に対する心の知覚に及ぼす影響」、日本社会心理学会第 58 回大会、2017.10.29

(会議主催)

国際、「31st International Congress of Psychology」、実行委員、2016.7.24~2016.7.29

国内、「日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会」、実行委員、2017.9.30~2017.10.1

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金、若手研究 (B)、橋本剛明、研究代表者、「道徳的ジレンマ状況における「行動」と「判断」の乖離に関する検討」、2016~2017

(非常勤講師)

法政大学文学部、「社会心理学」「集団社会心理学」、2017.4~2018.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

・田戸岡好香 (博士(社会学博士), 一橋大学) 2015 年 4 月~2016 年 9 月

・Nathan Berg (Associate Professor, Department of Economics, University of Otago) 2016 年 3 月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2016年度

- 「自尊心がリスク行動時の予期的後悔と行動に与える影響」
- 「自己呈示場面における優位な文化的自己観と被呈示者の呈示者への能力評価が自己卑下呈示の程度へ及ぼす影響」
- 「地域における防災行動の促進要因」
- 「SNS 依存の原因～既読無視と透明性の錯覚の関係に着目して～」
- 「うつ病患者に対するスティグマとその低減方法に関する研究」
- 「障害者に対するステレオタイプと新型出生前診断への態度の関連性」
- 「自信はいかにして形づくられるのか?～随伴経験の多寡とその原因帰属が自己効力感・自尊感情の形成に与える影響～」
- 「ヴァソプレシン投与が先制攻撃行動の惹起に及ぼす効果を検証するための Preemptive Striking Game のパラメーター調整」
- 「寄付先の提示方法が寄付額に与える影響の探索的検討」
- 「親の適応戦略と環境要因から読み解く、日本における子どもへの暴力の傾向」
- 「場面想定法実験による外集団卑下を引き起こすメカニズムの検討～外集団成員の認識の有無に着目して～」
- 「関係流動性が他者からの評判に対する意識に与える影響～他者との関係性に着目して～」
- 「過去の行動に対する解釈レベルが現在の行動の道德度に与える影響の検討」
- 「人の悩みはいくつに分類できるのか」
- 「褒めが集団のパフォーマンスに与える影響」
- 「動機づけとそのタイミングが自我枯渇に及ぼす効果の検討」
- 「日本語・英語・中国語の流行曲歌詞から見る恋愛観の文化差」
- 「日・中・米の流行曲歌詞から見る抑うつ的反すうの文化比較」
- 「企業組織における組織環境とプロアクティブ行動の関係の検討」
- 「社会的侵害場面における第三者の制裁行動—他者の制裁により、人は加罰の程度を弱めるのか—」
- 「成績開示と努力に対する加点が努力量に与える影響の検討—暗黙理論の視点から—」
- 「選抜制の有無が個人の努力量に与える影響の検討—達成目標理論に着目して—」

他特別演習3名

2017年度

- 「第三者への正と負の資源分配に関する社会的選好」
- 「フォルトラインの強弱とその顕在化がチームの創造性に及ぼす影響に関する研究」
- 「笑いの伝染研究に関する総説と展望」
- 「高ダイバーシティ集団での Inclusive Leadership が心理的安全性に及ぼす影響」
- 「暗黙理論に反する場面における認知過程と対処行動の検討」
- 「性質の異なる「先延ばし」によって生じるインターネット依存度の違い」
- 「形見が遺族の立ち直りに及ぼす影響」
- 「隠されたプロフィール課題に見る情報選択バイアス」
- 「依頼・要請場面において自尊心と受容期待がフィードバック後の被拒絶感に与える影響」
- 「精神障害者に対する態度モデルの構築」
- 「Twitter における炎上について、主観尺度の構成および意見分布の検討」
- 「自己アピールと評価者の課題経験が被評価者の公平感認知に及ぼす影響」
- 「分配場面における集団の利益最大化と公正さのトレードオフ」
- 「加害者への視点取得と加害意図の知覚が赦しに与える効果の検討」
- 「Twitter における自己卑下呈示動機に関する研究：フィードバックに注目して」
- 「ヒト摂食行動の社会的促進の生起における視覚情報の必要性の検討」

他特別演習2名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

岡田真波「道徳判断研究の動向と展望—解釈レベル理論との関係に着目して—」(指導教員)唐沢かおり

榎本かおり「凶器注目効果が後続の記憶に及ぼす効果」〈指導教員〉村本由紀子
谷邊哲史「自律的人工物の道徳的地位：心の知覚と道徳判断の関連に基づく検討」〈指導教員〉唐沢かおり

2017年度

笠原伊織「自由意志信念が量刑判断に及ぼす影響：罰を下す動機に着目して」〈指導教員〉唐沢かおり
吉野太基「Does Group Deliberation Improve Sequential Decision Making? (集団討議は逐次的意志決定を改善するか)」
〈指導教員〉亀田達也
上島淳史「分配的正義をめぐる合意形成についての実験的検討」〈指導教員〉亀田達也
黒田起吏「信頼と裏切り回避：自他間の資源分配に関する選好と信頼行動の関係」〈指導教員〉亀田達也
齋藤真由「裁判員裁判に対する認知が、司法参加意欲に及ぼす影響—統治主体意識と統治客体意識に着目して—」
〈指導教員〉唐沢かおり
鈴木啓太「暗黙理論による課題選択方略の検討—複数課題場面に着目して—」〈指導教員〉村本由紀子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

正木郁太郎「職場の性別ダイバーシティの心理的影響：日本における組織環境の調整効果について」
〈主査〉村本由紀子 〈副査〉亀田達也・唐沢かおり・服部泰宏・繁樹江里

(乙)

なし

2017年度

(甲) (乙)

なし

27 文化資源学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2000年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の2つのコースから成る。

2コースに再編されたのは2015年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学(文書学・文献学)で構成されていた。後2者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文系・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」(身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど)をともなって生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」(resourceは泉に臨むという意味)とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

担当教員(文化資源学=木下直之教授、古井戸秀夫教授、月村辰雄教授(フランス語フランス文学と兼任)、渡辺裕教授(美学芸術学と兼任)、佐藤健二教授(社会学と兼任)、大西克也教授(中国語中国文学と兼任)、高岸輝准教授(美術史学と兼任)、文化経営学=中村雄祐教授、小林真理准教授、松田陽准教授(さらに、イローナ・バウシュ客員准教授、ライアン・ホームバーグ客員准教授、助教=野村悠里)の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美学芸術学、美術史学、博物館学、音楽学、演劇学、芸能史学、社会学、フランス語・フランス文学、中国語・中国文学、政策科学、法学、歴史学、国際協力論、開発研究、考古学、文書学などと多彩である。さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から併任教授を招いている。

(2) 大学院専攻・コースとしての活動

2016年度の修士課程入学者は8人(うち社会人学生が2人)、博士課程入学者が3人(うち社会人学生が2人)、2017年度の修士課程入学者は9人(うち社会人学生が5人)、博士課程入学者が3人(うち社会人学生が1人)であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあっては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いつけるフォーラムを、毎年開催してきた。2016年度のテーマは「2017年のホンモノ/ニセモノ 一体験を揺さぶる技術にふれてみませんか」、2017年度は「周年の祝祭—皇紀2600年・明治100年・明治150年—」であった。これらを含め、すべての回の開催記録が研究室ホームページに掲載されている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など

2002年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2016年6月に第14号、2017年6月に第15号を刊行した。2017年度の会員数は326人である。

(4) 国際交流の状況

2016年度修士課程に1名(韓国人)の外国人留学生を受け入れた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

木下 直之 (文化資源学)
古井戸 秀夫 (文化資源学) (～2016年度)
渡辺 裕 (文化資源学)
月村 辰雄 (文化資源学) (～2016年度)
佐藤 健二 (文化資源学)
大西 克也 (文化資源学)
高岸 輝 (文化資源学) (2017年度～)
中村 雄祐 (文化経営学)
小林 真理 (文化経営学)
松田 陽 (文化経営学)

(2) 助教の活動

野村 悠里

在職期間：2015年4月～現在

研究領域：装幀美術史、修復保存

主要業績：『書物と製本術——ルリユール/綴じの文化史』、みすず書房、2017年

(3) 外国人教員の活動

バウシュ・イローナ：2014年10月～2017年9月

研究領域：日本考古学(特に縄文時代)、ヨーロッパにおける日本考古学/民俗コレクションの歴史

主要業績：「オランダにおけるシーボルトのコレクションの日本考古学遺物について」、2016年、平藤喜久子編集責任、『國學院大學博物館国際シンポジウム、ワークショップ2015 博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書平成28年2月』東京國學院大學博物館出版、53-56頁

「The Splendour of the Middle Jomon Culture: Ceramics from the Central Japanese Highlands」、2016年、『Aziatische Kunst』(Publication of the Asian Art Society in the Netherlands)、第46(2)号、42-49頁

「ヨーロッパから見た縄文時代の第二道具」、2016年、國學院博物館、信濃川火焰街道連携協議会&新潟県立歴史博物館編集、『火焰形土器のデザインと機能 Jomonese Japan 2016 特別展』、96-99頁

「Prehistoric Networks across the Korea Strait (5000~1000BCE): 'Early Globalization' during the Jomon period in Northwest Kyushu?」、2016年、In: Tamar Hodos, Alexander Geurds, Paul Lane, Ian Lilley, Martin Pitts, Gideon Shelach, Miriam Stark, Miguel John Versluys (編集者)、『The Routledge Handbook of Archaeology and Globalization』413-437頁、London & New York: Routledge 出版

(学会発表)

Pusan National University、「Nephrite Ornaments, hunting and connectivity among foragers and early farmers in Northeast Asia (6000-4000BC)」、釜山、韓国、2015年5月4日

『Seventh Worldwide Conference of the Society of East Asian Archaeology (SEAA)』、「Early beadstone and other Ornaments: Jomon and Early Yayoi antecedents」、ボストン大学& ハーバード大学、ボストン、米国、2016年6月11日

『8th World Archaeology Congress Art and Archaeology 特別展』、「Finding the Heart in Stone」 exhibit display、両足院、京都、2016年8月27日～9月3日

『8th World Archaeology Congress (WAC)』、「The materiality of jade and amber beads in Jomon Japan」、同志社大学、京都、2016年8月29日

『8th World Archaeology Congress (WAC)』、「Jomon Pastability for our Futurability: lessons from Jomon cultural landscapes」(co-presenter with Junzo Uchiyama)、同志社大学、京都、2016年8月30日

『火焰形土器のデザインと機能 Jomonese Japan 2016 特別展&シンポジウム』、「ヨーロッパから見た縄文時代の第二道具」、国学院大学博物館、東京、2016年12月11日

『Northern Archaeology Research Seminar Series, Dept. of Archaeology』、「Jomon Identities: perceptions, representations and archaeology」アバディーン大学、英国、2017年1月11日

『文化資源学部最終講義』、「5000年前と現代における縄文アイデンティティズ」、東京大学、2017年7月13日

『The 2nd Conference of the European Association for Asian Art and Archaeology (EA-AAA)』、「Booming Jomon? Prehistoric material culture and its perception in contemporary Japan」、チューリッヒ大学、スイス、2017年8月26日

『European Association of Archaeologists (EAA) 2017 Annual Meeting』、「Tales of the Jomon and the Kofun: archaeological heritage and society in contemporary Japan」、マーストリヒト大学、オランダ、2017年9月1日

『European Association of Archaeologists (EAA) 2017 Annual Meeting』、「The materiality of Japanese jade through the ages」、マーストリヒト大学、オランダ、2017年9月2日

(担当講義)

Japanese Material Culture in Europe: Archaeological and Ethnographic Collections (1 & 2) [2016]

考古学と現代社会：縄文の物語

考古学と現代社会：古代の物語

文学部セイズベリーWG2016 サマープログラム特別講義「Japanese archaeology, modern society and identity: a Jomon case study」(2016/9/22)

原点、「ライデン大学考古学部の thesis tutorial からの見方(2016/10/06)

Japanese Material Culture in Europe: Archaeological and Ethnographical Collections (1) [2017]

考古学と現代社会：縄文と古代の物語 (1) [2017]

ホームバグ・ライアン：2017年10月～現在

研究領域：戦後日本視覚文化、マンガ研究、美術評論

主要業績：

(学会発表)

「Katsumata Susumu's Antinuclear Manga (勝又進の脱原発マンガ)」、ホノルル美術館、2017年11月、上智大学、2017年12月

「Gekiga a la mode: Baron Yoshimoto and Men's Fashion (劇画アラモード: バロン吉元と男性ファッション)」、東京大学、2018年1月

(論文)

「Baron Yoshimoto's Comics Gekiga (バロン吉元のコミック劇画)」、『The Troublemakers』、Retrofit Comics、2018年3月

(担当講義)

国境を超えた原子力の視覚文化

文化資源としての在日米軍基地

Short-Form Art Writing: Reviews, Labels, Manifestos

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

文化資源学専門分野

仙場真実「魔法少女の変身に見る日本女性モード史」(指導教員) 木下直之

徳平京「近代日本における椅子の導入—明治—大正期の子ども椅子を中心に—」(指導教員) 木下直之

吉田敦則「アニメ産業におけるデータベースの制度設計と運用体制—アニメ中間作成物の保存と活用に関する考察」(指導教員) 中村雄祐

和田真生「江戸歌舞伎と「太平記」の世界—寛政十年十一月の顔見せ興業」(指導教員) 古井戸秀夫

渡邊麻里「歌舞伎イヤホンガイド事始め—1960年アメリカ公演における同時通訳と1975年以降の日本における同時解説—」(指導教員) 古井戸秀夫

文化経営学専門分野

強谷幸平「近代都市建築の文化資源化：看板建築の「発見」を例に」〈指導教員〉木下直之

高橋伸佳「地方自治体の文化振興における財団が果たす役割とは—横浜市と横浜市芸術文化振興財団を事例として—」〈指導教員〉小林真理

宮崎律子「ミュージアムの音声ガイド・サービス—日本における導入過程の分析—」〈指導教員〉中村雄祐

陳艾文「『公論報』連載コラム「台湾風土」の研究—台湾文化を語る場をめぐって—」〈指導教員〉木下直之

学金愉奈「日本における文化統計の現状と整備方向性についての考察—韓国文化セムトを参考に—」〈指導教員〉小林真理

森田愛海「アール・ブリュットの受容初期に果たした世田谷美術館の役割に関する研究」〈指導教員〉小林真理

形態資料学専門分野

木村昌博「紙巻煙草の文化誌—その普及から未成年者喫煙禁止法まで—」〈指導教員〉古井戸秀夫

2017年度

文化資源学専門分野

垣田みずき「寺山修司の市街劇『人力飛行機ソロモン』—台本から読み解く「市街劇」の思想—」〈指導教員〉佐藤健二

湯浅英俊「現代日本における動物カフェの成立—その社会的位置づけに注目して—」〈指導教員〉木下直之

文化経営学専門分野

金子智哉「鎌倉国宝館と戦争—『鎌倉国宝館庶務日誌』に見る戦時下の博物館活動—」〈指導教員〉木下直之

荒井浩「公立歴史系博物館の社会におけるより良い認識と人材育成に繋がる事業のあり方の提案」〈指導教員〉小林真理

李貞善「世界遺産登録における不均衡の研究」〈指導教員〉松田陽

水野日香梨「現代日本のコスプレとコスプレイベント—そこで何が行われているか—」〈指導教員〉小林真理

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲)

文化経営学専門分野

長嶋由紀子「フランス都市文化政策の歴史的展開と政策理念の変遷—市民から都市へ—」

〈主査〉小林真理 〈副査〉木下直之・中村雄祐・月村辰雄・友岡邦之

(乙)

なし

2017年度

(甲)

文化経営学専門分野

中村美帆「日本国憲法第25条「文化」概念の研究—文化権(cultural right)との関連性—」

〈主査〉小林真理 〈副査〉木下直之・松田陽・伊藤裕夫・小島立

李知映「植民地朝鮮における近代的空間としての劇場と演劇界」

〈主査〉小林真理 〈副査〉木下直之・中村雄祐・渡辺裕・古井戸秀夫

(乙)

なし

28 韓国朝鮮文化

1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本で初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

(1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、考古学1名、文化人類学1名、言語学1名、思想史1名の、合計5名の教員で構成される。また、外国人客員教員（特任准教授）1名が在籍している（2016～17年度。2017年度に考古学1名退職、2018年度から社会学1名就任）。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い東洋史学、考古学、社会学、言語学、中国思想文化学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

(3) 研究室としての活動

1. 東京大学コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2016年度は5回、2017年度は5回開催した。

2. 講演記録の刊行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録（2016年度）』（2017年3月）、『同（2017年度）』（2018年3月）を刊行した。

3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』第16号（2017年3月）、第17号（2018年3月）を刊行した。

(4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）と交流協定を締結している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

韓国朝鮮歴史文化コース

教授 早乙女雅博 東アジア考古学・古代日韓交流史（～2017年度）

教授 六反田豊 韓国朝鮮中世近世史

教授 Albert Charles Muller 韓国仏教・人文情報学

韓国朝鮮言語社会コース

教授 福井玲 韓国朝鮮語学・言語学

教授 本田洋 社会人類学・韓国朝鮮文化研究

特任准教授 李亨眞 韓国現代文学（2016～17年度）

(2) 助教の活動

金光来（2013年4月1日から2017年3月） 朝鮮思想史

主要業績

（著書） 共著、金光来、『朝鮮朝後期の社会と思想』、勉誠出版、2015.2

(論文) 金光来、「星湖李翼の学問的背景(1) 一家系と生涯と著述一」、『韓国朝鮮文化研究』第14号、2015.3
金光来、「星湖李翼の為学の方(1) 一不苟新・不苟留・不苟棄の三原則」、『中国哲学研究』第28号、
2015.6

金光来、「星湖李翼の学問的背景(2) 一道統意識と家学伝統の二重構造一」、『韓国朝鮮文化研究』第
15号、2016.3

(学会発表) 国内、金光来、「四端七情論と靈魂論」、CPAG 若手ワークショップ「普遍をめぐる問い——18～
20世紀東アジアから考える」、2015.2.7

国際、金光来、「慎後聃のカトリック教理書批判」、韓国儒教学会創立30周年記念国際学術大会、韓
国・ソウル・成均館大学校、2016.5.20

鈴木開 (2017年4月1日から2018年3月) 朝鮮近世史

主要業績

(論文) 鈴木開、「丙子の乱と朝清関係の成立」、『朝鮮史研究会論文集』第55号、2017.10

鈴木開、「目録未収録の稲葉岩吉の論著について」、『明大アジア史論集』第22号、2018.3

(3) 外国人教員の活動

李亨眞

在任期間：2015年4月～2018年3月

研究領域：韓国現代文学

担当講義：韓国朝鮮語運用法(2)、韓国朝鮮文学研究、韓国朝鮮文化交流演習

(4) 外国人研究員・内地研究員

学術振興会特別研究員

小寺智津子

研究期間 2014年4月～2017年3月

研究題目 ガラス製品から見た弥生・古墳時代の社会と汎アジア的国際社会交流の考古学的研究

研究員

全恵子

研究期間 2016年4月～2018年3月

研究題目 現代韓国語の先語末語尾-ㄷ-の研究

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2016年度

韓国朝鮮歴史文化コース

姜多映「甲午改革期から大韓帝国期における任命文書の変遷に関する研究—日本との影響関係を中心に—」

(指導教員) 六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

矢ヶ部有輝「韓国人の「日本」体験と日本認識—日本語学習経験を有する若年層を中心に—」(指導教員) 本田洋

康明淑「朝鮮学校出身の中高年既婚女性たちの事例」(指導教員) 本田洋

澁谷秋「現代朝鮮語における色彩語の語彙論的考察」(指導教員) 福井玲

韓惠善「韓国の地方都市における購買活動の実態—場所選択を中心に—」(指導教員) 本田洋

2017年度

韓国朝鮮歴史文化コース

中武英軌「19世紀の易地通信交渉における朝鮮政府の対応—1811年辛未通信使を中心に—」(指導教員) 六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

丸山聖美「現代韓国の地域社会における産業集積の形成と特質—全羅北道高敞郡の「覆盆子」産業を事例に—」

(指導教員) 本田洋

鮑潤叙「吉林省吉林市阿拉底朝鮮族民俗村で使われる朝鮮語の文法について」(指導教員) 福井玲

鄭孝俊「日本における K-POP ファンコミュニティに関する一考察—越境・接近・文化装置—」(指導教員) 本田洋

李雪梅「朝鮮族の移動とアイデンティティの再構築：日本在住の延辺出身者の事例から」(指導教員) 本田洋

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2016年度

(甲) (乙)

なし

2017年度

(甲)

韓国朝鮮歴史文化コース

鈴木開「朝清関係成立史の研究—明清交替と朝鮮外交—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・杉山清彦・吉田光男・寺内威太郎

金志善「植民地朝鮮における在朝鮮日本人の音楽活動—中等音楽教員・音楽家の活動からみた韓国西洋音楽受容史の一側面—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・本田洋・三ツ井崇・塚原康子

通堂あゆみ「京城帝国大学の基礎的研究—日本統治下朝鮮における帝国大学の制度・組織とその展開—」

〈主査〉早乙女雅博 〈副査〉本田洋・吉田光男・松田利彦・永島広紀

朱洪奎「高句麗瓦の研究」

〈主査〉早乙女雅博 〈副査〉大貫静夫・六反田豊・谷豊信・高久健二

中尾道子「朝鮮時代人物画の展開—契会図、雅集図と画家の自己表象—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・小島毅・吉田光男・吉田宏志

韓国朝鮮言語社会コース

文聖姫「北朝鮮における経済改革・開放政策と市場化」

〈主査〉本田洋 〈副査〉早乙女雅博・木宮正史・伊藤重人・三村光弘

李莎梨「韓国における大卒ホワイトカラーの起業行動—IMF危機以降の自営業層の変化—」

〈主査〉本田洋 〈副査〉六反田豊・有田伸・安倍誠・金成垣

(乙)

なし

29 次世代人文学開発センター

1. センター活動の概要

昭和41年に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により平成17年から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。次の3部門から構成されている。

a. 先端構想部門（〈文化交流〉、〈東アジア海域交流〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象とする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。平成17年よりセンター主任として小佐野重利教授のほか、小島毅教授が兼担教員となり、平成26年には向井留美子教授が着任した。また、平成21年からの5年間は佐藤慎一教授が特任教授を務めた。平成25年度から、センター主任は小島教授に交代となった。本部門には、小島教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成17年度から平成21年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。センター紀要として、引き続き『文化交流研究』第29号（平成28年度）と同第30号（平成29年度）を刊行した。また、平成18年度より研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を兼ねて開始した文化交流茶話会を平成28年度、29年度も継続し、第40回から第44回まで実施した。

平成29年7月に人文社会系研究科が人文学の部局横断プラットフォームである連携研究機構ヒューマニティーズセンターへ参画したことを受け、本部門は平成30年1月に特任助教を雇用し、当該センター運営業務の支援・担当にあてた。それとともに、鈴木淳本研究科教授が推進する企画研究「学術資産としての東京大学」の補助業務を行っている。

b. 創成部門（〈死生学〉、〈人文情報学拠点〉）

平成17年に島菌進教授（宗教学宗教学）を兼担教員として設置された。その前段階は平成14年度に21世紀COE研究拠点プログラムの一つとして採用され、5年間23人の教員が事業推進担当者となって進めてきた「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」のプログラムである。平成19年度に本部門に寄付講座として設置された上廣死生学講座と、また平成19年度から5年間15人の教員が事業推進担当者となって進めてきた21世紀COE研究拠点プログラム「死生学の展開と組織化」と連携して、死生学の将来的な発展に向けて体制を整えていく役割を果たし、死生学・応用倫理センターの発足にともなってその使命を終えた。かわって、平成24年度からは、それまで萌芽部門に置かれていた〈データベース拠点・大蔵経〉が拡大改組して〈人文情報学拠点〉となり、インド哲学・仏教学から下田正弘教授が本センターに配置換えとなったほか、チャールズ・ミュラー特任教授（平成25年11月からは教授）も創成部門に移った。教育面では「人文情報学概論」および「人文情報学特殊講義」を開講するとともに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を提供している。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に大きな役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造的に連携し、文字、および画像資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼担教員としては、長島弘明教授（日本文学）、武川正吾教授（社会学）、小林正人准教授（言語学）、高岸輝准教授（美術史学）、高橋典幸准教授（日本史学）、中村雄祐教授（文化資源学）の6名がおり、下田教授・ミュラー教授とともにこれらの事業を推進している。

c. 萌芽部門（〈演劇学〉、〈データベース拠点・大蔵経〉、〈イスラーム地域研究〉、〈現代インド研究〉）

〈演劇学〉は、平成18年に演劇学・舞踊学の確立を目的として専任教員の古井戸秀夫教授により開設された。哲学（美学）・文学（国文学）・歴史学（日本史）を中心に展開されてきた研究の成果を基盤に、演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのようにして構想するか、ということ課題としている。教育面では、大学院人文社会系研究科文化資源学専攻において講座を持ち、学生の教育指導を行うほか、学部の授業として「藝能学特殊講義」を開講している。研究面では、日本の演劇・舞踊が形態資料・文字資料としていかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、ということの究明を志している。

〈データベース拠点・大蔵経〉は、平成19年に設置され、下田正弘教授が兼担してチャールズ・ミュラー特任教授とともに事業を推進していたが、上述のように、平成24年から〈人文情報学拠点〉として創成部門に移った。

〈イスラーム地域研究〉は、大学共同利用法人人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定により、平成18年6月にイスラーム地域研究を総合的に推進するための共同研究拠点として創設された。当初は小松久男教授、つづいて大稔哲也准教授を兼担教員として、早稲田大学、上智大学、財団法人東洋文庫などに設置された研究拠点とともにイスラーム地域研究ネットワークを形成しつつ、平成23年度からは「イスラームの思想と政治：比較と連関」をテーマとする共同研究に取り組み、内外の研究者（センター流動教員として他部局・他大学教授4名、センター客員教員として外国人研究者1名）を受け入れ、共同研究を行うとともに、日本学術振興会特別研究員などの若手研究者を本センター研究員として受け入れた。このプロジェクトは平成27年度をもって終了した。

〈現代インド地域研究〉は水島司教授（東洋史）を兼担教員としている（平成29年3月まで）。平成22年4月より、人間文化研究機構「現代インド地域研究」推進事業の一環として、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、国立民族学博物館、龍谷大学の6大学に設置された拠点の一つとして、現代インドに関するネットワーク型の共同研究を推進している。本事業は現代インドの動態を全体的にとらえるとともに、将来を展望できるような学術的な視角と方法論を確立し、国内はもちろん国際的な連携研究も行う組織体制と学術環境を整えることを目的としている。東京大学拠点は、経済発展と環境変動という側面から、現在生じている様々な 이슈の解決法を探り出し、将来への知を蓄積することを試み、インドの経済と環境に関する基本的な資料や文献を収集・蓄積し、データベースを構築する作業を進め、それらをもとに、インド経済・環境の長期的な動向分析を行ってきた。平成29年3月をもって総合文化研究科に本学内の拠点を移している。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

- 先端構想部門
 - 小佐野重利教授（文化交流）
 - 小島毅教授（東アジア海域交流）
 - 向井留実子教授（日本語教育）
- 創成部門
 - 下田正弘教授
 - Albert Charles Muller 教授
 - 長島弘明教授
 - 武川正吾教授
 - 中村雄祐教授
 - 小林正人准教授
 - 高岸輝准教授
 - 高橋典幸准教授
- 萌芽部門
 - 古井戸秀夫教授（演劇学）
 - 松村一登教授
 - 水島司教授（現代インド地域研究）

(2) 助教の活動

國木田 大

在職期間 2015年4月～

研究領域 北東アジア考古学

主要業績

（論文）

阿部昭典・國木田大・吉田邦夫、「縄文時代における鐔形土製品の用途研究」、『日本考古学』、41、1-15 頁、

2016.5

- 出穂雅実・國木田大・尾田識好・廣松滉一・中沢祐一・赤井文人・高橋理、「北海道千歳市丸子山遺跡旧石器下層石器集中の地質編年：AMS年代の追加と最終氷期最盛期石器群の年代に関する若干の考察」、『旧石器研究』、12、207-215頁、2016.5
- Masaki Fujita, Shinji Yamasaki, Chiaki Katagiri, Itsuro Oshiro, Katsuhiko Sano, Taiji Kurozumi, Hiroshi Sugawara, Dai Kunikita, Hiroyuki Matsuzaki, Akihiro Kano, Tomoyo Okumura, Tomomi Sone, Hikaru Fujita, Satoshi Kobayashi, Toru Naruse, Megumi Kondo, Shuji Matsu'ura, Gen Suwa, Yousuke Kaifu、「Advanced maritime adaptation in the western Pacific coastal region extends back to 35,000-30,000 years before present」、『Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America』、113-40、11184-11189頁、2016.10
- 阿部昭典・國木田大・吉田邦夫、「縄文時代における注口付浅鉢の成立過程と煮沸具化の意義」、『考古学研究』、63-3、63-84頁、2016.12
- 國木田大・ボポフ A.N.・ラシン B.V.・森先一貴・松崎浩之、「ロシア極東新石器時代遺跡における土器付着炭化物の14C年代」、『第18回AMSシンポジウム報告集』、164-167頁、2016.12
- 熊木俊朗・福田正宏・國木田大、「鈴谷式土器とその年代」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、202、101-135頁、2017.3
- 國木田大・吉田邦夫・松崎浩之、「2004年ノヴォトロイツコエ10遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」、『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動』、Vol.2、80-82頁、2017.3
- Dai Kunikita, Alexander N Popov, Boris V Lazin, Kazuki Morisaki, Hiroyuki Matsuzaki、「Dating and stable isotope analysis of charred residues from Neolithic sites in the Primorye, Russian Far East」、『Radiocarbon』、59-2、565-573頁、2017.4
- Zhanyang Li, Dai Kunikita, Shinji Kato、「Early pottery from the Lingjing site and the emergence of pottery in northern China」、『Quaternary International』、441、49-61頁、2017.6
- Dai Kunikita, Lixin Wang, Shizuo Onuki, Hiroyuki Sato, Hiroyuki Matsuzaki、「Radiocarbon dating and dietary reconstruction of the Early Neolithic Houtaomuga and Shuangta sites in the Song-Nen Plain, Northeast China」、『Quaternary International』、441、62-68頁、2017.6
- 國木田大・王立新・大貫静夫・佐藤宏之・松崎浩之、「中国東北部における初期新石器時代遺跡の年代測定と食性復元」、『第19回AMSシンポジウム報告集』、129-132頁、2017.6
- Derevianko, A.P., Derevianko, E.I., Nesterov, S.P., Tabarev, A.V., Uchida, K., Kunikita, D., Morisaki, K., Matsuzaki, H., 「New data on the chronology of the Initial Neolithic Gromatukha Culture, Western Amur Region」、『Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia』、45-4、3-12頁、2017.12
- Грищенко.В.А.・Фукуда.М.・Василевский.А.А.・Онуки.Ш.・Сато.Х.・Куникита.Д.・Кумаки.Т.・Можаяев.А.В.・Перегулов.А.С.・Пашенцев.П.А.・Учида.К.・Морисаки.К.・Якушиге.М.・Натсуки.Д.・Ямашита.Ю.、「Новые исследования поселения Адо-Тымово-2 (Результаты работ совместной Российской-Японской экспедиции 2014, 2015 гг.)」、『Археология CIRCUM-PACIFIC: памяти Игоря Яковлевича Шевкомуда』、136-142頁、2017.12
- Учида.К.・Шевкомуд.И.Я.・Ямада.М.・Куникита.Д.・Горшков.М.В.・Косицына.С.Ф.・Шаповалова.Е.А.・Имаи.Ч.・Мацумото.Т.、「Результаты исследования поселения Богородское-24 в 2008 г. в Ульчском районе Хабаровского края」、『Археология CIRCUM-PACIFIC: памяти Игоря Яковлевича Шевкомуда』、112-120頁、2017.12
- Morisaki Kazuki, Dai Kunikita, Hiroyuki Sato、「Holocene climatic fluctuation and lithic technological change in northeastern Hokkaido (Japan)」、『Journal of Archaeological Science: Reports』、17、1018-1024頁、2018.2
- 國木田大・吉田邦夫・松崎浩之、「1996年ゴンチャルカ1遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」、『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動』、Vol.3、98-100頁、2018.3
- 尾田識好・森先一貴・岩瀬彬・山崎健・國木田大・佐藤宏之、「旧石器・縄文時代移行期における前田耕地遺跡の意義」、『東京都埋蔵文化財センター研究論集』、32、57-71頁、2018.3
- 國木田大・古屋紀之・松崎浩之、「港北ニュータウン遺跡群の弥生時代資料の年代測定」、『横浜市歴史博物館紀要』、22、12-25頁、2018.3
- (解説)
- 國木田大、「学際領域研究の動向」、『日本考古学年報』、67、5-10頁、2016.5
- 國木田大、「土器付着物を用いた東北部地域の食性復元」、『SEEDS CONTACT』、4、30-32頁、2017.5
- 國木田大、「放射性炭素年代測定」、『横浜に稲作がやってきた！？』、52-54頁、2017.9

(学会発表)

- 国内、國木田大・熊木俊朗・佐野雄三・守屋亮・山田哲・松崎浩之、「大島2遺跡の放射性炭素年代および土器付着用を用いた食性復元」、日本文化財科学会第33回大会、奈良、2016.6.4
- 国内、國木田大・福田正宏・遠藤英子・オクサナ・ヤンシナ・ワレリー・デリュージン・マクシム・ゴルシュコフ・エカテリーナ・シャポワロワ、「ロシア古金属器時代の土器付着用にもみられるC4植物の影響」、日本文化財科学会第33回大会、奈良、2016.6.5
- 国内、國木田大、「北東アジアにおける縄文/新石器時代前半期の文化変遷と年代」、日本列島における縄文土器出現から成立期の年代と文化変化、東京、2016.6.11
- 国内、國木田大、「科学分析で探る縄文文化」、縄文“体感”世界遺産講座、青森、2016.10.21
- 国内、遠藤英子・福田正宏・那須浩郎・國木田大・オクサナ・ヤンシナ・ワレリー・デリュージン・マクシム・ゴルシュコフ・エカテリーナ・シャポワロワ、「アムール川流域古金属器時代の雑穀栽培」、第31回日本植生史学会、神奈川、2016.11.19
- 国内、國木田大、「中期末葉から後期初頭の注口付浅鉢と深鉢の炭素・窒素同位体比分析」、科学研究費補助金「縄文土器の器種分化と浅鉢の煮沸具化の研究」(研究代表：阿部昭典)公開研究会、千葉、2016.11.26
- 国内、福田正宏・國木田大・遠藤英子・O.ヤンシナ・V.デリュージン・M.ゴルシュコフ・E.シャポワロワ、「ロシア極東古金属器時代における穀物受容の北方展開について—集落地・生業・食生態の比較分析—」、九州史学会大会シンポジウム、福岡、2016.12.11
- 国内、國木田大・王立新・大貫静夫・佐藤宏之・松崎浩之、「中国東北部における初期新石器時代遺跡の年代測定と食性復元」、第19回AMSシンポジウム、千葉、2016.12.17
- 国内、夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・熊木俊朗・佐藤宏之・國木田大・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点」、第30回東北日本の旧石器文化を語る会、宮城、2016.12.17
- 国内、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2016年度—ザバイカルにおける更新世・完新世移行期の研究—」、第18回北アジア調査研究報告会、北海道、2017.2.18
- 国内、福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・田尻義之・A.Shipovalov・M.Gorshkov・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗、「アムール流域における考古学的調査報告(2016年度)」、第18回北アジア調査研究報告会、北海道、2017.2.19
- 国内、國木田大、「土器付着用を用いた東北部地域の食性復元」、日本列島北部の穀物栽培〜G.クロフォードさんを迎えて〜(科学研究費補助金「東日本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」研究代表：設楽博己)公開シンポジウム、東京、2017.3.5
- 国内、福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・田尻義之・A.Shipovalov・M.Gorshkov・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗、「アムール流域における先史遺跡景観の実態調査—ハバロフスク地方郷土誌博物館による地域文化資源保護活用への国際協力—」、日本中国考古学会九州部会第75回、福岡、2017.3.28
- 国内、國木田大・根岸洋・井上雅孝・武田嘉彦・東海林心・五十嵐祐介・西村広経・松崎浩之、「東北地方北部の弥生時代における土器付着用を用いた食性分析」、日本文化財科学会第34回大会、山形、2017.6.10
- 国内、國木田大・高瀬克範・熊木俊朗・松崎浩之、「土器付着用を用いた擦文文化の食性分析」、日本文化財科学会第34回大会、山形、2017.6.11
- 国内、内田和典・S.ネステロフ・A.タバレフ・森先一貴・國木田大・松崎浩之、「極東地域の更新世終末から完新世移行期における考古学的文化の再構築—グロマトウ—ハ文化の年代的位置づけを中心に—」、第15回日本旧石器学会、東京、2017.7.1
- 国内、夏木大吾・國木田大・佐藤宏之・青木要祐・太田圭・増子義彬・熊木俊朗・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点出土の縄文時代草創期石器群」、第15回日本旧石器学会、東京、2017.7.1
- 国際、KUNIKITA D、「Radiocarbon dating and analyzing food habits using charred remains on pottery from the Early Neolithic sites in Northeast Asia」、22(2)d Suyanggae International Symposium in Sakhalin 《The initial Human Exploration of the Continental and Insular parts of the Eurasia. Suyanggae and Ogonki》、Sakhalin, Russia、2017.7.8
- 国内、國木田大、「北東アジアにおける土器の出現と食性復元」、文化の始まりを探る 土器の始まり・文字の始まり、東京、2017.12.16
- 国内、夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡M-I地点2017年度調査」、第31回東北日本の旧石器文化を語る会、岩手、2017.12.16

国内、内田和典・國木田大・森先一貴、「極東地域の土器出現期グロマトゥーハ文化の年代」、第20回長野県旧石器研究交流会、長野、2018.2.4

国内、福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・A.Malyabin・M.Gorshkov・田尻義了・江田真毅・夏木大吾・足立達朗、「ロシア・ユダヤ自治州における完新世遺跡群の実態調査—2017年度調査結果速報—」、日本中国考古学会九州部会第78回、福岡、2018.2.24

国内、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2017年度—沿バイカルにおける更新世・完新世移行期の研究—」、第19回北アジア調査研究報告会、東京、2018.3.10

国内、夏木大吾・太田圭・池山史華・舟木太郎・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・廣松滉一・山田哲・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果（第11次）」、第19回北アジア調査研究報告会、東京、2018.3.11

国内、國木田大、「土器付着物を用いた縄文時代以降の食性分析」、第19回北アジア調査研究報告会、東京、2018.3.11

(研究報告書)

國木田大、「縄文土器の器種分化と浅鉢の煮沸具化の研究（平成26年度～平成28年度科学研究費助成事業 研究基盤（C）研究成果報告書 研究代表者：阿部昭典）」、27-36頁、2017.3

國木田大・松崎浩之、「二枚橋（1）遺跡」、179-185頁、2017.3

國木田大・松崎浩之、「サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ」、257-263頁、2018.3

一色 大悟

在職期間 2018年1月～

研究領域 仏教学

主要業績

(論文)

一色大悟、「説一切有部の *prajñā*」、『仏教文化研究論集』、Vol. 18・19、17-28頁、2017.3

(学会発表)

国際、一色大悟、「説一切有部思想解釈の刷新に向けた課題—研究史批判と『順正理論』の形而上学的研究—」、第1回東アジア仏教研究大学院生交流シンポジウム、東京大学（東京）、2017.8.24

国内、一色大悟、「衆賢の仏説論の再考」、日本印度学仏教学会第68回学術大会、花園大学（京都）、2017.9.3

国内、一色大悟、「近代日本の縁起解釈論争にみる人間観—説一切有部の三世両重縁起説をめぐって—」、日本仏教学会第87回学術大会「人間とは何か—人間定義の新次元へ—仏教から見る「人間」定義の新次元—」、東北大学（仙台）、2017.9.6

国際、一色大悟、「木村泰賢の説一切有部アビダルマ文献史研究—近代日本の仏教学の起源に関する一考察—」、第4回東京大学・全南大学大学院生学術交流シンポジウム「自己と世界・ことばと真理・普遍と多元・歴史」、東京大学（東京）、2018.2.17

国際、Daigo Isshiki、「Bauddhakośa」、International Workshop on Buddhist Lexicography in the 21st Century, Pune, India、2018.3.1

(予稿・会議録)

国内会議、一色大悟、「〈講演録〉仏教応用倫理の現状と課題」、臨済宗妙心寺派教学研究委員会平成29年度第2回会合、花園大学（京都）、2017.7.3

『花園大学国際禅学研究所論叢』、第13号、(1)-(52)頁、2018.3

国際会議、一色大悟、「木村泰賢の説一切有部アビダルマ文献史研究—近代日本の仏教学の起源に関する一考察—」、第4回東京大学・全南大学学術交流シンポジウム、東京大学（東京）、2018.2.17

『第4回東京大学・全南大学学術交流シンポジウム』、81-90頁、2018.2

(他機関での講義等)

非常勤講師、鶴見大学短期大学部、「宗教学」、2017.4～2017.9

講演、臨済宗妙心寺派教学研究委員会平成29年度第2回会合、「仏教応用倫理の現状と課題」、2017.7.3

連続講演、東京大学仏教青年会、「アビダルマ入門」、2017.10～2018.3

30 死生学・応用倫理センター

1. センター活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として2011年4月に設けられた。それに伴い「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（会田特任教授、池澤教授、一ノ瀬教授、大西教授（2017年度）、小島教授、榊原教授、佐藤健二教授（2016年度）、下田教授、清水特任教授（2016年度）、白波瀬教授（2016年度）、早川特任准教授（2017年度）、堀江准教授）により行われる。所属教員は会田特任教授、清水特任教授（2016年度）、早川特任准教授（2017年度）、堀江准教授（以上専任）、池澤教授、榊原教授（以上兼任）である。なお、清水特任教授は2016年度をもって退職し、2017年度からは会田特任准教授が特任教授となり、早川特任准教授が新たに赴任した。

死生学・応用倫理センターの活動は、以下の四つを柱とする。

- ① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これらは今までグローバルCOEの活動として行われてきたが、今後もそれを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元モデルケースとなるであろう。
- ② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の開設：文学部は既に「応用倫理教育プログラム」として応用倫理教育を展開してきたが、それを学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。
- ③ 国際シンポジウム・研究集会：21世紀COE、グローバルCOEを通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができてつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。
- ④ 次世代を担う若手研究者の育成：COEプログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためにグローバルCOEの機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

以下、この四つについて活動報告を行う。

① 医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育

これは「上廣死生学・応用倫理講座」の担当であり、2016年度には8月に《医療・介護従事者のための死生学》セミナーを東京大学において開催したほか、「臨床倫理セミナー」を5月（札幌）、7月（諏訪、仙台）、9月（金沢）、11月（札幌）、12月（松山、大阪）、1月（大阪）に計八回開催した。また、臨床死生学・倫理学研究会を計十三回開催した。

2017年度には《医療・介護従事者のための死生学》セミナー9月に夏期セミナーを開講したほか、7月に初級セミナーを開講した。「臨床倫理セミナー」は5月（札幌）、7月（盛岡、仙台、大阪）、8月（諏訪）、9月（金沢）、10月（松山、佐久）、12月（札幌）、1月（大阪）、3月（久留米）に計十一回行った。また、「臨床死生学・倫理学研究会」を計十一回開催した。

なお、リカレント教育は上廣死生学・応用倫理講座が担当であるので、詳細はそちらの頁を参照されたい。

② 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」

「死生学・応用倫理教育プログラム」は2012年4月から新たに開設したもので、東京大学の部局横断型教育プログラムの一つであるだけでなく、後期教養科目にも指定されている。2012年度の開設科目は28科目（うち死生学・応用倫理センターで直接開講するのは19、以下同じ）、2013年度には33（21）、2014年度には28（21）、2015年度には31（22）、2016年度28（21）、2017年度28（22）あった。なお、これらの科目はいずれも2単位、学部・大学院共通科目である。2016、2017年度に開設した「死生学・応用倫理教育プログラム」授業科目は以下の通りである。

2016年度

清水哲郎ほか「死生学概論」（死生学の射程）

池澤優ほか「応用倫理概論」（応用倫理入門）

清水哲郎・会田薫子「死生学演習I」（臨床死生学・倫理学の諸問題）

堀江宗正「死生学演習II(1)」（死別と悲嘆）

堀江宗正「死生学演習II(2)」（スピリチュアリティ研究）

池澤優「死生学演習III」（死生学基礎文献講読）

会田薫子「死生学演習IV(1)」(質的研究法)
 会田薫子「死生学演習IV(2)」(生命倫理の現在)
 小松美彦「応用倫理演習I」(科学的生命観と人生論的生命観)
 一ノ瀬正樹「応用倫理演習II」(いのちとリスクをめぐる倫理)
 池澤優「応用倫理演習III」(環境倫理文献講読)
 堀江宗正「応用倫理演習IV」(環境思想研究)
 堀江宗正「応用倫理演習IV」(未来倫理の探求)
 清水哲郎「死生学特殊講義」(臨床死生学原論)
 会田薫子「死生学特殊講義」(超高齢社会の医療とケア)
 榊原哲也「死生学特殊講義」(ケアの現象学の展開)
 大塚類「死生学特殊講義」(事例から読み解く生きづらさ)
 清水哲郎「応用倫理特殊講義」(臨床倫理学原論)
 桑子敏雄「応用倫理特殊講義」(生命と環境の倫理)
 福永真弓「応用倫理特殊講義」(生と場所の環境倫理)
 村上靖彦「応用倫理特殊講義」(現象学的な質的研究の方法論と実践)
 樋口範雄・米村滋人・児玉安司「特別講義医事法」【法学部】
 上別府圭子・佐藤伊織・副島堯史・キタ幸子「家族看護学」【医学部】
 金森修「生・権力論と教育」【教育学部】
 正木春彦ほか「生命倫理」【農学部】
 正木春彦ほか「技術倫理」【農学部】
 廣野喜幸「応用倫理学概論」(応用倫理学の思考法を学ぶ) 【教養学部】
 松本真由美「科学技術リテラシー論II」【教養学部】

2017年度

堀江宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程)
 池澤優ほか「応用倫理概論」(応用倫理入門)
 早川正祐「死生学演習I」(病いの語りをめぐる倫理)
 堀江宗正「死生学演習II」(批判的死生学)
 池澤優「死生学演習III」(死生学基礎文献講読)
 小松美彦「応用倫理演習I」(科学的生命観と人生論的生命観II)
 一ノ瀬正樹「応用倫理演習II」(科学と疑似科学のモラル)
 池澤優「応用倫理演習III」(環境倫理文献講読)
 堀江宗正「応用倫理演習IV(1)」(環境思想研究)
 堀江宗正「応用倫理演習IV(2)」(未来倫理の探求)
 会田薫子「応用倫理演習V」(生命倫理と臨床倫理の現在)
 堀江宗正「死生学特殊講義」(死生の心理学)
 会田薫子・早川正祐「死生学特殊講義」(臨床死生学・倫理学の諸問題)
 会田薫子「死生学特殊講義」(臨床老年死生学入門)
 早川正祐「死生学特殊講義」(ケアと共感の哲学)
 早川正祐「死生学特殊講義」(自律についての関係的なアプローチの展開)
 榊原哲也「死生学特殊講義」(死生のケアの現象学)
 大塚類「死生学特殊講義」(事例から読み解く生きづらさ)
 会田薫子「応用倫理特殊講義」(質的研究法)
 福永真弓「応用倫理特殊講義」(生と場所の環境倫理)
 森岡正博「応用倫理特殊講義」(生命の哲学と倫理)
 村上靖彦「応用倫理特殊講義」(現象学的な質的研究)
 赤林朗・瀧本禎之・中澤栄輔「生命・医療倫理I」【医学部】
 上別府圭子・佐藤伊織「家族と健康」【医学部】
 根本圭介ほか「技術倫理」【農学部】
 関崎勉ほか「生命倫理」【農学部】
 鈴木貴之「応用倫理学概論」【教養学部】

③ 国際シンポジウム・研究集会

死生学・応用倫理センターでは2014年度から連続して韓国の代表的死生学研究機関である翰林大学校死生学研究所との共催で国際シンポジウムを開催してきた。2016年には3月12日に翰林大学国際会議室で以下の会議を開催した。翰林大学生死学研究所、東京大学文学部死生学・応用倫理センター共催国際学術会議「アジアの発展の矛盾と死生学の模索」

1部：東アジアの経済発展と人命軽視、災害に対する死生学の対応

松本三和夫（東京大学文学部社会学研究室）「構造災—科学社会学者からのメッセージ—」

堀江宗正「経済優先から（いのち）の連帯へ—原発事故を契機として」

木村敏明（東北大学文学部宗教学研究室）「災害を受け止める伝承知—インドネシアの事例から」

2部：韓国における災難と自殺に関する死生学の対応

ジョ・ヨンレ（翰林大学心理学科）"Trauma exposure, resilience, and positive and negative mental health"

キム・ドンヒョン（翰林大学医学部）"Epidemiologic Characteristics and Social Perspectives of Suicide in Korea"

イ・スイン（翰林大学生死学研究所）「自殺における社会的・心理的・宗教的要因の影響—キリスト教、仏教、カトリックの比較」

2017年度には2017年5月19日に翰林大学国際会議室において以下の会議を開催した。

翰林大学生死学研究所、南華大学、東京大学文学部死生学・応用倫理センター共催国際学術会議 “Loss and Healing in Life and Death Studies”

SESSION 1: Contemporary Issues on Life and Death Studies

池澤優 “The Death of a Thanatologist: Fu Weixun’s Views of Religions, in Comparison with Hideo Kishimoto”

孫效智（国立台湾大学）“Patient Autonomy Act in Taiwan”

Kim Yeon-ok（翰林大学生死学研究所）“Spirituality, Optimism, and Death Anxiety among Older Adults”

SESSION 2: Loss and Healing

Jon K. Reid (Southern Oklahoma State University) “The Healing Role of Memorializing Our Loved Ones”

堀江宗正 “Continuing Bonds in the Tohoku Disaster Area: Locating the Destinations of Spirits”

釋永有（南華大学生死学系）“The Miracle Tale of the Diamond Sutra”

Rhee, Young-e（江原大学人文学院）“Healing in the Age of 4th Industrial Revolution”

その他、上廣死生学・応用倫理講座の主催で、2017年3月4日に臨床倫理シンポジウム・清水哲郎特任教授最終講義「臨床倫理の明日を拓く—本人・家族とともに考える意思決定」を、2018年3月18日に「引き算の医療—本当の手厚さへの模索」を開催した。

④次世代を担う若手研究者の育成

死生学・応用倫理の未来を担う若手研究者を育成するために、2016年度は特任研究員3名（うち二人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用し、平成27年度は4名（うち二人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇った。

特任研究員はセンターの諸活動の中核を担うだけでなく、センター機関誌である『死生学・応用倫理研究』に研究成果を積極的に発表することが期待されている。『死生学・応用倫理研究』は、グローバルCOE「死生学」の機関誌として発行してきた『死生学研究』を改名して継続刊行しているものであり、2016年度に22号を、2017年度には23号を刊行した。

また、上廣死生学・応用倫理講座では高齢患者と家族の意思決定のためのガイドブック、『高齢者ケアと人工透析を考える—本人・家族の意思決定プロセスノート』（清水哲郎監修、会田薫子編、医学と看護社、2016）を刊行し、死生学の成果を実践の現場に提供することに務めている。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田薫子、池澤優（センター長）、榊原哲也、清水哲郎（2016年度）、早川正祐（2017年度）、堀江宗正

(2) 特任研究員

大島智靖、田村未希、丁ユリ（2017年度）、山本栄美子

(3) 事務補佐員

安野裕美

3 1 北海文化研究常呂実習施設

1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約 2 万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連続と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カンワヤナラの林の中に 2,500 を超える竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は 1955 年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957 年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967 年からは助手 1 名が文学部考古学研究室から派遣され、1973 年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、准教授・助教各 1 名、有期雇用職員（管理人等）2 名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004 年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。ほかに、2014 年度からは文学部夏期特別プログラムの後半部分が常呂実習施設で開講され、東大の学部学生と海外の学生が遺跡発掘体験などのプログラムを通して交流している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013 年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は 14 冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、2016 年度～2017 年度にかけてもロシア連邦のアムール下流域において、現地の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら発掘調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した 14 冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元竪穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに 2000 年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2017 年度までに 21 回を教えている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

(2) 助教の活動

夏木 大吾

在職期間 2015 年 4 月～

研究領域 先史考古学

主要業績

(論文)

欧文論文誌、Morisaki, K. & Natsuki, D., Human behavioral change and the distributional dynamics of early Japanese pottery, *Quaternary International*, 441, part-B, 91-101, 2017.6

欧文論文誌、Sato, H. & Natsuki, D., Human behavioral responses to environmental condition and the emergence of the world's oldest pottery in East and Northeast Asia: An overview, *Quaternary International*, 441 part-B, 91-101 頁, 2017.6

和文論文誌、夏木大吾「北海道における晩氷期人類の居住生活」『晩氷期の人類社会』六一書房、43-63、2016 年 5 月

(予稿・会議録)

国内会議、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2017年度—沿バイカルにおける更新世・完新世移行期の研究—」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス、2018.3.10

『第19回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、9-11頁、2018.3

国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・市川岳朗、「2017年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス、2018.3.11

『第19回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、27-30頁、2018.3

国内会議、夏木大吾・太田圭・池山史華・舟木太郎・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・廣松滉一・山田哲・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果(第11次)」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス、2018.3.11

『第19回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、39-42頁、2018.3

国内会議、佐藤宏之・夏木大吾、「ミャンマーにおける Anyathian」、第19回北アジア調査研究報告会、東京大学本郷キャンパス、2018.3.11

『第19回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、59-62頁、2018.3

国内会議、夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・佐藤宏之・國木田大・熊木俊朗・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点 2017 年度調査」、第31回東北日本の旧石器文化を語る会、石あえりあ遠野(岩手県遠野市)、2017.12.16

『第31回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、33-40頁、2017.12

国際会議、Daigo Natsuki、Coexistence of the Terminal Upper Paleolithic culture and the Incipient Jomon culture in Hokkaido, Northeastern Japan、22(2)d Suyanggae International Symposium in Sakhalin "The Initial Human Exploration of the Continental and Insular Parts of the Eurasia. Suyanggae and Ogonki"、サハリン国立総合大学(ロシア)、2017.7.8

『22(2)d Suyanggae International Symposium in Sakhalin "The Initial Human Exploration of the Continental and Insular Parts of the Eurasia. Suyanggae and Ogonki" Thesies』、70-71頁、2017.7

国内会議、夏木大吾・國木田大・佐藤宏之・青木要祐・太田圭・増子義彬・熊木俊朗・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点出土の縄文時代草創期石器群」、日本旧石器学会第15回研究発表シンポジウム、慶応大学三田キャンパス、2017.7.2

『日本旧石器学会第15回研究発表シンポジウム予稿集』、38頁、2017.7

国内会議、大貫静夫・佐藤宏之・國木田大・夏木大吾、「北アジアにおける新石器化についての研究—2016年度—沿バイカルにおける更新世・完新世移行期の研究—」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

『第18回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、57-58頁、2017.2

国内会議、夏木大吾・山田哲・中村雄紀・廣松滉一・吉留頌平・太田圭・増子義彬・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果(第10次)」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

『第18回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、25-28頁、2017.2

国内会議、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「2016年度北海道北見市大島2遺跡発掘調査報告」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

『第18回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、29-32頁、2017.2

国内会議、福田正宏・M. Gablirchuk・國木田大・田尻義了・A. Shipovalov・M. Gorshkov・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗、「アムール流域における考古学的調査報告(2016年度)」、第18回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2017.2.19

『第18回北アジア調査研究報告会 発表要旨集』、41-44頁、2017.2

国内会議、夏木大吾・山田哲・中村雄紀・廣松滉一・吉留頌平・太田圭・増子義彬・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡第9・10次発掘調査」、第30回東北日本の旧石器文化を語る会、東北大学、2016.12.17

『第30回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、91-100頁、2016.12

国内会議、夏木大吾・太田圭・増子義彬・青木要祐・熊木俊朗・佐藤宏之・國木田大・本吉春雄、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点」、第30回東北日本の旧石器文化を語る会、東北大学、2016.12.17

『第30回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、101-108頁、2016.12

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

1. 寄付講座活動の概要

本講座は、公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付講座「上廣死生学講座」として平成19年度から第1期5年間の活動を行ったのち、平成24年度から「上廣死生学・応用倫理講座」として寄付講座第2期の活動を行い、平成29年度からは寄付講座第3期の活動を行っている。第1期は、次世代人文学開発センターに属し、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動を行ったが、第2期は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の活動を継いで平成23年度に発足した「死生学・応用倫理センター」に属して、死生学の臨床にかかわる面および応用倫理の領域である臨床倫理を中心に活動を進め、第3期においても継承・発展的に活動している。本講座は特任教授1名、特任准教授1名に加えて、平成28・29年度は上廣倫理財団からの追加寄付により2名の特任研究員を継続雇用することができた。

本講座の統括責任者は榎原哲也教授（哲学）であり、また本講座の上部組織である死生学・応用倫理センターのセンター長は池澤優教授（宗教学）である。この2名に加えて、同センター堀江宗正准教授に、特に関心教育等について協力していただき、活動を進めている。本講座第3期5年間の目的については次のように規定している。

本講座は、東京大学死生学・応用倫理センターの中にあつて、

- (a) 医療・介護の臨床現場を中心とする人間の生活の場において、人生の物語りを生きつつある人々の生活に即した臨床死生学と現実の諸問題を即した倫理的あり方を実践的に研究し、研究成果の社会への還元が現実の人々の人生をより豊かにすることに貢献し、またその還元する活動が同時に研究活動でもあるような実践的学問を展開し、かつ、
- (b) 研究成果を社会に還元する活動として社会人対象の「リカレント教育」を行い、また、学生・院生を対象として、研究を背景とした部局横断型「死生学・応用倫理プログラム」の一翼を担うことを目的とする。

この目的に応じて、本講座の活動は、1)実践的研究活動、2)学部・大学院教育、および3)社会貢献（リカレント教育その他、実践的研究と連動するもの）から成っている。これらに関する平成28-29年度の実績概要は次のとおりである。

1) 実践的研究活動

臨床倫理プロジェクト（臨床死生学の研究還元を含む）として、臨床現場における実践的研究を推進し、臨床倫理検討システムの明確化と研修用カリキュラム化をすすめた（科研費基盤Aを27～30年度得て実施）。研究会用テキストとして長年、改定を繰り返しつつ使用してきた『臨床倫理エッセンシャルズ』を元に、多忙な現場で活用しやすい形を求めて、簡易版臨床倫理検討シートを開発し、全国各地で実施している、医療・介護従事者のための「臨床倫理セミナー」にて紹介し、臨床現場への浸透を図った。臨床倫理セミナーの実施実績と参加者数は下記を参照されたい。平成28年度には全国で延べ約1860名、平成29年度には延べ約2000名の参加者を得た。このうち4か所（札幌、大阪、愛媛、仙台）は回を重ねており、入門編の講義と並行してリピーター向けのアドバンス・コースの講義も提供するようになった。このようにして育った医療・介護従事者が医療現場で臨床倫理の営みを実践することによって日本の医療・介護の質が向上するという見込みが、現実的になってきている。加えて、医療現場で臨床倫理の営みを活性化する役割を担うファシリテーター養成研修会もこの二年間は毎年札幌と大阪で実施した。

高齢者ケアの分野では、人工的水分・栄養補給に関する本人・家族の意思決定を支援する「意思決定プロセスノート」をモデルにして、高齢者の人工透析の導入に関する意思決定を支援する意思決定プロセスノートを、現場の専門家のグループを支援して作成し、平成27年度に刊行したが、平成28年度と平成29年度はそのプロセスノートを用いて、透析に関わる看護師を対象に啓発事業を実施した。

また、平成29年度は、高齢者および高齢期に近づいている人々のための、高齢期を通してのケアについて予め心積りをしておく営みを支援する『心積りノート』の改訂版を作成した。おもな改訂点は、加齢による心身機能および生理的予備能の低下（フレイル/frailty）の評価の導入であった。

さらに、以上の高齢者医療およびケアに関する活動の共通の基礎として、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の理解についての研究と発信を進めた。

上述の理論と方法論に則り、若手研究者による他のトピック（子宮内膜症の治療）についての意思決定プロセスノートの作成も進み、平成29年度に『子宮内膜症で悩んでいるあなたへ — 意思決定プロセスノート』（医学と看護社）として刊行された。

☆臨床倫理セミナー開催実績 ()内は参加者数

札幌	2016年5月29日(125)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
諏訪(長野)	2016年7月2日(130)	諏訪中央病院に協賛
仙台	2016年7月9日(100)	東北大学大学院医学系研究科 緩和ケア看護学研究室と共催
金沢	2016年9月24日(341)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
鹿屋(鹿児島)	2016年10月1日(68)	県民健康プラザ・鹿屋医療センター主催に共催
札幌	2016年11月13日(125)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
松山	2016年12月11日(252)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
大阪	2017年1月7日(540)	臨床倫理事例研究会主催に協力
佐久(長野)	2017年3月5日(100)	佐久総合病院主催のセミナーに協力
久留米(福岡)	2017年3月18日(80)	ちくご緩和研究会主催に協力
札幌	2017年5月28日(135)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
盛岡	2017年7月1日(150)	岩手臨床倫理研究会主催に共催
仙台	2017年7月9日(90)	東北大学大学院医学系研究科 緩和ケア看護学研究室と共催
大阪	2017年7月19日(200)	関西臨床倫理事例研究会主催に協力
諏訪(長野)	2017年8月5日(105)	諏訪中央病院に協賛
金沢	2017年9月9日(360)	北陸地区臨床倫理事例研究会主催に協力
松山(愛媛)	2017年10月14日(232)	愛媛地区臨床倫理事例研究会主催に協力
佐久(長野)	2017年10月21日(70)	佐久総合病院主催のセミナーに協力
大阪	2017年11月3日(155)	関西臨床倫理研究会主催に協力
札幌	2017年12月10日(172)	北海道臨床倫理研究会主催に共催
大阪	2018年1月13日(240)	関西臨床倫理事例研究会主催に協力
久留米(福岡)	2018年3月11日(110)	ちくご緩和研究会主催に協力

2) 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」への参加

引き続き学部横断型の教育プログラムに貢献する授業を数多く提供し、また、コア授業の一つである「死生学概論」については本講座スタッフが企画・運営を担当した。

平成28年度

堀江他	死生学概論〔死生学の射程〕(清水・会田各1回担当)	夏学期	木曜2限
池澤他	応用倫理概論〔応用倫理入門〕(会田は1回担当)	夏学期	金曜3限
会田	死生学特殊講義〔死生学の射程(続)〕	冬学期	木曜2限
清水・会田	死生学演習I〔臨床死生学・倫理学の諸問題〕	通年	水曜5限 不定期
清水	応用倫理特殊講義〔臨床倫理学原論〕	夏学期	水曜3限
清水	死生学特殊講義〔臨床死生学原論〕	冬学期	水曜3限
会田	死生学演習IV(1)〔生命倫理の現在(1)〕	夏学期	火曜5限
会田	死生学演習IV(2)〔生命倫理の現在(2)〕	冬学期	火曜4限
会田	死生学特殊講義〔質的研究法〕	夏学期	火曜4限

平成29年度

堀江他	死生学概論〔死生学の射程〕(会田・早川各1回担当)	夏学期	木曜2限
池澤他	応用倫理概論〔応用倫理入門〕(会田は1回担当)	夏学期	金曜3限
会田	応用倫理演習〔生命倫理学と臨床倫理学の現在〕	冬学期	火曜5限
会田	死生学特殊講義〔臨床老年死生学入門〕	冬学期	木曜3限
会田	死生学演習〔質的研究法〕	夏学期	火曜5限
会田・早川	死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題〕	通年	水曜5限 不定期
早川	死生学特殊講義〔共感とケアの哲学〕	夏学期	木曜3限
早川	死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	冬学期	木曜4限
早川	死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	冬学期	金曜5限

3) 社会貢献

リカレント教育「医療・介護従事者のための死生学」として年間2回のセミナーや、本講座が主催ないし協力する特別開催の行事(海外の研究者等講演会含む)、エンドオブライフ・ケアに関するシンポジウム、各地で行う臨床倫理セミナーとファシリテーター養成研修(上述)、「臨床死生学・倫理学研究会」等の研究会を催して、研究成果の

社会還元に努めた。さらに、講座特任教員の清水と会田は招待講演等の依頼を多数こなした。また、平成29年度から本講座特任教員となった早川も、医学・看護学系団体からの招聘にて講演を行う機会が増えてきた。講演のテーマはいずれにおいても研究成果を核とするものに他ならない。

上記の行事のうち、特筆すべきは平成28年度末に開催したシンポジウム・清水特任教授最終講義「臨床倫理の明日を拓く——本人・家族とともに考える臨床倫理」(参加者約930名)である。これは本講座第二期の総まとめおよび清水特任教授の本講座での集大成として企画された。清水特任教授は臨床現場の医療ケア従事者との30年余にわたる協働によって、日本の文化を十分認識しつつ臨床倫理の理論と方法論を開発してきたが、その集大成の講義に多くの参加者が熱心に聴き入った。また、関連するシンポジウムでは、日本の医療界で最重要課題の1つとされているアドバンス・ケア・プランニングについて、国内の各領域のトップリーダーにディスカッションして頂き、ACPを含め臨床倫理の将来を展望した。参加者数をみるだけでも、本講座のシンポジウムが一般市民および医療・ケア関係者に支持され、期待されていることが明らかである。

★リカレント教育セミナー★

◇ 夏季セミナー

2016年7月30日(土) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室

1. 死生学コア 池澤優「死生学とは何か——その成立・現在・未来」(入門コース)
2. 死生学トピック 堀江宗正「トニー・ウォルターの悲嘆文化論」(アドバンスト・コース)
3. 臨床死生学コア 清水哲郎「臨床に生きる死生学」(入門コース)
4. 臨床死生学トピック 会田薫子「高齢者ケアにおける意思決定支援——ACPにフレイルの知見を活かす」(アドバンスト・コース)
5. 臨床死生学トピック2 小野沢 滋(みその生活支援クリニック院長)
「都市部の高齢化の進展と今後の私たちの進む方向」(入門・アドバンスト共通)
6. 臨床死生学トピック3 榊原哲也「ケアすることとケアされること——現象学の知見から」(入門・アドバンスト共通)

◇ 冬季セミナー 第1回関西臨床倫理セミナー

2016年12月18日(日) 午前・午後 大阪市立総合医療センター さくらホール

1. 講義 進藤喜予(市立東大阪医療センター)「臨床倫理エッセンシャルズ早わかり」
2. 講義 会田薫子「臨床倫理の事例検討 問題の整理・分析」
3. 事例検討(事例紹介・質疑/グループワーク・全体会)
4. 講演 清水哲郎「臨床の人間関係と倫理」
・大阪在住の医師たちがリードするグループのセミナー企画に応じて、臨床倫理プロジェクト主催で開催

◇ 夏季セミナー

2017年9月3日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 法文1号館25・22番教室

1. 死生学コア 池澤優「死生学とは何か——死別の物語りを中心に」(入門コース)
2. 臨床死生学コア 会田薫子「臨床現場で生きる死生学」(入門コース)
3. 臨床死生学トピック 早川正祐「臨床における共感——その複雑さと困難さ」(アドバンスト・コース)
4. 死生学トピック 堀江宗正「孤立と排除の死生学」(アドバンスト・コース)
5. 死生学/臨床死生学トピック 榊原哲也「今でも忘れられない患者さん——いのちに向き合うケアの現象学」(入門・アドバンスト共通)

◇ 冬季セミナー 第2回関西臨床倫理セミナー

2017年12月3日(日) 午前・午後 大阪市立総合医療センター さくらホール

1. 講義 早川正祐「臨床倫理 基礎編」
2. 講義 清水哲郎(岩手保健医療大学学長)「臨床倫理 事例検討の進め方」
3. 事例検討(事例紹介・質疑/グループワーク・全体会)
4. 講義 会田薫子「フレイルと臨床倫理:高齢者医療を考える」

◇ 「医療・介護従事者のための死生学」基礎コース修了のためのレポート書き方セミナー(初級)

2017年7月30日(日) 午前・午後 東京大学本郷キャンパス 法文2号館2番大教室

講師:早川正祐

★シンポジウム★

◇ 臨床倫理シンポジウム・清水哲郎特任教授最終講義

「臨床倫理の明日を拓く——本人・家族とともに考える臨床倫理」

・日時：2017年3月4日（土） 13時～17時

・会場：東京大学本郷キャンパス 安田講堂

・シンポジスト

西川満則（国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域連携診療部／地域医療連携室長）「意思決定支援の臨床倫理 ——現状と展望」

江口恵子（相良病院 副院長・総看護部長）「進行再発乳がん患者に対する ACP 実践を通しての考察」

田村里子（WITH 医療福祉実践研究所 がん・緩和ケア部部长、MSW）「意思決定支援の臨床倫理 ——現状と展望 ソーシャルワーカーの立場から」

清水直美（千葉市あんしんケアセンター磯辺 主任介護支援専門員）「コミュニティで支える」

指定発言：栗嶋裕司（本人・家族の立場から）「患者として、患者家族として ——より良い医療に向けて共有したい“個人的な”想い」

座長：会田薫子

・講演

石垣靖子（北海道医療大学名誉教授 看護学）「医療現場で出会った“哲学” ——そして、その意味すること」最終講義

清水哲郎「私たちはどのような社会を創ろうとしているのか——臨床倫理の明日に向けて」

◇ シンポジウム「“引き算”の医療 本当の手厚さへの模索——“足し算”と長寿時代のエンドオブライフ・ケアについて考える」

・日時：2018年3月18日（日）13時～16時30分

・会場：東京大学本郷キャンパス 法文1号館法学部大教室

・主催：東京大学死生学・応用倫理センター上廣講座

・シンポジスト

西山穂（NHK ディレクター）「延命中止は医療のタブーなのか」

三宅康史（帝京大学医学部附属病院 高度救命救急センター長）「治療限界とエンドオブライフ——感謝される救命救急医療を目指して」

高屋敷麻理子（盛岡赤十字病院 がん看護専門看護師・緩和ケア認定看護師）「高齢者のエンドオブライフを支える緩和ケア」

田代志門（国立がん研究センター 生命倫理部 部長）「生命維持治療の「中止」が選択肢となるために必要なこと」

特別発言：有賀徹（独立行政法人労働者健康安全機構 理事長）、清水哲郎（岩手保健医療大学 学長）

座長：会田薫子

☆公開講演☆

◇ ジョナサン・ピュー（Dr. Jonathan Pugh）氏公開講演会

・講演テーマ：“Living a Life of One’s Own: The Nature and Significance of Personal Autonomy in Contemporary Bioethics”

・2016年8月25日（水）16時～18時 東京大学本郷キャンパス 法文2号館第3会議室

同氏はオックスフォード大学上廣応用倫理センターの Research Fellow。上廣倫理財団の企画で来日中に当方が主催して行った。

◇ 有賀徹氏特別公開講演会

・講演テーマ：“救急医療と死生学——超高齢社会・救急医療・地域医療——”

・2016年8月27日（土）13時～15時 東京大学本郷キャンパス 法文2号館1番大教室

同氏は独立行政法人労働者健康安全機構理事長、日本救急医学会前代表理事。

◇ ジョシュア・シェパード（Dr. Joshua Shepherd）氏公開講演会

・講演テーマ：“Consciousness, Value, and Moral Status”

・2017年8月31日（木）16時～18時 東京大学本郷キャンパス 法文2号館第3会議室

同氏はオックスフォード大学上廣応用倫理センターの Research Fellow。上廣倫理財団の企画で来日中に当方が主催して行った。

☆臨床死生学・倫理学研究会☆

[2016年度]

1. 4月20日（水）「心積りノートの開発—上手に老い、最期まで自分らしく生きるために」清水哲郎（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣講座 特任教授）

2. 5月11日(水)「ハイデガーを手がかりとした現象学的看護論の展開可能性」田村未希(東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣講座 特任研究員)
3. 6月1日(水)「ナラティブの可能性」宮坂道夫(新潟大学大学院保健学研究科 教授)
4. 6月22日(水)「最期まで守られる自分らしさと尊厳～がんの「患者会」を通して感じたこと～」緒方真子(神奈川県立がんセンター 患者会「コスモス」世話人代表)
5. 6月29日(水)《事例検討会》急性期病院から療養病院への転院事例 事例提供者:大貫周子(南八王子病院)
6. 7月13日(水)「配偶子ドナーの匿名性」仙波由加里(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター 特任リサーチフェロー)
7. 9月28日(水)「認知症の人が医療を受けるときの意思決定支援」成本迅(京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 教授)
8. 10月26日(水)「専門家の倫理と責任(医師の責任を中心に)」木ノ元直樹(木ノ元総合法律事務所 弁護士)
9. 11月16日(水)「現代青年の“生きづらさ”の実態と自殺対策—調査研究と臨床実践から考える」大塚尚(国際医療福祉大学 総合教育センター 助教 / 学生相談室 臨床心理士)
10. 12月14日(水)「初代米国死生学会・会長 Austin H. Kutscher と口腔ケアに関する研究」阪口英夫(医療法人永寿会 陵北病院 歯科診療部長)
11. 1月11日(水) 冬季特別臨床倫理事例検討セミナー
12. 1月18日(水)「国立がん研究センターにおける臨床倫理プロジェクト」田代志門(国立がん研究センター生命倫理研究室長)

[2017年度]

1. 4月26日(水)「長寿時代の臨床死生学・倫理学」会田薫子(東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座)
2. 5月10日(水)「認知症高齢者の居場所と死に場所について」細井尚人(袖ヶ浦さつき台病院 認知症疾患医療センター)
3. 5月31日(水)「高齢者の薬:ポリファーマシーの危険性とその対策」小島太郎(東京大学大学院医学系研究科 加齢医学講座)
4. 6月28日(水)「選択を迫られるALSの人々への看護師の支援——ゆだねるとき、開かれるとき」渡邊賢治(東京女子医科大学 看護学部 老年看護学)
5. 7月26日(水)「高齢者のエンドオブライフ・ケアにおける人材育成」桑田美代子(青梅慶友病院 看護介護開発室)
6. 9月27日(水)「共依存を取り巻く現代社会の諸問題——ケアの倫理の可能性」小西真理子(国際基督教大学・日本学術振興会特別研究員)
7. 10月18日(水)「特別養護老人ホームにおける看取り介護について」西口翔(湘南鎌倉総合病院 総合内科 医長/横浜市立大学 健康社会医学ユニット 客員研究員)
8. 11月22日(水)「チーム医療に必要な多職種研修の報告——多職種連携コンピテンシーをもとに振り返る」山岸紀子(諏訪中央病院 副看護部長)
9. 12月20日(水)「高齢者医療に関する人格主義倫理学の考え方」秋葉悦子(富山大学経済学部経営法学科 (刑法) 教授)
10. 1月24日(水)「高齢者にとっての「本当の良き医療」とは?——日本在宅救急研究会が目指すもの」小豆畑丈夫(青燈会小豆畑病院 病院長兼救急・総合診療科部長/日本大学医学部 救急医学系救急集中治療医学分野 診療准教授)
11. 2月14日(水)《特別編》「エンドオブライフ・ケアの日中比較」
 - 講演1 「日本における終末期ケアの現状」浜渦辰二(大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室 教授)
 - 講演2 「終末期ケアの日中比較」徐静文(北京城市学院 講師)

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

清水 哲郎	特任教授(～平成28年度)	哲学、臨床倫理学・臨床死生学、西欧中世思想
会田 薫子	特任准教授(～平成28年度)	
	特任教授(平成29年度～)	臨床倫理学、医療倫理学、臨床死生学、医療社会学
早川 正祐	特任准教授(平成29年度～)	行為論、倫理学、臨床死生学

(2) 特任研究員

山本 栄美子 特任研究員 宗教学、倫理思想

田村 未希 特任研究員 哲学 (現象学)

(3) 事務補佐員

安野 裕美

3 3 集英社 高度教養寄付講座

1. 寄附講座活動の概要

「集英社高度教養寄付講座」は、本郷キャンパスおよび柏フューチャーセンターにおいて学部後期課程と大学院生を対象とした後期教養および高度教育授業を展開し、成績評価やアンケート等を通してその効果を検証しながら、分野を超えた「教養としての人文科学」の新しい形のあり方を研究するために、平成27～29年度の3年間の期間にて設置された。

それぞれ文学部一般講義（大学院共通科目）と新領域創成科学研究科特別講義として、後期教養講義および高度教養講義を展開するとともに、文学部において各タームに公開講演会1回を開催している。また、柏フューチャーセンターでもS1とA2タームの講義の最終回に柏商工会議所と連携して公開講演会を開催した。

後期教養科目（学部院共）・高度教養科目（院のみ）開設講義の一覧

平成28年度

<文学部での一般講義（大学院共通科目）>

授業科目	担当教員		開講ターム	単位数	曜時	履修者人数											
	職名	氏名				合計	学部										
							文学部	法学部	経済学部	農学部	工学部	教養学部	教育学部	総合文化	工学系	理学系	
英語圏小説を訳す/読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜2限	22(11)	11	3	1			5	1	1			
英語で小説を読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜4限	21(7)	14		3			3		1			
ヨーロッパ風景文化史	特任准教授	河村 英和	S1+S2	2	木曜5限	34(11)	23	5	3	1	1		1				
ヨーロッパ建築文化史	特任准教授	河村 英和	A1+A2	2	木曜5限	49(17)	32	3	4			4	1	1		4	
英語探偵小説の始まり	本部特任教授	高橋 和久	S1+S2	2	木曜4限	193(70)	123	17	31	2	4		14			2	
古琉球から世界史へ	講師	村井 章介	S1+S2	2	火曜5限	43(15)	28	4	5	1	3	1					1
ルネサンス美術の世界	講師	諸川 春樹	A1+A2	2	火曜3限	165(69)	96	12	25	4	10	2	14	1	1		

学部3・4年生

()内の数字は他学部的人数

授業科目	担当教員		開講ターム	単位数	曜時	履修者人数							
	職名	氏名				合計	大学院						
							人文社会	学際情報	総合文化	工学系	医学系	情報理工	
英語圏小説を訳す/読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜2限	3	3						
英語で小説を読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜4限	6(1)	5	1					
ヨーロッパ風景文化史	特任准教授	河村 英和	S1+S2	2	木曜5限	12(6)	6		2	3	1		
ヨーロッパ建築文化史	特任准教授	河村 英和	A1+A2	2	木曜5限	15(10)	5		2	8			
英語探偵小説の始まり	本部特任教授	高橋 和久	S1+S2	2	木曜4限	11(2)	9		1			1	
古琉球から世界史へ	講師	村井 章介	S1+S2	2	火曜5限	7	7						
ルネサンス美術の世界	講師	諸川 春樹	A1+A2	2	火曜3限	9(3)	6			3			

大学院

※文学部と人文社会系研究科は、学部・大学院共通科目として開講

()内の数字は他研究科的人数

<フューチャーセンター推進機構での新領域創成科学特別講義>

授業科目	担当教員		開講ターム	単位数	曜時	履修者人数
	職名	氏名				
新領域創成科学特別講義Ⅰ 〔「美術の見方、考え方」〕	教授 准教授	小佐野 重利 高岸 輝	S1	2	土曜3・4限	21
新領域創成科学特別講義Ⅱ 〔「現代アジア文化論」〕	教授	小島 毅	S2	2	土曜3・4限	17
新領域創成科学特別講義Ⅲ 〔「イタリア都市文化史」〕	特任准教授	河村 英和	A1	2	土曜3・4限	5
新領域創成科学特別講義Ⅳ 〔「見える不思議：科学的心理学の成立から視覚神経科学へ」〕	名誉教授	立花 政夫	A2	2	集中	6

※新領域創成科学研究科共通科目として開講

平成29年度

<文学部での一般講義（大学院共通科目）>

授業科目	担当教員		開講ターム	単位数	曜時	履修者人数										
	職名	氏名				合計	学部									
							文学部	法学部	医学部	経済学部	農学部	工学部	教養学部	教育学部	国際本部	
英語圏小説を訳す/読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜2限	27	18	1		3	2		2	1		
英米短編小説を読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜4限	25	18	1		3	1		1	1	1	
歌舞伎への招待	特任教授	古井戸秀夫	S1+S2	2	金曜3限	127	63	8		32	3	10	3	6	2	
日本の演劇と舞踏	特任教授	古井戸秀夫	A1+A2	2	金曜3限	95	67	3		4	2	2		16	1	
ヨーロッパ自然・風景史論	特任准教授	河村 英和	S1+S2	2	木曜5限	55	42	1		2	4	3	3			
ヨーロッパ都市・建築史論	特任准教授	河村 英和	A1+A2	2	木曜5限	39	31	2		4	1			1		
英語探偵小説をめぐる批評言説	本部特任教授	高橋 和久	S1+S2	2	木曜4限	118	91	9		7	2	5		4		
古琉球から世界史へ	名誉教授	村井 章介	S1+S2	2	火曜5限	57	31	8	1	12	1	2		2		
教養としての西洋美術の主題	玉川大学教授	諸川 春樹	A1+A2	2	火曜3限	217	141	27		15	7	5	1	21		

学部3・4年生

授 業 科 目	担 当 教 員		開 講 タ ー ム	単 位 数	曜 時	履 修 者 人 数											
	職 名	氏 名				合 計	人 文 社 会	理 学 系	工 学 系	農 学 生 命 学 科	経 済 学	学 際 情 報	総 合 文 化	情 報 工 学	公 共 政 策	新 領 域	
英語圏小説を訳す/読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜2限	4	2		1				1				
英米短編小説を読む	特任教授	柴田 元幸	A1+A2	2	水曜4限	8	6					1	1				
歌舞伎への招待	特任教授	古井戸秀夫	S1+S2	2	金曜3限	14	8	1	3	1					1		
日本の演劇と舞踏	特任教授	古井戸秀夫	A1+A2	2	金曜3限	6	5						1				
ヨーロッパ自然・風景史論	特任准教授	河村 英和	S1+S2	2	木曜5限	11	5				3		1	2			
ヨーロッパ都市・建築史論	特任准教授	河村 英和	A1+A2	2	木曜5限	8	1			4		1	1				1
英語探偵小説をめぐる批評言説	本部特任教授	高橋 和久	S1+S2	2	木曜4限	14	10			2				1	1		
古琉球から世界史へ	名誉教授	村井 章介	S1+S2	2	火曜5限	4	3						1				
教養としての西洋美術の主題	玉川大学教授	諸川 春樹	A1+A2	2	火曜3限	26	9			11			2	1	1	1	1

※文学部と人文社会系研究科は、学部・大学院共通科目として開講

<フューチャーセンター推進機構での新領域創成科学特別講義>

授 業 科 目	担 当 教 員		開 講 タ ー ム	単 位 数	曜 時	履 修 者 人 数
	職 名	氏 名				
新領域創成科学特別講義 I ('美術の見方、考え方')	名誉教授 准教授 神戸大学准教授	小佐野 重利 高岸 輝 増記 隆介	S1	2	土曜3・4限	15
新領域創成科学特別講義 II ('ギリシャの古典、中国の古典')	教授 教授	小島 毅 納富 信留	S2	2	土曜3・4限	9
新領域創成科学特別講義 III ('ヨーロッパ建築文化史')	特任准教授	河村 英和	A1	2	土曜3・4限	7
新領域創成科学特別講義 IV ('認知・運動の学習と脳のネットワーク')	教授	今水 寛	A2	2	土曜3・4限	17

※新領域創成科学研究科共通科目として開講

公開講演会 (本郷キャンパス)

平成 28 年度 寄付講座講演会・座談会

第 5 回講演会 平成 28 年 5 月 22 日(日) スティーヴン・ミルハウザー朗読会

司会・通訳 柴田元幸(文学部特任教授)

柏の葉サテライト講演会 平成 28 年 5 月 28 日(土) ミケランジェロ — 作品と神格化された生涯 —

講 師 小佐野重利(文学部教授)

第 6 回講演会 平成 28 年 7 月 2 日(土) 詩の翻訳 — 欧・漢・和

講 師 齋藤希史(文学部教授)

第 7 回講演会 平成 28 年 11 月 19 日(土) パスカル『パンセ』を読む

講演者 塩川徹也(東京大学名誉教授)

対話者 野崎敏(文学部教授)

第 8 回講演会 平成 28 年 12 月 10 日(土) 中国語に敬語があるか? — 呼び掛けと微笑みのポライトネス —

講演者 木村英樹(東京大学名誉教授)

平成 29 年度 寄付講座講演会・座談会

第 9 回講演会 平成 29 年 6 月 4 日 高度教養教育の現状と課題

講演者 ユキオ・リピット(ハーヴァード大学教授)

熊野純彦(文学部教授)

マリアンヌ・シモン及川(文学部准教授)

第 10 回講演会 平成 29 年 7 月 29 日 和歌・短歌を楽しむ

講演者 久保田淳(東京大学名誉教授)

聞き手 渡部泰明(文学部教授)

第 11 回講演会 平成 29 年 11 月 19 日 ロックミュージックと現代思想

講演者 鈴木泉(文学部准教授)

第 12 回講演会 平成 29 年 12 月 9 日 ヨーロッパの文学

講演者 逸身喜一郎(東京大学名誉教授)

大宮勘一郎(文学部教授)

阿部賢一(文学部准教授)

公開講演会 (柏フューチャーセンター)

S1 ターム 平成 29 年 5 月 27 日 ラファエッロ — 教皇たちに寵愛された「美しき様式の完成者」

小佐野重利(東京大学名誉教授)

2. 構成員

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

柴田元幸 特任教授

古井戸秀夫 特任教授 29 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

河村英和 特任准教授

(2) 助教の活動

西川賀樹 第I部 5-(4)-B 情報メディア室 参照

3 4 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、平成7年4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成5年度より部分的に試行されてはきたが、平成7年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートすることになったのである。

発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられた。そして、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3~4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められてきた。なお平成12年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

このプロジェクトは、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

平成11年度からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた〈情報と文化：文化資源と人文社会学〉は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかにも、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成14年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトが、新しい研究領域の開拓と同時に、学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになっていったことは特筆すべき事態であったと言える。3.11に関する議論は、平成24年、25年と、継続的に行われ、多分野交流の特筆が大いに発揮される内容となった。また、平成25年度からは身体論について、平成26年度からは日本の近代学術受容の問題について扱うプロジェクトが始まり、いずれも平成28年度、平成29年度に継続開講しており、学生への教育的効果をあげている。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年に数回ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

平成28年度（2016年度）・平成29年度（2017年度）に開講されたプロジェクトは以下の通り。

平成28年度（2016年度）

- 東京大学草創期の授業再現3（葛西康徳）
- リズムの諸問題4 リズムと芸術（鈴木泉）

平成29年度（2017年度）

- 東京大学草創期の授業再現4（葛西康徳）
- リズムの諸問題5 リズムと科学（鈴木泉）

35 朝日講座

朝日講座は、朝日新聞社の寄付によって2011年度から文学部において開講されている学部横断型の授業である。2011年度からの5年間は「知の冒険——もっともっと考えたい、世界は謎に満ちている」をタイトルとして、全学部共通科目のさきがけとしての機能を果たしてきた。そして2016年度からはタイトルを「知の調和——世界をみつめる 未来を創る」に改め、朝日講座第Ⅱ期としてさらに5年間延長された。

朝日講座では、文学部教員が授業内容の企画構想とコーディネートを行い、文学部教務係が履修登録などの事務を取り扱う。また、東京大学大学総合教育研究センター（以下大総センター）に朝日新聞社寄付研究部門が設置され、講座運営を担当する専任の教員がおかれている。歴任者はいずれも人文社会系研究科の出身で、2011年度～2013年度は冨澤かな特任助教（宗教学）、2014年度～2015年度は白岩祐子特任助教（社会心理学）2016年度～2017年度は開田奈穂美特任助教（社会学）が務めている。毎回の授業では、多様な学問分野からの講師を招き、学生が主体的に議論に取り組むという新しい試みを取り入れてきた。2013年度からは、履修者が担当の回に分かれて事前に予習をしたうえで授業に臨み、グループワークのリーダーを務めるアクティブラーニングの形式を採用している。専門分野を異にする学生間での議論や学びが実現されていることに加えて、TAが予習や議論の補助に入るなど、大きな役割を果たしていることも、この朝日講座の特長といえる。

このように朝日講座は文学部科目でありながら、全学部後期課程の履修と、大学院生の振替履修を対象とし、文理の枠組みを超えた広い視点を養うことをめざしてきた。

2016年度は、赤川学准教授が担当し、「守るべきもの、変えるべきもの」というテーマを設けた。常に変革を求められる時代の中で、何を守り、何を变えるべきかを様々な分野から議論した。

2017年度は、渡部泰明教授が担当し、テーマを「(偶然) という回路」とした。必然性を見出す営みと考えられがちな研究において、偶然をどう考えるのか、各分野の講師を招いて議論した（各年度の講義情報は文末を参照）。

このように、全学的な教育改革に資する新たな授業の形を提示することが朝日講座の最大の目的であるが、同時にその教育成果を広く社会に還元、共有することも重視している。Webサイト (<https://www.u-tokyo-asahikouza.jp/>) 及びツイッター（東京大学朝日講座 @Asahi_Koza）を活用して講義情報を発信し、また毎年多数の講義を公開講義として一般からの聴講者を受け入れている。さらに、2012年度からは試行的に希望する高等学校にリアルタイム配信を行うなど、開かれた形態の授業を模索している。高校への配信にあたっては、遠隔講義システム「UTOP」を利用することで、保存・再利用の危険なく講師映像と講義資料画像を送信することが可能となっている。担当者間で把握している限りでは、単位を認定する通常講義の学外への同時配信は本学初の試みである。正規履修者の学びを阻害することのないよう配慮しつつ、2016年度は6校、2017年度は5校への配信を行った。また、授業の内容については映像記録を残し、著作権処理と編集を加えた講義資料と映像をUTokyo OCW (<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>) 上で順次インターネット公開している。撮影・配信業務は、大総センターの特任助教および技術専門職員が担当し、TAが補助を行っている。

以上のように、朝日講座は、実験的・試行的な要素を多く含む新しい授業である。学部三年生以上の学生にとって意義のある教養教育として、一定の役割を果たすように努力してきたと同時に、東京大学の教育を世間一般に開く公開するための窓口としての役割を担っている。学生に質の良い授業と学びの機会を提供すると同時に、その内容を一般聴講者や高校生にも公開していくために、いっそうの工夫と模索を行っている。

各年度の講義（2016年度～2017年度）

2016年度 テーマ：「守るべきもの、変えるべきもの」

- 第1回 9月30日 赤川学（人文社会系研究科 社会学）【公開講義】
「人口減少社会を生きる」
- 第2回 10月14日 藤本隆宏（経済学研究科 ものづくり経営研究センター）【公開講義】
「現場から見る日本産業の過去・現在・未来」
- 第3回 10月21日 中内啓光（医科学研究所 幹細胞治療研究センター、スタンフォード大学医学部幹細胞生物学・再生医療研究所）【公開講義】
「iPS細胞技術が可能にする新しい医療」
- 第4回 10月28日 川島博之（農学生命科学研究科 農学国際専攻）【公開講義】
「21世紀における世界の食料生産：食糧危機をあおってはいけない」

- 第5回 11月11日 西村幸夫(工学系研究科 都市計画)【公開講義】
「都市における守るべきものと変えるべきもの」
- 第6回 11月18日 高野誠鮮(立正大学客員教授、新潟経営大学客員教授、妙法寺住職、総務省大臣嘱託 地域力創造アドバイザー)
「可能性の無視は最大の悪策」
小林真理(人文社会系研究科 文化資源学)
「地域の文化環境と地方自治体の役割: 守るべきものと変えるべきもの」
- 第7回 11月25日 牧原成征(人文社会系研究科 日本史学)
「歴史の遺したものをみつめる」
- 第8回 12月2日 國吉康夫(情報理工学系研究科 知能システム情報学)【公開講義】
「ロボットは心を持つか」
- 第9回 12月9日 西村義樹(人文社会系研究科 認知言語学)【公開講義】
「“文法”に意味はあるのか?」
- 第10回 12月16日 西村陽一(朝日新聞社常務取締役編集担当、ザ・ハフィントン・ポスト・ジャパン株式会社代表取締役)
「新聞の過去・現在・未来」
丹羽美之(情報学環 社会学・メディア研究)
「アーカイブが変えるテレビの未来」
- 第11回 1月6日 頼住光子(人文社会系研究科 倫理学)【公開講義】
「日本思想における“不易”と“流行”」

2017年度 テーマ:「〈偶然〉という回路」

- 第1回 9月27日 渡部泰明(人文社会系研究科 日本語日本文学)【公開講義】
「偶然と日本古典文学」
- 第2回 10月4日 西成活裕(先端科学技術研究センター 渋滞学)【公開講義】
「渋滞という必然」
- 第3回 10月11日 三浦俊彦(人文社会系研究科 美学芸術学)【公開講義】
「偶然の論理学: 可能世界と主観確率」
- 第4回 10月18日 阿部誠(経済学研究科 マーケティング)【公開講義】
「「偶然」と人間の合理性: 行動経済学からの示唆」
- 第5回 10月25日 白岩祐子(人文社会系研究科 社会心理学)【公開講義】
「犯罪被害者のための正義: 人間と法のダイナミズム」
- 第6回 11月1日 菅豊(東洋文化研究所 民俗学)【公開講義】
「フィールドワークでは偶然はお避けられない: 幻影化する無形文化遺産という言葉をめぐる」
- 第7回 11月8日 北野隆一(朝日新聞社編集委員)【公開講義】
「「偶然」のなかの意志—同時代史の現場で」
加藤陽子(人文社会系研究科 日本史学)
「日本近代史における「偶然」」
- 第8回 11月29日 鈴木泉(人文社会系研究科 哲学)【公開講義】
「必然主義の哲学—スピノザと共にあまりに人間的な偶然性概念を消去しよう—」
- 第9回 12月6日 酒井邦嘉(総合文化研究科 言語脳科学)【公開講義】
「創造性を生み出す脳の言語能力」
- 第10回 12月13日 野田秀樹(多摩美術大学、東京芸術劇場芸術監督)
「演劇と偶然①」
- 第11回 12月20日 楯岡求美(人文社会系研究科 スラヴ語スラヴ文学)【公開講義】
「演劇と偶然②」
- 第12回 1月10日 蓑輪顕量(人文社会系研究科 インド哲学)【公開講義】
「偶然と必然は表裏一体か・・・仏教者の見た世界」